

三河大谷派記録 ― 近世・近代東本願寺教団史料 ―

青 木 馨 ・ 安 藤 弥

(一)

『三河大谷派記録』は、真宗大谷派暮戸教会（岡崎市暮戸町）の所蔵で、現在は岡崎市美術博物館に寄託されている。縦二六・四センチメートル、横一七・三センチメートル、厚一七・〇センチメートルの寸法で装丁は列帖装である。途中や末尾に墨付のない箇所が何度もあるが、およそ五三三丁の大部におよび、誂えの木箱に収納されている。

表紙には「一、三河大谷派記録 三河国碧海郡」「天明以来□正」「」と書かれた紙片が貼付されているが、これはかなり後になって貼られたものと考えられる。また、木箱にも貼紙があり、「第十二号 天明年度以来記録」と記されている。「三河大谷派記録」という書名の由来は定かでないが、江戸時代後期の天明八年（一七八八）

から実に昭和四十五年（一九七〇）に至るまでの三河東本願寺門徒の動向について、暮戸教会を中心に記録したものであり、三河の大谷派教団の歴史を知る上で貴重な史料である。

暮戸教会は、はじめ「暮戸会所」と称し、天明八年（一七八八）正月晦日の京大火による東本願寺の焼失とその再建にあたって、三河東本願寺門徒の相談施設として設置されたものである。まず天明八年十一月より、東海道池鯉鮒（知立）宿の山形屋に「示談所」が置かれ、五年後の寛政四年（一七九二）二月より称念寺に移された（知立会所）。続いて、同年十一月に岡崎・知立の中間地暮戸にも「暮戸出張会所」が設置されたが、双方の相談の結果、「知立・暮戸両会所」体制となった。その後、時期は定かでないものの、暮戸一箇所となっていたようである。この暮戸会所（のち説教場・教会と改称）が、明治二十二年（一八八九）に

三河別院が建立されるまで、三河門徒の中心的な結集拠点として、きわめて大きな役割を果たしてきた。奇しくも、東本願寺は、この後さらに三度も焼失し、百年余の間に四度の再建を繰り返すことになるが、そのたびに三河門徒は暮戸会所に結集し、本山再建に多大なる尽力を行ってきたのである。

さて、本史料は、記録内容と体裁により大きく四分類することができ。第一は天明八年の東本願寺焼失による一回目の再建（寛政度再建）に関するもので、これが本史料全体の約七割を占める。ただし、冒頭には「両本山御無祿の由来」として、本願寺の東西分派により教如を支持した徳川家康による寺地提供と無祿の縁由が記され、東本願寺歴代が列挙されている（一丁オ〜九丁ウ）。その後、寛政度再建に関する記述がはじまる（一一丁オ〜三四二丁オ）。

第二は、文政六年（一八二三）焼失の二回目の再建（文政度再建）に関する記事で、全体の約一割程である（三七五丁ウ〜四三二丁ウ）。

第三は、文政度の両堂落慶の記事以降、昭和三十六年（一九六一）の東本願寺における親鸞七百回御遠忌までの記事で、簡略な簡条書き形態の記載になっている（四三九丁オ〜五〇五丁ウ）。この部分の大半は、長い年月間のことから、後にまとめて記載したものと考えられる。

第四は、暮戸教会における親鸞七百回御遠忌や、昭和四十五年（一九七〇）の殉教者石川台嶺師百回忌法要についての記事で、この部分はかなり詳細に記されている（五〇六丁ウ〜五三三丁オ）。記事はここまでで、

末尾は「各町内別志納金並二人員仕訳」の一覧表が付されている（今回この部分の翻刻は割愛した）。

このように、記載内容にはかなりの濃淡が見られるが、本史料からは従来、知られていなかった多くの史実が浮かび上がってくる。とくに、近世後期の東本願寺の焼失・再建に関する地方の真宗門徒の動向が事細かに知られる点で、史料的価値は絶大である。今回はじめて本史料の全文を翻刻紹介するにあたって、以下その概要に触れ、後の本格的検討のための手がかりとしたい。なお、参考資料として九〇・九一頁に【東本願寺近世後期・近代法主（門首）帶年表】【法主（門首）一覧】【略系図】【関係地図】を掲げた。

(一)

まず、本史料の中心部分を占める東本願寺の天明焼失・寛政再建についてみていく。

本山焼失の報が全国各地の門徒に伝わるや、その支援体制が、それほど時間を要さず、立ち上げられていくが、三河門徒の動きも早い。京大のちようどそのとき、三河より青野本光寺・東浦東正寺・羽栗順因寺が上京しており、門跡乗如（東本願寺第十九代）の本山から大谷・山科への退去に御供したという。焼失後の二月下旬よりは、三河から熊村安養寺・荻谷正覚寺・高津波金勝寺が在京して種々の手伝いを始め、さら

に三河國講法中が上京して、寺内白砂に拠点となる「御小屋」を頂戴し、焼失した本山境内の焼跡片付けに従事していく。「寺内御小屋」の始まりは河内・大坂・伏見・近江・三河の五か国であったという。三河からの手伝人の人数としては、一年に延べ二万人前後とされ、天明八年（一七八八）から寛政六年（一七九四）までは確かな記録によると記されている。

三河国内における支援体制の整備としては、まず前述の知立・暮戸両会所が設置されている。ただし、本史料では、知立に続き新たに暮戸にも会所が設立されていくことについての経緯はほとんど語られておらず、どのような方途で土地確保や堂宇建築がなったかなどはまったく触れられてはいない。次いで再建資金調達のための募財手段として、一錢講が立ち上げられた。

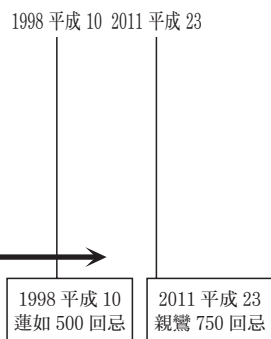
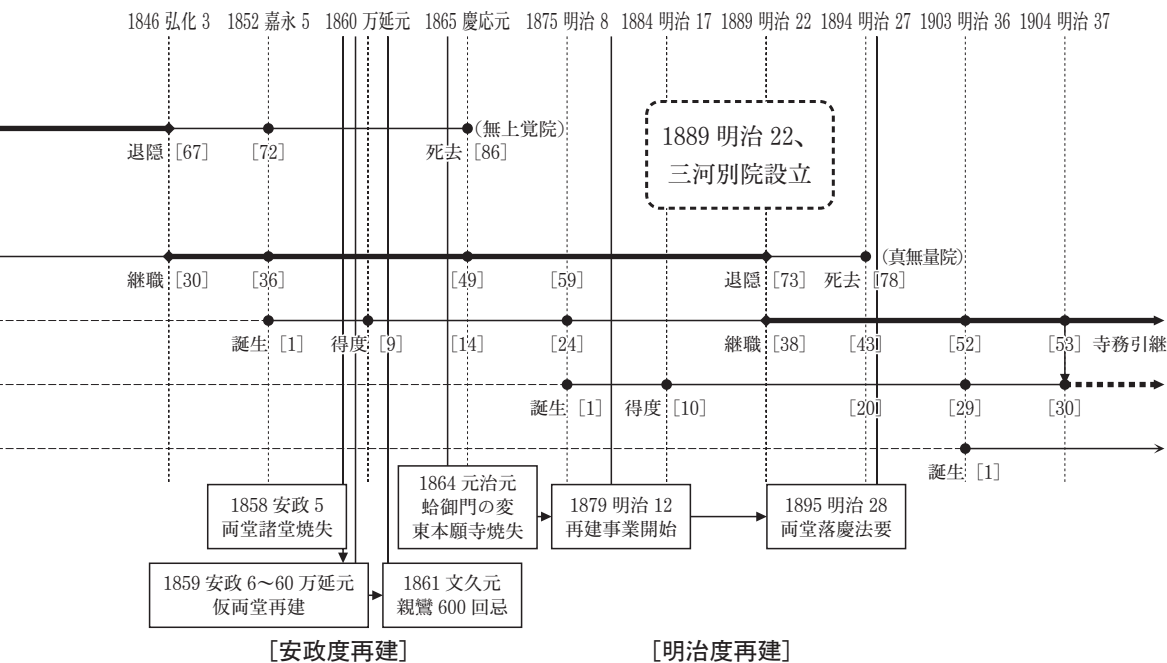
この一錢講は、後に報謝講と改称する募財のための講で、寛政三年正月より始められ、毎月一回、延べ百二十三か寺を会所として法座を展開し、三河地域の掛銭を持ち寄り、十年間に金五千九百五両余、錢六四七文を集めた。さらに女人講が簪・貴金属・着物等を売却した四一七両余も報謝講へ加えられたことが記されている。また、寺院が中心となったこの報謝講とは別に、柱志として、「一列元方衆」といわれた有力門徒らによる多額な寄付金も集められた。

寛政度再建における三河門徒の尽力は、こうした巨額の募財にとどまらず、結成された十五組（池鯉鮒組・箕輪組・吉良組・宝内組・豊川組・

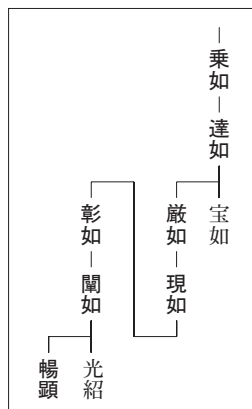
乙川組・高力組・山内組・小川組・新郷組・高落組・矢作組・東城組・岡崎組・梅ヶ坪組）による懇志の手伝いや、再建用材の調達にもあらわれた。とくに、信州遠山（長野県下伊奈郡）の深山における夥しい材木の伐り出しが注目される。それは寛政元年（一七八九）十一月より始められ、遠江国浜松から北上して山入見分、そして伐り出しが行われた。知立より三十四里の遠隔の地において、一万七千三百五本もの材木を伐り出し、天竜川河口の掛塚まで下り、そこから京都まで海送したのであった。

本史料には、伐り出しに関する門徒の従事体制も事細かに記され、また、信州門徒との交流や、それにまつわる法宝物縁起なども掲出されており興味深い。三河門徒により調達された材木は、両堂用材の約六割といわれ、寛政度再建全体からも偉業として高く評価された。これについてはすでに当時から京都においても広く顕伝されたようで、いくつかの史料が残っている（後述）。

本山再建は主に寛政年間に全国門徒の懇志・奉仕によって精力的に進められたが、本史料にはその経緯が記されるのみならず、幕府からの通達や、各国門徒が本山のどの部分の費用を担当したかという記述、本山におかれた各国門徒の小屋改順、あるいは「御影堂児屋組寸法帳写」なども掲出されている。とくに「御影堂児屋組寸法帳写」は建築史的観点からしたいへん貴重な史料であろう。また、それらの記述に相前後して、再建に関わった三河門徒らの心境を述べた小歌が膨大に掲載されており、その内容から、彼らの再建事業に対する心意気がかがわれる。



【略系図】



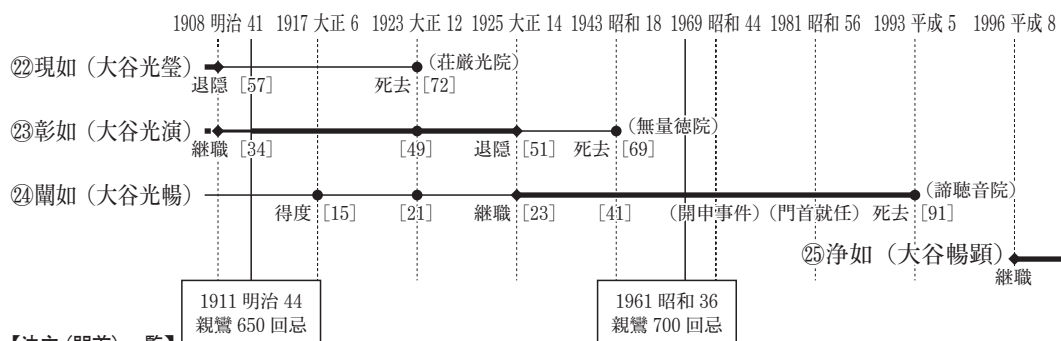
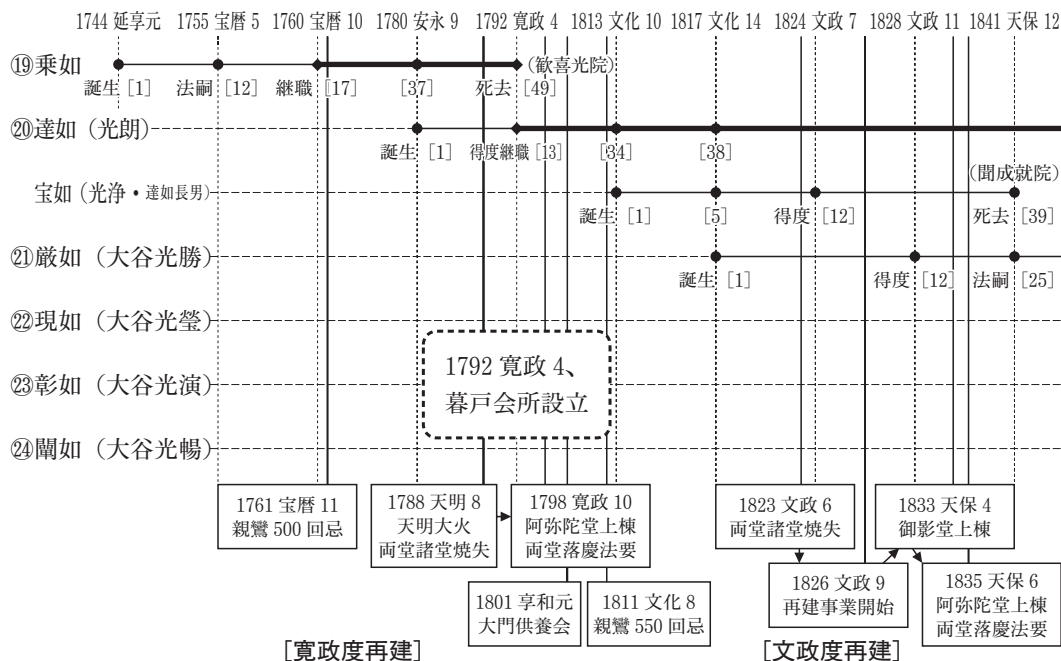
【関係地図】



(白地図 Ken Map Ver 8.2 を用いて作成し、手を加えた)

【東本願寺近世後期・近代法主（門首） 帶年表】

『三河大谷派記録』（解説）



【法主（門首）一覧】

歴代・法名	生没年	在職期間	院号	諱
19 乗如	1744 (延享元) 11.9~ 1792 (寛政 4) 2.24	1760 (宝暦 10) 7.11~ 1792 (寛政 4) 2.22	歆喜光院	光遍
20 達如	1780 (安永 9) 1.20~ 1865 (慶応元) 11.4	1792 (寛政 4) 2.22~ 1846 (弘化 3) 5.22	無上覚院	光朗
21 厳如	1817 (文化 14) 3.7~ 1894 (明治 27) 1.15	1846 (弘化 3) 5.22~ 1889 (明治 22) 10.7	真無量院	光勝
22 現如	1852 (嘉永 5) 7.27~ 1923 (大正 12) 2.8	1889 (明治 22) 10.7~ 1908 (明治 41) 11.10	莊嚴光院	光瑩
23 彰如	1875 (明治 8) 2.27~ 1943 (昭和 18) 2.6	1908 (明治 41) 11.10~ 1925 (大正 14) 10.10	無量徳院	光演
24 闌如	1903 (明治 36) 10.1~ 1993 (平成 5) 4.13	1925 (大正 14) 10.10~ 1993 (平成 5) 4.13	諦聴音院	光暢
25 浄如	1930 (昭和 5) 3.27~	1996 (平成 8) 7.31~		暢頭

さて、焼失より十三年後の享和元年（一八〇一）三月十六日の大門落慶供養会をもって、門徒尽力の両堂・門の再建・造作が終了する。これを期に、再建途中に志なからばで病没した東本願寺前住乗如（歆喜光院）の御影が全国の門末に下付されることになり、三河惣門徒も同年六月に御影を拝領している。「御影様」は三か寺立合いの上、針崎勝鬘寺において紐解が行われ、その後、暮戸会所での披露も実現したが、この経緯をめぐっては、三か寺と、会所に結集した門徒との間に摩擦が生じている。そもそも、両堂再建事業に関しては、三か寺ではなく、もっぱら門徒が主導したものと見られ、このこと自体、近世教団の内部矛盾を示しているよう。それはともかく、会所での紐解も終わって以後、国内各組の披露巡回が始まる。その巡回順と日程も本史料に記されているが、やがてこれが慣例となり一部、現在まで存続する。御影巡回行事の先鞭と考えられる。

ただし、寛政度再建の顛末は御影下付・拝領で終わらなかった。それから十三年後の文化十一年（一八一四）三月、乗如二十五回忌を期して、二十五万両もの借財のあることが発表され、各国引請分が依頼され、三河は一万二千両の負担が記されている。諸堂再建に続き、文化八年（一八一）の親鸞五百五十回御遠忌も重なる膨大な借財となったと見られるが、「諸国へ内仏散銭志之儀」として触れられたものの、この工面には苦勞したようである。なお、文化十二年には、再び門跡達如（東本願寺第二〇代）の三河下向があり、暮戸会所に入興したことが記されて

いる。達如の下向は、寛政八年の江戸参向の際に暮戸会所に立ち寄って以来、二度目であった。

（三）

文化八年の御遠忌から十二年後の文政六年（一八二三）十一月十五日、寺内よりの出火でまたしても東本願寺は焼失してしまう。本史料では「文政六未歲御焼失ノ記序」として記録を始めている（三七五丁ウ）。

失意のうちに再び、再建事業が始まり、「灰かき」に続き、仮御堂・仮御殿の普請など、三河門徒も人員・食料・物資の調達が、暮戸会所を中心に展開される。仮堂建築の記事は事細かに記されているものの、本建築がどのように推移したかは知りえず、記事は先の寛政度再建ほど詳細ではない。とはいえ、三河在地の動向よりも本山での動向に関する記述が多いことも特徴で、例えば、「京三州詰所同行中」の文言から、特定の三河門徒の詰所が存在していたことが知られる。さらに、このとき、中央会所たる「惣会所」も開設され、全国の門末の総合相談的施設が設けられている。これは現在も東本願寺境内に隣接する建物に、その名が残っている。

文政七年正月、再建事業にあたっての門徒の心得「七箇条」が示され、本史料にも収録されている。この第一条は「今般御焼失二付ても弥増二法義御相続肝要二思召候、依之、相続一同二御取持在京中ハ別て無油断、

御法義相互ニ談合可有之事」とあり、以下も「法義して御化導」「示談」の肝要が貫かれており、難事にあってもあくまでも仏法中心のあり方を門末に提示していることが注目される。

本史料では、文政度の仮堂諸建築・遷座、それに係る全国の募財額で記録はいったん中断したようで、以後は形式がまったく変わり、簡略な簡条書きとなる。安政二年（一八五五）六月四日の三度目の焼失にともない、目前の親鸞六百回御遠忌（文久元年・一八六一）のため、急きょ吉田御坊（現豊橋別院）の本堂が阿弥陀堂に転用されたことが見られるが、これは本山側の記録と一致しない。

さらに、元治元年（一八六四）「禁門の変」による洛中大火により、東本願寺は四度目の焼失を蒙る。本史料によれば、再建事業の開始以前の明治六・七年頃に本山十三窓土蔵（現存）、同九年に手水鉢（現存）が、三河より運搬寄進されたと記されている。これは従来知られていなかったことがらであろう（手水鉢については寛政度再建時に切り出したことを示す石碑が岡崎市小呂町の山中に現存する。なお現存の正面手水鉢には銘文等はない）。

ところで、幕戸会所は幕末維新期にはキリスト教対策、廃仏的神道国教化対策についての学習の場ともなっており、明治四年（一八七一）の菊間藩事件（大浜騒動）においても、三河護法会の拠点であったことがよく知られている。同年三月八日、石川台嶺をはじめとする行動派の一行は、この幕戸を出発して菊間藩大浜出張所へ向かったのである。この

時の様子も若干ながら本史料に記されている。とくに、蓮泉寺石川台嶺ら三十余名の血誓連判の有志が大浜を目指すに際し、力石如意寺の老僧が「有志者ニ対シ大音声ヲ以テ、青年若輩ノ血氣ニハヤリ輕拳ノ所為アルヘカラサル旨ヲ延ヘ、之ヲ制止センモノト注意ヲ促カサレシモ、一端騰リシ気焰ハ失セス」という記事は他の史料になく、興味深い緊迫感を伝える。この菊間藩事件にちなみ、幕戸教会では現在でも、石川台嶺ら事件の犠牲となった人びとの追弔法要が毎年五月に勤められている。

さて、維新期の混乱も一段落した明治十二年（一八七九）、本山両堂再建が発示される。明治度再建のスタートである。よく知られているように、明治十四年には三河の幡豆郡古新田（現西尾市志貴野町）に製瓦場が三河門徒の懇志により設置されたが、このときに五〇万円の予算が立てられ、門徒一戸宛十二円五〇銭とする計画であったことは、本史料によってはじめて知られる。ただし、本山側の史料では、製瓦の懇志金は十一万四七〇〇円程で（総支出八万七六〇〇円余）、数字の上では大きな差がある。また製瓦の記事で特筆すべきは、両堂の「鬼瓦」（獅子口）の完成組立それぞれの際に、門跡嚴如（東本願寺第二十一代）が下向していることである（御影堂〓明治十七年、阿弥陀堂〓明治十九年春）。なお、従来、獅子口については必ずしも三河において製造されたと考えられていたわけがなく、今回修理のために降ろされた御影堂のそれを見ても、銘文等は一切刻まれていないことが確認されている。しかし、本史料のこの記事により、両堂の獅子口も三河で製造されたことが知られ、

これが判明した意義は大きいと言えよう。

製瓦の事業は明治二十二年（一八七九）に終了するが、同年には、豊橋別院・赤羽別院・暮戸説教場（会所を改名）を合併一本化し、岡崎に新別院（現三河別院）を設立する案が提示され、十一月四日に「三河別院」の名称が許可されている。これに対し、暮戸説教場に有縁の地元門末は集会談合の上、上京して懇願を行ない、これによって暮戸については従前通りとし、「将来聞法ノ場所トナスヘキ旨ノ御指令下ル」との結論となった。暮戸は、従来の本山再建のための会所から、聞法道場としての説教場へと、その性格を変え、現在まで存続することになったのである。

以降も明治・大正・昭和と、きわめて簡略ではあるが記述は続く。年代等の誤記も散見され、信憑性が懸念される部分もあるが、本史料にのみ語られることが多くあり、近代以降をめぐる史料としてもその価値は決して低くない。

（四）

本史料は、三河という一地方教団の記録ではあるが、十八世紀末から二〇世紀にかけての編年記録という希有な性格を持ち、こうしたものがこされていること自体、貴重である。また、常に中央⇨東本願寺との関係において記述されており、近世後期以降の東本願寺教団史に関する

史料として注目すべき史料である。さらに、一宗派の問題にとどまらず、各時代に生きた人びとの、信仰を基軸としたさまざまな動向が、本史料から具体的に知ることができる。その他にも建築史をはじめ、さまざまな角度からの分析が可能な史料である。東本願寺の両堂再建自体、当時の社会に大きな話題と影響を与えたことは想像に難くないが、この点に関する歴史的研究はまったくこれからという段階である。

ところで、本史料の記述範囲は長いが、その中心は、すでに指摘したように、寛政度再建に関する記録である。これに関連する他の史料と先行研究をいくつか紹介し、むすびにかえたい。

① 『金剛一統志 全』

前半の「金剛一統志」上・中・下三冊と後半の「貫中金剛一統志」始・末二冊と合計五冊で構成されている。筆者は大坂の商人大津屋庄兵衛で、天明大火による東本願寺焼失、八尾御坊移築から、各地の材料運搬寄進や門徒の逸話などを主に記し、後半は作事や各地の篤信門徒の行状、御影堂の規矩などが記される。この記録の特徴は、おそらく全国各地におもむいて取材し、さらにスケッチ（挿画）も数多くあり、寛政度再建の極めて重要な史料である。一九九三年に私家版で全文翻刻が刊行されている。

② 『遠山奇談』

遠州浜松齡松寺の僧が、同行門徒らと巨木探索と確認のために、信州遠山の深山に入り、さらにこれをもとに本山より見分に入った役人らが、

数々の不思議な珍獣に遭遇した奇談を記したもので、華誘居士なる者が著し、寛政十年（一七九八）に平安書林華箋堂より版行された。これはまさに本史料に詳細に記される信州遠山の巨材伐出の記事と合致しており、その端緒が知られる。そして両堂落成と機を一にして版行されており、先の『金剛一統志』にも取り上げられているなど、信州遠山での材木伐出が京都でも広く話題になっていたことがうかがえる。なお、本書は、一九四三年に飯田市の山村書院から刊行されている。

③ 『大堂造栄 絵本古今校 全』

本書には、寛政七年（一七九五）に開版された吉葺堂蔵本（A本）と、京都御寺内丁字屋九郎右衛門による再刊本（B本）の二種類の版本がある。

A本には序文があり、そこでは、聖徳太子による仏教興隆と数々の伽藍造営をはじめとし、桓武帝の時代には平安城の左右に東寺・西寺が、後一条天皇の時代には東北の霊地が選ばれ法成寺などが造営されたといひ、その折から関白藤原道長も御堂を建立した昔語りが、ある官家の秘庫に伝わっており、この端々を抜粋し盛事を図画して都鄙の兒童に与えることが、転法輪の因となるかとしている。末尾の刊記には、寛政六年（二七九四）御免、寛政七年開版が記され、書林として、江戸須原屋茂兵衛・大坂柏原清右衛門・京菊屋喜兵衛・同善屋勘兵衛・同菊屋七郎兵衛が挙げられている。

本書は、A本の場合、全十五丁からなり、その内容は、斬始・地築の

光景にはじまって、山中での巨木伐出、運搬、木場の様子、柱立や上棟式などが描かれている。「大堂造栄（営）」とあるのみで固有名詞は挙がっていないが、これは明らかに寛政年間に造営中の東本願寺の再建工事の光景が下敷になっているものと思われる。例えば十丁裏十一丁表に描かれる運搬船の名称が「法力丸・弘誓丸」とされ、「藤氏の太祖天児根命よりつたへたまふ藤の丸の船しるしをさし…」とあることや、後述する『東本願寺寛政度再建絵伝』に記される絵様との酷似などから、東本願寺との関係が想起されるが、明確に記されないのは、作者が東本願寺の直接関係者ではないからと推測される。おそらく、A本は、東本願寺再建という空前の大工事を目の当たりにした一般人が、これを素材として、あくまで一般的な大堂造営の過程を記すスタイルであらわした大衆向け絵本なのではないかと思われる。

しかし、刊行されたA本を見た東本願寺関係者は、これが東本願寺再建と関わる内容であることに当然気づき、そこで、寺内丁字屋九郎右衛門よりB本として再刊されることになる。このB本では、東本願寺造営とは無関係な内容である序文が記された冒頭の一丁分が削除され（このためB本は全十四丁となる）、途中の「足代のてい」と「木場のてい」の順番が入れ替えられ、さらに最終丁が差し替えられて、最終丁表に描かれた雲内の文章がやはりこれも東本願寺造営に関わらない一般的な内容ということで削除され、A本では刊記が記されていた最終丁裏に新たに「御影堂まへ舞楽の図」を描いて東本願寺を印象付けるといふ改訂が

行われている。すなわち、A本からB本への改訂により、本書が東本願寺造営そのものの絵本として門徒向けに別版で刊行されることになったものと考えられるのである。

本書の成立背景と再刊経緯自体も非常に興味深く、さらに検討の余地があるが、ここでは本史料に関わる状況を絵で示していることにより、史料を絵で補完してくれる参考文献として、巻末に全掲載することにした。底本は、A・B本ともに大谷大学図書館所蔵本（林山文庫）を用い、A本は全丁を、B本は表紙と最終丁裏を含む見開きのみ掲載した。なお、そのほか本書の諸本については、大谷大学図書館にさらにA本一冊（補丘文庫本）、B本一冊（夢白廬文庫本）、名古屋市蓬左文庫にA本一冊、白鹿記念酒造博物館（笹部桜資料室）にB本一冊の所蔵を確認した。『国書総目録』によれば、国立国会図書館・東京国立博物館・東京大学図書館・天理大学図書館にも本書の版本が所蔵されている。ちなみに大谷大学図書館所蔵のB本（夢白廬文庫本）の末尾には「大工徳左衛門蔵」とある。大工が本書を所蔵していたことが確認され、興味深い。

また、主な先行研究としては、（1）遠山佳治「江戸時代後期の本山再建に関する真宗門徒の考察——寛政度本山再建に関する三河門徒の活動を中心に——」（『信濃』第五七号第一〇号通巻六六九号、二〇〇四年）と、青木馨『東本願寺寛政度再建絵伝』とその背景」（『同朋大学仏教文化研究所紀要』第二五号、二〇〇五年）が挙げられる。前者は本史料の分析により、寛政度再建における三河門徒の動向を見たもので、

基本的分析はなされているが、講に関する理解など、検討を要する点もある。後者は寛政度再建を題材とした二幅絵伝の考察において、本史料を引用検討したものであるが、前掲『古今桜』との関係性など、さらに検討すべき課題も残す。なお、この二幅絵伝については同朋大学仏教文化研究所二〇〇六年度春季展示図録『山田文昭コレクションの世界——【特別展示】真宗史料の世界——』でカラー図版紹介している。いずれにせよ、今後も本史料を用いた研究の進展が期待される。

(凡例)

- 一、翻刻にあたっては、原則として常用漢字を用いた。ただし、一部に旧字のままとした箇所もある。
- 一、原本における改行や文字の配列は、できる限り原本通りとしたが、一部、反映しきれなかった箇所もある。字数の関係上、一箇所^{146ウ}、一行に収まらず、実際の改行を「」で示した。
- 一、読みやすさを考慮して適宜、読点「、」と並列点「・」を付した。ただし、原本後半で句点「。」が付されている箇所もあったが、それは読点「、」に置き換えた。
- 一、反復記号は、平仮名「ゝ」、片仮名「ヽ」、漢字「々」で統一し、「く」は二字以上の反復の場合にのみ示した。
- 一、原本の破損等で判読不能の箇所については□や□、「」で示した。
- 一、傍註は、本文の誤字・脱字を正すのに「」を用い、参考または説明を付す場合に「」を用いた。
- 一、文章が通じ難い箇所、もしくは原文のままに従ったことを示す場合には「(ママ)」と表記した(註：他史料を再写した箇所では、明らかな誤字も散見される)。
- 一、原文には、人権の課題からすれば問題視される表現が用いられている場合があるが、歴史資料としてそのまま掲載した。
- 一、今回の史料紹介にあたって、多くの方々のご協力を得た。深く感謝申し上げます。

協力機関・協力者一覧(敬称略・順不同)

真宗大谷派幕戸教会
岡崎市美術博物館
大谷大学図書館
大谷大学真宗総合研究所(造営史研究班)
真宗大谷派岡崎教区法宝物調査委員会
真宗大谷派岡崎教務所
杉浦守太郎(幕戸教会責任役員)
山田 晋(真宗大谷派正福寺・幕戸教会代務者)
大谷めぐみ(大谷大学真宗総合研究所研究補助員)
安藤幸子[史料校正]
石川宣昭[史料翻刻]
上野 純[史料翻刻]
大原雅幸[史料翻刻]
木越祐馨[史料校正]
田村徳明[史料翻刻]
伴 知成[史料翻刻]
藤原 肇[史料翻刻・校正]
渡辺貴之[史料翻刻]
渡辺信和[史料校正]

『三河大谷派記録』

(表紙)

「三河国碧海郡」

一、三河大谷派記録

天明年度以来□正「」

(1オ)

御本山御無祿之由来

御本山之儀者、御開山様已来、都鄙一同

御経回被為在之、親く御化導被為遊候

御事^ニ、其後教如上様御代、慶長六年

八月十六日、教如様御隱室^{江、(徳川家康)}東照宮様

被為在御成、白銀三百枚・布三百端

被下置、其節御嫡家之御当山御

取建被成下候旨被 仰出、敷地儀

可被下置旨被 命候事、依之翌

十七日、右之礼として、教如様伏見^江

御登城被為在之候処、御対顔之上、

御寺領御附可下置 上意之処、

教如様被 仰上候者、誠ニ無殘処、奉蒙

(2オ)

御懇命辱、奉敬承候得共、尊大之寺

領仕候^而者、一生安逸之身と罷成、

門末^江之教導も怠り可申、然ル時ハ

宗祖^江対シ、不本意^ニ御座候得者、寺領之

儀者、御断申上候、何卒諸国末寺・門徒ヲ

親く教導致シ、右之帰依信施を以

本廟相続仕度候得者、右教導に付、

何方^ニも差構無之、抑被成下度段

御申上有之処、寺門之本意、左も可有

之事と 御感不斜上意被為在之候、

同慶長七年、加藤喜左衛門殿御奉行として

京六条・七条間四丁分境御渡之事、

此儀ハ、先年関東ヨリ、御由緒御尋之折節、被仰立候事、

(3オ)

右之通、東照宮様格別之御取立^ニ、

御当山之御化導者、嚴密なる 台命故

地頭・御領主たり共、御化導之一途斗ハ、

御手差ハ不相成儀と承知仕候、其上

御当山前件之次第^ニ、寺領無之御事^ニ

候得とも、何事も御化導ヨリ、事始り候儀^ニ、

諸国御門末普く御化導被為遊候

(1ウ)

(3ウ)

(4オ)

儀者、一大事之御事ニ御座候、然ル処、右躰
御化導ニ付、百姓家江者、御立寄不被成
坏、御教化筋ニ差出之箇所有之候而者、
第一 台命ニ相障、且 御当山
御趣意、相廢候儀と被存候、

〔墨付ナシ〕

(4ウ・5オ・ウ)

十三代目

宣如上人 御年五十一歳

承応元年^{壬辰}六月廿八日 御影堂御新始、

万治元年^{戊戌}七月廿五日 御遷化、

人皇百十二代後西院御宇

明暦二年^{丙申}四月廿八日 御柱立、

同四年^{戊戌}三月廿三日 御上棟、

同年三月廿七日 御遷座、

同年七月廿三日万治卜年号改元、

十四代目

琢如上人

寛文十一年^{辛亥}四月十四日 御遷化、

(7ウ)

十五代目

常如上人

元禄七年^{甲戌}五月廿一日 御遷化、

十六代目

一如上人

元禄十三年^{庚辰}四月十二日 御遷化、

十七代目

真如上人

延享元年^{甲子}十月二日 御遷化、

十八代目

從如上人

宝暦十年^{庚辰}七月十一日 御遷化、

十九代目

乘如上人

寛政元年^{己酉}三月廿八日 御影堂御新始、

同四年^{壬子}二月廿二日御年四十九歳 御遷化、

二十代目

達如上人 御年十三歳御住職

寛政七年^{乙卯}三月十五日 御柱建、

同九年^{丁巳}三月十日 御上棟、

同十年^{戊午}三月廿八日 御遷座、

(7オ)

寛政八年^{丙辰}十一月十七日 阿弥堂御^(花院)鉦始、

同十年^{戊午}三月廿三日 御上棟、

同年四月二日 御遷仏、

同年五月三日 御大門御^ニ鉦始、

同十二年^{庚申}三月廿六日 御柱建、

同年十一月十八日 御上棟、

享和元年^{辛酉}三月廿六日 御供養会、

(8オ)

一、再建^ニ付、飛驒国白川山御林、

公儀ヨリ、御材木御拝領、

人皇百二十代

今上^(光格天皇)皇帝 承応元年御影堂御^ニ鉦始ヨリ
百三十七年目也、

(8ウ)

一、御本山御類焼、天明八年^{戊申}

正月晦日、

如来様・御真影様、其外御宝物

御供被遊、善知識^(衆知)様、大谷^江御越

被遊、夫より又、山科^江御越被遊、又々

大谷^江御^ニ帰り、暫大谷^ニおいて御化導

被為在、夫ヨリ、枳穀^(穀)之御殿^ニ仮リノ両

堂を御立被遊、御化導被為在候、

(9 オ)

(9 ウ)

夫より河内国八尾の御堂を御引取

被為在、御寺内に御立被遊、

阿弥陀堂共々御再建被為在、

御化導被成下候御事^ニ候、扱亦両

御堂御成就、御遷座・御遷仏之

後、仮御影堂、又々右之八尾^江

御かへし被遊、右之如ク御成就被遊候

御事に候也、

(10オ・ウ)

〔墨付ナシ〕

(11オ)

天明八年^申正月晦日、京大火之節、

上京被致罷有候当国之御法中

青野本光寺・東浦東正寺・羽栗

順円寺^(四)右三ヶ寺ハ 御門跡様、大谷・

山科^江御退被遊候節、御供被致、大谷方

山科^江御立退之道、清水下之音羽之滝

之水ヲ、御上様^江差上被申候由候、山科^ニ而も

右三ヶ寺^江御役人方御相^(供)移も御座候^ニ付、

此段記置申候、

(11ウ)

一、御本山御焼失^ニ付、御寺内御白砂に、

当国より御小屋建始メ之事、天明八年

申二月下旬十日講之内、熊村安養寺・

荏谷正覺寺・高津波金勝寺、右三ヶ寺杯ハ

在京致し、始メハ烏丸通り七条上ル、はりまや

藤兵衛方ニ借宅致シ、色々御手伝被申上候

処、三河国講・法中、追々上京ニて、

御上様より御小屋頂戴致シ、夫方同行^(兼)江も

御小屋御免被下、法中・同行共ニ御寺内

御白砂・阿弥陀堂御門北側ニ焼木ヲひろい

集メ繩締リニて、三間ニ四間半、屋祢ハ焼そきを

ひろひ、土まニて、ゑんハなし、かべもなし、後ニ焼板

拾ひ、縁はりニ相成、敷物ハ伏見^ニ而^ニ延^ヲ買、

御仏前ニハ焼残之縁取三枚敷、御仏たんハ

御堂之焼木を拾ひ、手作^ニして、瀬戸焼の

三ツ具足也、二年之間ハ盈なし、夫ヨリ御小屋

始リハ、河内国・大坂・伏見・近江・三河、右五ヶ国也、

諸国追々御手伝相登リ、大勢ニ相成申候、

三河国御小屋之世話方同行、箕輪村吉兵衛・

土呂村弥助・池鯉鮒宿又七・西尾中町治郎兵衛・

鶴ヶ池村八郎右エ門、其外村々同行入諮リ、段々相増候、

右之処ハ、三河元小屋・中小屋・大小屋とて三ヶ所ニ相成、

(13オ)

(12ウ)

(12オ)

(15ウ)

(14ウ・15オ)

(14オ)

(13ウ)

夫より小屋頭として西端村茂兵衛、車力頭として

矢作村平蔵、此兩人、拾五ヶ年詰切之人也、

一、国元同行参会場処之儀、国元一統示談場所

無之ニ付、最寄よろしき処を見合、処々ニて

相談仕候得共、国内一統気迎不揃候故、同年

申十一月ヨリ、知立宿山形や治郎右エ門宅ヲ相頼ミ、

寛政四年子二月迄五ヶ年、右治郎右エ門方、仮之

会処^ニ御座候、同二月より知立正念寺国内

元会所ニ相成、同年十一月より暮戸出張

会処と相成候跡、双方相談之上、則十一月上旬

知立・暮戸両会処ニ相極ル、池鯉鮒会所

詰役小山村岡本銀右エ門、暮戸会処

詰役高力村川口権蔵、右兩人拾五年

之間、詰切之人なり、

〔墨付ナシ〕

一、七条浜^江諸材木積来着仕候処、右材木請取

御役所詰役送り之儀、御上様方三河

御小屋法中方^江被 仰付候、其節右

御役所^江高張・御紋附御幕被下置候、

(16オ)

且又国元法中、追々上京之御衆中ハ、
兩御堂^并御殿向・大門、右不殘組もの
ばくはな枅かた、木口はり方、三河法中^江
是亦御上様より被 仰付候、段々御出来^ニ而、
御大門之御供養会之節、御白砂御小屋
引弘被仰付、又々塩屋町^ニ借宅いたし、

(16ウ)

法中・同行共に同居仕候得共、大勢及甚ク不
都合^ニ相成、其後、十日講荷谷正覺寺・教榮寺
杯ハ、七条昆布屋裏座敷ヲ御上様ヨリ被仰付、
皆御成就迄、御用相勤被申候、又々同行
御小屋ハ、諏訪町御上様方御雜生^(平カ)御屋敷^ニ、
御小屋被仰付、日夜御手伝申上候処、

(17オ)

其後、此御場も御引弘^ニ相成候得共、越後・三河・
江州ハ、別段^ニ御上様ヨリ御頼之事^ニ付、右国々方
兩御堂^并枳殻御殿御掃除、其外御手
伝として、壺ヶ国より五・六人宛相詰呉候様
御頼事^ニ候、右^ニ付、只今七条畑地^ニ、御長や
永代^ニ被仰付候御事、

(17ウ)

〔墨付ナシ〕

(18オ)

寛政元年酉二月方山入
一、信州下伊那郡遠山御材木御伐
出^ニ付、当国へ御頼被為有候^ニ付、
御世話方申上法中元方・肝煎方、
処々^ニ会所を立、詰役致し、多分
人数入御材木伐出し川下ヶ、
夫より、天龍川方遠州掛塚湊へ
出し、大船^ニ積送り申候事、

(18ウ)

右入用金、左之通、

一、金三万六千四百式拾兩 戌年方卯年迄

七ヶ年之間也、

(19オ)

内金壹万五千五百六拾六兩

式分式朱卜

錢七百廿三文

右者、報謝講納、御柱志納、諸

代、物弘代、御会所御見廻志、

別段御再建志、両会所内仏

散錢^ノ末^ニ右訳記置、

内金貳万七百兩、御上方御下ヶ金

(19ウ)

引残り、不足方三通丸と申
材木船引当也、

(20オ～21オ)

〔墨付ナシ〕

(21ウ)

天明八年^{戊申}三月ヨリ同極月迄
当国分御手伝、

一、人数壹万八百九拾八人 御手伝
御上より当年分飯料・諸入用拝借仕候、

(22オ)

寛政元年と改ル、

酉年一ヶ年分

一、人数貳万四千九百四人 御手伝、

飯米百五拾九石

金貳百四拾四兩貳步貳米

錢七貫五百貳拾五文

戌年一ヶ年分

一、人数貳万六千八百七拾四人 御手伝、

飯米百七拾三石三斗九升六合

金貳百三拾六兩壹步也

(22ウ)

『三河大谷派記録』(天明・寛政年間)

銀百七拾六匁三分三厘

錢貳拾貫八百拾貳文

亥年一ヶ年分

一、人数貳万九千百六拾貳人 御手伝、

飯米百五拾七石六斗六升七合

金三百五拾四兩貳步

錢百四拾貳匁六分五厘

(23オ)

子年一ヶ年分

一、人数貳万六百五拾四人 御手伝、

飯米百四拾八石四斗七升三合

金八拾三兩貳步貳米

錢七拾七貫六百四拾六文

右之外、大工作料・定結給金・惣会所掛り・

焚出し入用等有之、大造成御事也、

(23ウ)

丑年一ヶ年分

一、人数壹万九千百貳拾四人 御手伝、

飯米百三石貳斗七升五合

金百貳拾三兩貳步

(24オ) 錢壹貫百七拾七文

右之外、入用右同断、

寅年一ヶ年分

一、人数壹万八千百貳拾七人 御手伝、

飯米百五石六斗五升五合

金百五拾五両貳分貳朱也

(24ウ) 錢拾五貫貳拾貳文

右之外、入用右同断、

(25オ) 右者、天明八^戌申年ヨリ寛政六寅年まで

七ヶ年ハ、慥ニ記帳有之、書面之通認置候、

寛政七卯年ヨリ後ハ帳面無之、相知れ不

申候得共、享和元酉年、御大門御供養

会迄之七ヶ年ハ、御手伝人数夥敷差上

申候、此儀者皆人存知罷在候得共、恪かな

帳面無之、相知れ不申、仍之如斯新書

仕置候、若何方^ニも帳面有之て、此

末^江御書入可被成候、以上、

一、天明八年申三月ヨリ、京都御小屋月

番として一ヶ月^ニ七・八人宛、右御小屋

取締之同行、当国処々村々より、月々

代り^ノ上京相勤申候得共、逐一^ニは相知レ

不申、あらまし名前左^ニ記、略之也、

(26オ)

同九年酉年

正月より

小山村 伊兵衛

西端村 茂兵衛

暮戸村 善蔵

吉田 小吉

牛久保 庄兵衛

中立村 善蔵

二月より三月十日迄、

根崎村 宇右エ門

宇頭村 十右エ門

箕輪村 吉兵衛

鶴ヶ池村 八郎右衛門

友国村 八右エ門

三月十一日ヨリ四月十日迄

大浜村 文四郎

中根村 九左エ門

牛窪村 助右エ門

下地村 清兵衛

篠田村 六右エ門

ノ五人、

西四月十一日方

五月十日迄、

一平坂 八右エ門

五月十一日ヨリ 六月十一日ヨリ

六月十日迄、 閏六月十日迄、

一平坂 与次兵衛 一岡崎 権次郎

(26ウ)

(27オ)

御賄方
二本木善右エ門
花園 伝兵衛

閏六月十日七月十一日迄、

土呂 権右エ門
高落 九右エ門
市子 又左エ門
西迫 忠次郎
一色 源右エ門
矢作 道知
一色 清蔵

閏六月十日ヨリ

七月十一日ヨリ八月十日迄、

西尾 吉郎兵衛
同 庄五郎
同 新五郎
足助 千六郎
対米 所平
不吹 源内

七月十一日まで、
月番
鷺田 弥吉
大草 長三郎
池金 要助

梅ヶ坪 又蔵
川島 源七
尾花 吉右エ門
中根 九左エ門

八月十一日より

九月十一日より

十一月十一日より

九月十日迄、

十月十日迄、

十二月十日迄、

東端 文左エ門
根崎 久米治
江原 兼右エ門
東浦 安兵衛
同 七左エ門
広畔 十蔵
桑原 庄兵衛

川嶋 新右エ門
川野 新吉
宇頭 幸七
花本 源兵衛
駿馬 源右エ門
萩原 善左エ門
片原 九八

大坪 八左エ門
ふし沢 源内
知立 次郎右エ門
西湊 茂兵衛
根崎 宇右エ門

(28ウ)

内訳

一、金七百六拾兩 高浜 田島浄貞

(28オ)

覚

一、金五千九百五拾五両壹分式朱

錢六百四拾七文

右者、報謝講十五組方集高、

一、金八千百拾兩三分式朱 御柱志、

錢六百三拾五文

(27ウ)

御小屋詰法中

春林寺 念空寺 専超寺

西心寺 樂円寺

称念寺 聞入寺

古井 孫右エ門 伊保 作右エ門
同 庄右エ門 安城 利助
高津波 源四郎 〆五人、

十月十一日ヨリ
十一月十日迄、

須山 友右エ門
クマ村 儀右エ門
中山 綱吉

(29オ)

東浦

一、金六百兩
中根又左衛門

棚尾

一、金五百五十兩
辻嘉兵衛

西尾

一、金三百九十兩
深谷半左衛門

和泉

一、金四百兩
都築彦馬

二本木

一、金三百五十兩
藤浦善右衛門

一、金六百八拾五兩八御本山へ直上納、

ノ千兩也、

花園

一、金貳百四拾六兩
寺田伝兵衛

中根

一、金貳百拾四兩
山本勘右衛門

西尾

一、金貳百兩
榊原宗兵衛

元方中出金

ノ金三千六百七拾七兩

一、四百五拾九兩 諸代場売代

(30オ)

錢三百六拾九貫七百三拾四文

右者、報謝講へ衣裳類・古金類・

女中かんさし・かふかいの類上ヶ売代、

一、金四百拾七兩三分式朱

錢三百三拾四文

右者^{知立}、^{舊戸}両会所^江御見舞志、

一、金九拾貳兩壹分 右同断、

錢五拾七貫八百廿八文、

両会所

一、金拾九兩三分 内仏散錢、

別段

一、金四百四拾三兩三分 御再建志、

ノ金壹万五千四百九拾八兩三分式朱

錢四百貳拾七貫五百五拾九文

此金六拾七兩三分ト錢七百貳拾三文

二口合金壹万五千五百六拾六兩貳分式朱

錢七百貳拾三文

(31オ)

一、御類焼ニ付、当国一同、法中・同行相談之上、

御再建為御助成、一錢講と名附、一日壹文

講之積り壹人前一ヶ月三拾文、或ハ六拾文・

百文・式百文宛、毎月三日報謝講大集会、
十ヶ年之間相勤可申、相談相定り候、
左ニ寺別相記申候、

(31ウ)

寛政三年亥正月十六日、一錢講宛最初相続、
宝内組西迫村西福寺^ニ而極ル、
同年二月三日中嶋村浄光寺^ニて、
毎月三日之参会極ル、内談役<sup>金勝寺
正覚寺</sup>
同年同月 講錢、口数相定り申候事ハ、
中島村浄光寺

(32オ)

同四年二月三日木戸村長因寺ヨリ
会処御居屋建始りなり、
一、一錢講ト云シヲ、報謝講ト改名ノ事ハ、
子ノ十月赤坂正法寺ヨリ始り候、
一、講日晨朝^并法談ノ始り、大浜村西方寺^ニて、
西迫村西福寺被勤候、
一、日中・迨夜両座ノ事ハ、牛久保村法信寺
ヨリ始り申候、

(32ウ)

(33オ)

〔墨付ナシ〕

(33ウ)

報謝講大集会所^{江從}
御本山
御紋附御幕^并御紋附御排燈
御免、

(34オ)

寛政三年始り、
亥三月廿日 新堀村 光善寺
四月三日 和泉村 本龍寺
五月三日 矢作付 勝蓮寺
六月三日 花園村^海 養住寺
七月三日 細川村 順行寺
八月三日 桜井村 圓光寺
九月三日 羽栗村 順因寺

(34ウ)

竹谷村

十月三日

信光寺

家武村

十一月三日

浄顯寺

古井村

十二月三日

願力寺

寛政四年

吉田

子ノ正月十六日

御坊処

木戸村

二月三日

長因寺

閏

安城村

二月三日

明法寺

足助

三月三日

宗恩寺

木田村

四月三日

正向寺

梅ヶ坪村

五月十六日

安長寺

坂崎村

子六月十八日

圓行寺

山路村

七月十八日

芳友寺

滝脇村

八月十六日

専光寺

竹村

九月三日

光恩寺

赤坂駅

十月十八日

正法寺

浜尾村

十一月三日

精界寺

牛田村

十二月三日

西教寺

榎前村

寛政五年
丑正月十六日

信照寺

酒呑村

二月三日

皆福寺

江原村

三月三日

福浄寺

東城村

丑四月三日

良興寺

(35オ)

(35ウ)

(36オ)

(36ウ)

(37ウ)		(37オ)	
五月三日	吉田	八月十八日	形原村
御坊所		林光寺	
六月十五日	土呂村	九月三日	針崎村
浄専寺		勝鬘寺	
七月十八日	三好村	十月三日	岡崎
阿弥陀寺		浄専寺	
十二月三日	池鯉附	十一月三日	高須村
称念寺		顕宗寺	
寛政六年	大浜村	十二月三日	池鯉附
寅正月十六日	西方寺	寅二月三日	東境村
		専正寺	

(38ウ)		(38オ)	
三月三日	牛久保村	六月十六日	刈谷村
法信寺		正覚寺	
四月三日	西宮口村	七月三日	新子村
浄覚寺		等覚坊	
五月五日	大平村	八月三日	岡崎
緑成寺		専福寺	
十月三日	奥殿村	九月三日	若林村
教恩寺		圓樂寺	
十一月三日	西光寺	十月三日	高河原村
閏寅十一月三日	泉田村	十一月三日	教恩寺
順慶寺		十二月三日	教恩寺

小川村

十二月三日

蓮泉寺

寛政七年

西高須村

卯正月十六日

法寿寺

今村

二月三日

専超寺

小山村

三月三日

教専寺

伊保村

四月三日

和徳村

上野村

五月十八日

浄願寺

大田村

六月三日

信光寺

滝村

七月三日

弘願寺

野寺

八月三日

本證寺

中ノ郷村

卯九月三日

浄妙寺

高津波村

十月十八日

金勝寺

高浜村

十一月三日

恩任寺

小山田村

十二月翔日

妙隆寺

寛政八年

福釜村

辰正月十六日

西岸寺

堤村

二月三日

万徳寺

里村

三月三日

西方寺

岩堀村

四月三日

西光寺

挙母

五月十八日

陽龍寺

棚尾村

六月十日

安専寺

浅井村

七月十八日

宿緑寺

(39オ)

(39ウ)

(40オ)

(40ウ)

(41ウ)		(41オ)	
八月三日	今川村	十一月三日	重原村
乗蓮寺		萬福寺	
九月三日	中嶋村	十二月三日	米津村
浄光寺		龍讃寺	
十月廿五日	高棚村	寛政九年	熊村
空林寺 ^(福)		巳正月十六日	安養寺
		二月三日	藤井村
		安正寺	
三月三日	下重原	三月三日	浄福寺
		四月三日	打越村
		大覚寺	
巳五月三日	中根村	真浄寺	

(42ウ)		(42オ)	
六月十六日	下青野村	八月三日	川島村
慈光寺		西心寺	
七月三日	大草村	後	
正楽寺		九月三日	田振村
		楽圓寺	
閏		前	
七月三日	佐々木村	十月十六日	中田村
		萬国寺	
		十一月三日	大浜村
		本伝寺	
寛政十年	貝福村	十一月晦日	福正寺
巳正月十六日	馬場村		
願正寺			
午二月三日	神有村		
応春寺			

高取村

二月十六日

専修坊

泉田村

三月三日

西念寺

中村

六月三日

善敬寺

高力村

六月十六日

山泉寺

西迫村

七月三日

西福寺

富田村

八月十六日

願専寺

笹目村

九月九日

明専寺

八橋村

十月十六日

浄教寺

須美村

十一月三日

教覺寺^敬

中根村

十二月三日

隨嚴寺

(43才)

寛政十一年

下林村

未正月十六日

善宿寺

和氣村

二月三日

來空寺

茅園村^{マヅノ}

二月十六日

円覺寺

東端村

三月四日

念空寺

中垣内村

三月十六日

徳山寺

根崎村

四月三日

寶林寺

吉良ノよし田村

六月十八日

正覺寺

竜泉寺村

七月三日

正道寺

岡サキ

八月三日

西照寺

桜井村

未九月三日

法行寺

(43ウ)

(44ウ)

(45ウ)		(45オ)	
九月十八日	舞木村	九月十八日	舞木村
十一月三日	泉田村	十一月三日	泉田村
十二月朔日	駒場村	十二月朔日	駒場村
寛政十弍年		寛政十弍年	
申正月十六日	上条村	申正月十六日	上条村
二月三日	城ヶ入村 ^{城嶽}	二月三日	城ヶ入村 ^{城嶽}
三月三日	鷺田村	三月三日	鷺田村
三月十六日	鷺塚村	三月十六日	鷺塚村
四月十六日	大塚村	四月十六日	大塚村
五月廿五日	稲熊村	五月廿五日	稲熊村
申六月三日	国谷村	申六月三日	国谷村
	善導寺		善導寺

(46ウ)		(46オ)	
七月三日	池嶋村	七月三日	池嶋村
八月三日	大友村	八月三日	大友村
九月三日	大塚村	九月三日	大塚村
十月十八日	菅生	十月十八日	菅生
十一月三日	赤松村	十一月三日	赤松村
十二月三日	家武村	十二月三日	家武村
満会也、	圓満寺	満会也、	圓満寺
寺数ノ百弍拾三ヶ寺、		寺数ノ百弍拾三ヶ寺、	
右者、報謝講、寛政三年亥三日廿日ヨリ始リ、同十弍年		右者、報謝講、寛政三年亥三日廿日ヨリ始リ、同十弍年	
申十二月三日満会、年数十ヶ年也、		申十二月三日満会、年数十ヶ年也、	
右拾ヶ年掛銭		右拾ヶ年掛銭	
納高金五千九百五拾五両壱歩弍朱		納高金五千九百五拾五両壱歩弍朱	
錢六百四拾七文		錢六百四拾七文	

(47オ)

〔墨付ナシ〕

報謝講当国一列元方衆中

田島淨貞

中根又左衛門

辻 嘉兵衛

深谷半左衛門

都築彦馬

藤浦善右衛門

寺田伝兵衛

山本勘右衛門

榊原惣兵衛

(48オ)

報謝講毎月ノ上ヶ勘定方

法中惣代

元方惣代

西迫 西福寺

笹目 源蔵

榎前 信照寺

川島 七郎兵衛

城ヶ入 浄泉寺^(城)

東端 文左エ門

江原 福浄寺

竹谷 伴右エ門

細川 順行寺

新郷 市右エ門

若林 浄照寺

中根 九左エ門

(48ウ)

〔墨付ナシ〕

諸国御用材御伐出し之御林之分

左之通ニ御座候、

信濃国下伊奈郡遠山御林

遠江国戸中山御林

肥後国米郎山御林

出羽国新庄山御林

日向国楠子山御林

其外、国々御献木・御買上木、

三河国 尾張国 山城国

大和国 川内国^(マミ) 丹波国

但馬国 越後国 越中国

能登国 筑後国 筑前国

近江国 加賀国 伊勢国

和泉国 紀伊国 摂津国

右之国々山々より、御用材御伐出しニ
御座候、已上、

(50ウ・51オ)

〔墨付ナシ〕

(51ウ)

当国拾五組之初り并ニ同行名前、

池鯉鮒組 知立 又七

次郎右衛門

小山 銀右衛門

箕輪組 箕輪 吉兵衛

吉良組 西尾 惣兵衛

次郎兵衛

宝内組 犬飼 新三郎

豊川組 牛久保 長七

篠田 六右衛門

御油 与左衛門

乙川組 大平 利助

池金 養助

高力キ組 高力キ 権蔵

山内組 塩ノ沢 七三郎

中立 善蔵

大塚 儀右衛門

小川組 四川 助七

細川 文六

新郷組 新郷 市右衛門

広畔 十蔵

(52ウ)

高落組 高落 九右衛門

矢作組 矢作 聞成

川野 新吉

東城組 東城 源兵衛

岡崎組 本町 権次郎

梅ヶ坪組 梅ヶ坪 又蔵

ノ拾五組也、

(53オ)

右者、御本山御類焼ニ付、書面之同行衆中、

懇志之御手伝被初、夫より段々日ニ増し

夜ニまし、御法義相続之上ヨリ御手伝御執

持出来相増し申候、

〔墨付ナシ〕

(53ウ~56ウ)

信州遠山一件左ニ記、

一、最初遠州浜松齡松寺・蓮花寺^{〔華〕}

其外同行中、遠山ニ大木有之由

被^{〔マ〕}因候由、夫故ニ当国同行^江被相掛

合候ニ付、右遠山見分として、古鼠小四良・

五左衛門・川辺新右衛門・左兵衛・伊兵衛・

(57オ)

(57ウ)

篠田ノ六右衛門・東端ノ文左衛門、右之衆中
遠山^江罷越、遠山六ヶ郷之内、八重・

川内村ニ会所ヲ建、寛政元酉年

十一月廿五日、右村ニ案内致させ、山人見分

仕候処、大木数多有之候、仍之追々

相談ニ、遠州同行見出し之遠山、

三州ヘ引受仕候、是より遠山掛り

之始リ也、

(58オ)

江戸浅草御坊御輪番徳善寺方

公儀^江願書之写

一、寛政三年亥十一月十四日御再願御口上書、

松平右京亮殿^江差出ス其外寺社奉行

不残、御老中方不残、若御年寄之内

御勝手掛り京極備^{高久}前守殿、御勘定

奉行御勝手方三ヶ所ヘ茂差出し候、

如左、

口上覚

先頃以書附を以、信州遠山材木出方

之儀、御願被申上候処、不被及御沙汰

段、去月廿五日被 仰渡、早速京都ヘ

(60オ)

一同ニ参集之事故、別^而大法会之

砌ハ、諸国方集リ候門末、影堂ニ満候儀ニ

御座候得者、格別之縮方も無御座、

且御寄附被成被下候御唐門・鐘楼ハ

格別、其外阿弥陀堂^并書院向在

来之間、数席之学寮等ニ至ル迄、随分

被相縮候得共、都合^ニ而者、用木存外之

(59ウ)

尤、先達^而、諸堂取縮方之御触御座

候得ハ、可成丈被取縮候存意ニ御座候得共、

中古 大猷院様御代、宣如御門跡^{徳川家光}

富士山ニおゐて拝領之御材木ヲ以、被致

建立候儀、全躰当宗之堂宇間広ニ

建来リ候儀者、門末之教導専来衆

一同ニ参集之事故、別^而大法会之

砌ハ、諸国方集リ候門末、影堂ニ満候儀ニ

御座候得者、格別之縮方も無御座、

且御寄附被成被下候御唐門・鐘楼ハ

格別、其外阿弥陀堂^并書院向在

来之間、数席之学寮等ニ至ル迄、随分

被相縮候得共、都合^ニ而者、用木存外之

(59オ)

申達、御門跡被得其意候、誠ニ右躰之

御類例も、不被為有御儀ニ御座候得者、

絶^而被申在候筋ニは無之、殊更去年

飛州ニ^而莫大之御材木被下置、厚キ

御取立被成下候上之御事ニ御座候得者、

再応被申上候儀、憚入被存候得共、飛州ニ^而

拝領之御材木を元立ニ被致、大慶之

造立ニ御座候得者、木数も多ク相掛リ候、

尤、先達^而、諸堂取縮方之御触御座

候得ハ、可成丈被取縮候存意ニ御座候得共、

中古 大猷院様御代、宣如御門跡^{徳川家光}

富士山ニおゐて拝領之御材木ヲ以、被致

建立候儀、全躰当宗之堂宇間広ニ

建来リ候儀者、門末之教導専来衆

一同ニ参集之事故、別^而大法会之

砌ハ、諸国方集リ候門末、影堂ニ満候儀ニ

御座候得者、格別之縮方も無御座、

且御寄附被成被下候御唐門・鐘楼ハ

格別、其外阿弥陀堂^并書院向在

来之間、数席之学寮等ニ至ル迄、随分

被相縮候得共、都合^ニ而者、用木存外之

(60ウ)

員数ニ相成候事故、如何様ニ被_レ存候_而も、
再建難成ニ付、先年拝領之御由緒

被_レ申上、御仁恵之儀被_レ相願候所、去年

飛州ニ御材木拝領之儀ハ、寔ニ以

御神慮ニも被_レ相叶候御儀、御門跡

深ク感動被_レ致、并ニ門末ニ至ル迄、挙_而

難有奉存、再建成就、此時節を猶

予被_レ致候_而ハ上之 思召を被_レ恐入、

尽精誠取急候得共、右足木之儀並之

木品とハ違イ大木ニ御座候得ハ、京都向寄ニ

相応之木品無御座、漸於信州ニ被_レ相求

候処、出方之儀、所々ニ差支、寺門之

力_ラニ者難及、既ニ右材木、飛州拝領

材_江是加_江、漸惣木数相揃、安心被_レ致

候所、出方之儀、差出伐置候、是木差置候、

其所之難洪而已ならず、世之不益と

相成候時ハ、歎ケ敷、木数相揃不申、彼是

障取候内、飛州拝領材迄も等閑ニ差

置候様相聞候_而者、対_上江不容易

儀、芳々_{旁力}以実ニ進退難洪被_レ致候、此段

御賢察被_レ成下度被_レ存候、右者壳木

『三河大谷派記録』(寛政年間)

(62オ)

諸買人等之手ニ相懸リ候儀ニ無御座、
全当山手切運送ニ而、飛州拝領材之

足木ニ御座候得者、右運送之路次差障

無之様、無急度御声懸リ被_レ成下度

御願被_レ申上候、此段何分御執成被_レ申度、

偏ニ御歎申上候様、從京都被_レ申越候、以上、

浅草本願寺輪番

徳善寺

十一月

法順坊

(63オ)

一、木数寸間内訳帳、極印切削銘

山川絵図、十二月廿四日松平右京亮殿へ

徳善寺持参仕候処、廿六日進達ニ相成、

廿七日辻甚太郎殿_江御呼出し_ニ而被

仰渡候也、

江戸浅草

御坊輪番

徳善寺

寛政第四_壬子歲正月

恵丈判

〔墨付ナシ〕

(64オ・ウ)

(65オ)

一、遠山見分ニ御越之衆中あらまし
左ニ相記申候、

御使僧

浄輪坊様

田島五兵衛

笹目源蔵

小山又右衛門

其外同行相添

〔墨付ナシ〕

(65ウ・66オ)

(66ウ)

寛政四年子六月

御作事方

長井半弥様

(重之)

辻嘉兵衛
福釜新右衛門

其外同行相添、

(67オ)

京都御家老様方御書簡

猶々於月分共ニも各出情御取持

(精力)

被有之候段、深功之至ニ候、無程御木

樹可有之、難有致安諸候、已上、

一筆令啓達候、先以

(67ウ)

御門跡様御機嫌克被為成

(達如)

御座候、然者其国御末寺并ニ

御門徒中、入情御取持ニ而、御伐出

有之候、信州遠山御材木之儀

追々御出来ニ付、先頃者長井半弥

を以、見分被仰付、工匠新八等召連

罷下候処、御柱材都合九拾本余、

其外虹梁数々御調有之、別而

御影堂御用ハ勿論、其外

阿弥陀堂・大門御用ニ可相成候条、

右同人々委細 言上之趣、及御沙

汰ニ候処、御満足不浅候、猶又此上

万事急様、不相替御取持之儀、

乍太儀厚頼

思召候、実ニ無程御木揃可被為

有之段、御安慮被遊候、右

等之趣急申入との御事ニ付、

如此候、恐々謹言、

稻波外記

順信

九月

下間大蔵卿

三河国

頼興

御末寺衆中

御門徒衆中

(69オ)

寛政四子年七月

(69ウ)

イツミ

都築彦馬

二本木

藤浦善右衛門

御納戸

村田吉左衛門様

御先触役

根崎ノ久米治

中根ノ九左衛門

御案内

川島ノ七郎兵衛

泉田ノ伴右衛門

同五丑年六月

京都橋本新兵衛

能登国舩屋市左衛門

御納戸

藤井中書様

寺田伝兵衛

『三河大谷派記録』(寛政年間)

御案内

東端ノ文左衛門

中園ノ弥三郎

(70ウ)

〔墨付ナシ〕

(71オ)

一、遠山御材木山出し川下ケニ付、

右山より掛塚湊迄之村々御代官、

辻甚太郎様御役所^江被召寄、山

出し・川下ケ差支無之様、被仰渡

候趣被仰聞、誠以難有仕合、則

天流川^マ通、御触書御公儀様

より出申候、左^ニ御触書写置候、

(71ウ)

覚

一、木数壹万七千三百式拾五本

長壹丈八尺^方 五丈四尺^迄

但 角物方六寸^方 壹丈五尺^迄

平物巾壹尺四寸^方 四尺五寸^迄

丸木末口式尺^方 三尺式寸^迄

(72オ)

内訳

槻 百拾壹本

同 四百三十拾本

同 三千三百五本

塩地 三千式百三拾本

縦 三千百五拾五本

柵 五千式百本

栗 千八百四拾九本



極印



切判

(73オ)

右者、東本願寺御門跡用木、信州於遠山被相求、遠州掛塚湊まで

川下ヶ差障無之様被致度旨、被相

願候間、最寄御代官方触渡、尤右_ニ付

權威を以、村人足等遣候儀者、決_而致間敷

旨、本願寺役人_江も被 仰渡有之、

書面之木品、極印・切判銘有之材木、

信州從、遠州掛塚湊迄川下ヶ之節、

川通御領・私領・寺社領村々差障

無之様可致旨 松平越_(定信)中守殿

被仰渡候之間、村々得其意、川下ヶ

無差障可致候、若出水流木等_ニ相成、

(72ウ)

(66ウ)

(74オ)

川縁村方引上置候ハ、本願寺役人へ

可相返候、差掛人足雇等之儀、右役人方

断次第相応之賃錢請取、少しも

無滞差出し、諸事無差支様可致候、

若於相背者、可為曲事者也、

子二月十六日 水谷祖右衛門御印

信濃国

遠山方

遠江国

掛塚湊迄

天龍川通両縁

御領

私領 村々

寺社領

名主

組頭

(75オ)

追而此廻状、別紙請印帳_江令請印、早々

順達掛塚湊迄相廻し、夫より川縁村々より

継戻し、信州飯島陣屋_江可相返候、以上、

本文触書、掛塚湊問屋平左エ門方
用木掛り之もの^江可被相渡候、以上、

(75ウ)

〔墨付ナシ〕

(76オ)

一、遠山御材木、遠州掛塚湊方
船積、京都内浜七条迄着之

(76ウ)

浦御触書、御代官辻甚太郎様方
出申候、左^ニ御触書之趣写置候、
覚

一、
杣 杣 塩地 木数卷万七千三百式十五本
榎 栗

極印



切判銘



右者、信州遠山において、東本願寺
買上木書面之通、我等代官所
遠州於掛塚湊極印相改、船積之上、

『三河大谷派記録』（寛政年間）

(77ウ)

京都東七条迄相廻候筈^ニ候間、万一
難風^ニ逢候節ハ、御領・私領何国之
浦々^ニ而も、右極印・切判銘有之木
数之内、流失木等不隔置無連滞、
右役人罷越次第可相渡候、右之

(78オ)

趣、相触候様被 仰渡候間、得其意、
右海辺附浦々・川付村々、早々申送
書面之儀者、当村方京都東本願寺^江
可相届候、以上、

子二月 辻甚太郎 印

遠江 三河 尾張 伊勢 紀伊 和泉 摂津
大坂夫方淀川筋 高瀬川通京都 東七条迄
御領 浦々其外 庄屋 年寄
私領

条目

定

(79オ)

一、此度東本願寺買土・材木於遠州
掛塚湊令船積候条、船中随分入念
可申候、無沙汰之致方有之、後日ニ
相聞候ハ、吟味之上、船頭・水主・炊ハ
勿論、品ニより船主親類迄も御外口
可被仰付間、得其意、船中火之用心
等堅相慎候事、

(79ウ)

一、日和無之、何れ之浦ニ而も、船掛致
候ハ、御材木陸江上申間敷事、

一、逢難風候節者、其所江相断、大切ニ
相聞可申候、尤日和能時分、無益之
逗留致間敷事、

(80オ)

右之通急度可相守、若違輩之
沙汰、後日ニ相聞候ハ、御咎可被
仰付候間、猥成儀無之様可相慥者也、

辻甚太郎

寛政四子年何月 御役所

遠州掛塚湊

(80ウ)

御用木出役

打越

小野田安右衛門

本郷

稻垣勘助

桑原

榊原庄兵衛

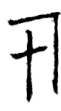
送り状之事

此外重而出勤申候、

(81オ)



極印



切判

一、御材木木数何百本

内

槻 何本 寸間何程

柅 何本 寸間何程

右者、東本願寺御買上御材木
木数寸間相改、遠州於掛塚湊

船積いたし、当月幾日何之刻、同湊

出帆申付候、着之上木品・寸法等、

御引合セ御受取可被成候、以上、

月日 辻甚太郎手代

(82オ)

誰印

京都高瀬七条内浜

(82ウ) 一、此度東本願寺御買上御材木、
遠州掛塚湊より、京都高瀬
七条内浜御役所迄積送候間、

何れ之浦々^ニ而も、入津出帆月日

刻付、此帳面^ニ相記、甚浦役人

印形取之、無益之逗留致間敷

候、以上、 辻甚太郎手代

子 何月

誰印

(83オ) 一、御用材伐出し山仕廻迄惣世話方同行

古井小四郎

太田左兵衛

稲垣新右衛門

磯村伊兵衛

摺村又兵衛

岡本銀右衛門

川口権蔵

平岩七郎兵衛

其外添人同行

信州遠山ノ道法覚

知立方 暮戸へ 二里

岡崎方 藤川へ 一里半

赤坂方 御油へ 十五丁

八幡方 篠田へ 一里廿丁

大木方 藤城へ 壱里

野田方 新城へ 十五丁

打金方 大野へ 壱里

野戸瀬方 大川合へ 壱里

畑ヨリ 裏側へ 一里半

川井方 中部へ 廿丁

芋堀方 水久保へ 半

小畑方 池島へ 半

辰胴方 青崩山へ 半

青崩山方 八重河内へ 半

八重川内方 程野沢へ 四里

右ハ、信州遠山御材木出所、程野沢迄

道法ノ三拾四里也、

(84オ)

暮戸方 岡崎へ 壱里

藤川方 赤坂へ 三里

御油方 八幡へ 十丁

篠田方 大木へ 拾丁

藤城方 野田へ 壱里

新城方 清井田打金へ 一里

大野方 井代野戸瀬へ 廿丁

大川合方 畑へ 一里半

裏側方 川井へ 壱里

中部方 芋堀へ 二里半十丁

水久保方 小畑へ 二里

池島方 辰胴へ 二里

此所中会所

此所元会所

是方不殘御林山也

西ウレ

口上

(85オ)

此間知立へ御参会有之候右之御衆中、
今日御参会之儀ハ、先達^而御承知之通程野沢
出木御入用金、御上御引請、追々御下ケ金有之、
金銀諸帳面立合御頼^ニ付、法中一州中
毎月四日・十四日・廿四日、右三日御出勤^ニ御座候、
組々同行衆之儀ハ、両会所十替リ^ニ御詰メ

(85ウ)

無之候^而ハ、相勤不申候、先達^而之御名前外^ニ
御扨人御加へ、一組^ニ而三人十日替リ^ニ御勤可申下候、
一ヶ月両会所詰人数十式人^ニ御座候、尤御不案内
之衆中^ニ而ハ諸事御不都合^ニ御座候故、十日替リ
之御人数書認、左之通御示談可被下候、右之
人数・名前へ御治定之上、別段^ニ近所^ニ而六人之
相立月番方被及御示談^ニ候様致度候、右

(86オ)

六人之御名前、右之通、箕輪組^ニ而文左衛門、小川
組^ニ而庄兵衛、新郷組^ニ而新助、岡崎組^ニ而十助、
宝内組^ニ而新三郎、高落組^ニ而五郎兵衛、両会
留主居帳面皆添、是迄致来川口権蔵・岡本
銀右衛門、両会所替ル^ノ被相勤候様^ニ致候^而ハ如何
御座候哉、何^ニ不寄月番方留主居へ御内談
之上^ニ而、六人之衆中^江御掛合、法中一列

(86ウ)

惣代方御掛合御座候様^ニ致度候、其上組々
御出会有之候共、其時之御用^ニ順シ御取計^ヒ
候^而ハ如何、両会所取年取^ノ仕方、

(87オ)

一、会所月番諸入用月^ノ
一、毎月晦日限り^ニ御改帳面^ノ、法中・一列・
月番御印形六人之衆中立合、印形次之
月へ帰廻し可被下候、

追啓

(87ウ)

一、和田川迄出木之分、無程満嶋着先達^而
相下り候、五千余之御材木、不残土場廻リ
相添、右御入用、先達^而御治定有之候、
法中・一州組^{列方}々行報謝講引当^ニ
御座候処、惣^ノ御上納式分五厘程御出金
有之、是迄急借^ニ而操替置候、尤組々方
御皆納有之御聞合御座候得者、相知レ申候、
法中・一列四分通御出金、依之何卒乍
御苦勞御示談被成候^而、当月八日まで^ニ
其御組々^ニ而御操替可被下候、已上、

七月二日

寛政五年 十一月上旬

口上書

御用材掛リ

両会所

御影堂御再建、諸国一統御門末

丹精を拙て、御執持・御見聞之御事、

然ル所、右御用材信州從遠山、去ル西年

より御伐出しニ付、於当国今年迄打続、

夫々御取持申上候処、無御差障御出木有之、

先境迄大船式拾艘積登セ、追々御庭

着有之、難有御儀ニ御座候、且程野山

谷々御出木御賄之儀、

御本山江御引受とハ乍申、前々御操替

金残り、并大紅梁口川下ケ船積等御入用

多、御賄方甚以差支難渋仕候、四・五年

以来、聊御差支なく、御執持申来候得ハ、

今暫く之内、何卒御差支無之、御材

木首尾能御庭着有之、御堂御成

就被為有候様、奉願御事ニ御座候、尤先

(90オ)

(89ウ)

(89ウ)

(88ウ)

(88オ)

『三河大谷派記録』(寛政年間)

境程之山之儀者、御上御引請之事、

大紅梁口迄ハ、当国御引受ニ相成、其節

御示談被上、凡金壹箱半御操替御出金

有之候ハ、御都合宜ク川下ケ相済可申哉

ニ付、御法中・御一列并組々御同行中

御割合之処、追々御出金も御座候得共、

未夕皆御出金無御座、彼是以当暮御賄

難相凌奉恐入候、毎々種々之儀ニ御座候得ハ、

及御示談候儀、甚氣之毒ニ奉存候得とも、

前文申上候通、当国江御引受之儀ニ候得ハ、

無扨御示談宜敷奉頼上候、

一、程之沢 御上御引請、追々御下金

有之候得共、三月方前操リニ相成、御

下金遅速之間之御操替、

一、大虹梁筏下、甚外御注文木当方ヘ

御引受右之御入用、報謝講之外ニ一箱

半之御割合御不足、

一、先前方御引受人別調用、報謝講之

外ニ御操替金有之、尤御一列方ハ格別、

此外ニ御世話役中方別ニ御操替金、

凡壹箱半余、

(91ウ)

(91オ)

(90ウ)

(92オ)

御本山御影堂 三州

組々

御柱卷木綿 女人講中

高ノ千六百三拾六反半余、

外ニ

羽飛木綿

蚊帳木綿

糸

是ハ御小屋へ、

村々内訳帳有、

〔墨付ナシ〕

(92ウ・93オ・ウ)

(94オ)

京都七条御作事

小屋数之覚并諸職人

数左ニ相記候、

一、三間梁ニ 式拾五間

一、六間ニ 四拾間

一、六間ニ 五拾間

一、六間ニ 五拾間

一、七間ニ 五拾間

一、八間四面 中柱無し

一、八間梁ニ 百間

(94ウ)

(95オ)

一、七間ニ 三十間

一、七間ニ 三拾五間

一、六間ニ 拾五間

一、六間ニ 式十五間

一、六間ニ 式拾五間

一、四間ニ 拾式間

一、七間ニ 焚出し小屋 拾四間

一、六間ニ 同膳場 四拾間

一、三間ニ 膳場 拾式間

一、三間ニ 休所 十八間

一、四間ニ 御門役所 五間

一、四間ニ 御作事役所 五間

一、三間ニ 大工肝煎役所 五間

ノ数式拾小屋

此外、御寺内ニ諸国之御小屋

五拾七ヶ所有之候、

(96オ)

諸職人数覚

一、大工木挽 九百八拾五人

一、石工 八拾人

一、鋳リ方 八拾人

(96ウ)

一、塗師 百式十人

一、鍛冶屋 貳拾五人

一、瓦屋 三拾人

一、鉄鋼張 拾五人

一、佐官 貳十人

一、家根屋 百式十人

一、桶屋 五人

一、杣方 拾八人

一、黒鋤 拾人

一、棒削 三人

右諸職人

惣合千五百拾壹人也、

右者、寛政九巳年

閏七月十五日改、

(98オ)

右之職人惣会所方焚出し、梅干壹人前ニ付

式粒ヅ、手塩ニ付候処、一日ニ梅干壹石式斗ヅ、

入用、但し昼計りなり、越後の国方梅干四拾俵

参り申候処、日数十日ハ無御座候、右ニて御考弁

可被成候、香のものと大根壹本四人前として、

一度ニ四百本ヅ、入用々、

『三河大谷派記録』(寛政年間)

此外、諸国御手伝御小屋五拾七ヶ所入用、是ハ

国元方入用送来候、誠ニ以大そふ成御入用ニ

御座候得共、委ク御成就被為有難有御事ニ候、

(98ウ) [墨付ナシ]

(99オ) 遠山月番覺

年内詰番 高力キ權蔵

平坂 八右衛門

川島 佐兵衛

正月 小山 重左衛門

川島 新右衛門

新堀 文八

箕輪 吉兵衛

(99ウ)

二月 東端 文左衛門

川島 左兵衛

足助 仙六

米津 幸吉

中根 九左衛門

三月

桑原 庄兵衛
庄左衛門

高津波源四郎

宇頭 十右衛門

山室 重左衛門

四月

大草 兵右衛門

福釜 新左衛門

形ノ原九八

一色 清藏

五月

西方 兵三郎

西尾 吉郎兵衛

同 清七

小望 文左衛門
文八

(100ウ)

六月

寺津 久兵衛

東堺 善藏

西端 茂兵衛

青野 久右衛門

七月

高棚 庄左衛門

古井 孫右衛門

(101オ)

八月

新郷 市右衛門

高取 文七

阿知輪幸助

梅ヶ坪又藏

熊村 長左衛門

池端 与右衛門

暮戸 善藏

東浦 安兵衛
要吉

九月

犬飼 新三郎

安城 多七

鵜池 八郎右衛門

今村 庄兵衛

上矢田茂左衛門

(101ウ)

十月

大坪 八左衛門

大浜

一色 源八

対米 所平

赤根 小四郎

十一月

円川 助七

根崎 久米次

高力 七右衛門

筋生 彦七

岡崎 又七
のミ

十二月

知立 次郎右衛門

牛久保庄兵衛

牛田 新左衛門

堤 市十

岡崎 権次郎

右之通ニ御座候、以上、

〔墨付ナシ〕

難有珍敷事故ニ左ニ書記、

覚 信州水内郡
御院家

長沼村

西厳寺

(103ウ)

吉田村

善敬寺

神代村

円徳寺

一、米百三拾俵 但し三計入

両ニ式拾八俵かヘニ而金子御持参

代金三拾四兩三分卜

残四百廿七文

西厳寺末

正伝寺

円徳寺末

本覚寺

(104オ)

一、米七俵

代金壹両壹分卜錢七百七文

一、金貳分

右ニヶ寺々、

(104ウ)

遠山御会所江被差上候、

右、善敬寺門徒小玉村儀右衛門・善右衛門・

与惣兵衛・重六、四人之者者、昔シ三州住居

之者ニ御座候処、三州門徒弘之節、信州

水内郡小玉村ニ居住致候、黒柳一統と申

(105オ)

家数四・五拾軒^ニも相成候内、右四人
御類焼已来、京都へ金貳百両也
被差上、此節金子も手支候様子御座候
処、三州同行御再建^ニ付、当国^ニ於テ
御材木伐出し、御取持事ヲ承り、何卒
貫壹丁・垂木壹本成とも御寄進
致度願、先此度金五拾兩上納之願、
右之両寺、此段被相願候得共、是迄
類例も無之候^ニ付、三州元方^江相窺、
示談之上、挨拶可致之趣、尤木品^ニより
金子不足^ニ候ハ、追々京着迄之内
調達可致、是悲々右五拾金預り置候様
相願被申候、三州へ急々談仕書通
^ニ而返答可致之引合、遠山御会所方
申参候、
信州遠山御会所

出役

八月十三日

〔墨付ナシ〕

(107オ)

寛政四年子としより、京都御手伝

国々人足、定詰^ニ相成、人足壹人一ヶ歳
給金貳両三分也、

但し拾五組割当左^ニ記、

(107ウ)

一、定詰五人
此給金拾三両三分
右組方受取、
箕輪組
一、定詰五人
此給金拾三両三分
右組方受取、
矢作組
一、同五人
此給金拾三両三分
右組方請取、
梅ヶ坪組
一、同四人
此給金拾壹両
本地宗念
内金九両子十二月廿二日受取、

(108オ)

一、同三人
此給金八両壹分
子十二月十八日不残皆済、
新郷組
一、同四人<sup>内壹人ハ断、
三人相勤申候、</sup>
此給金拾壹両
小川組
桑原庄兵衛
内金五両子十二月八日請取、
一、同四人
此給金拾壹両
北山内組
箕輪村吉兵衛方納

内金貳兩貳分三百五拾文

子十二月十八日

一、定詰四人

岡崎組

此給金拾壹兩

一、同四人

高力組

此給金拾壹兩

兵右衛門方請取、

一、同三人

宝内組

此給金八兩壹分

右之金子組にて渡し、竹谷村伴右衛門殿引請、

一、同四人

豊川組

此給金拾壹兩三分

内金八兩貳分六百文入、丑正月十六日

一、同四人

高落組

此給金拾壹兩

子十二月十五日請取、

夫 久右衛門

一、同五人

西尾組

吉良組^ニ成、

此給金拾三兩三分

西尾清七

丑正月十八日請取、

吉郎兵衛

一、同四人

乙川組

此給金拾壹兩

『三河大谷派記録』（寛政年間）

一、同三人

東城組

此給金八兩壹分

内金貳兩

定詰六拾人、

此給金合百六拾五兩

但し壹ヶ年分、

右之外、十日或ハ三十日御手伝同行衆、

御再建中年々其数不知、

毎年定詰給金御再建中

世話方中根村

杉浦九左衛門

京御小屋改順番左^ニ記、

壺番 大坂講中

貳番 京寄講中

三番 三州法中会所

四番 同国廿八日講中

五番 八尾法中

六番 加州同行

七番 摂州九日講中

八番 播州法中

九番 三州大小屋中会所

(111ウ)

十番
尾州法中

拾壹番
尾州定詰御小屋

拾貳番
川内講中

拾三番
尾州同行中

拾四番
同國中島郡

拾五番
同国海東郡
海西郡

拾六番
越中講中

拾七番
尾州知多郡

拾八番
同国愛知郡
春日井郡

拾九番
同名古屋講中

式十番
同丹羽郡講中

廿壹番
同中島郡

廿貳番
同羽栗郡

廿三番
尾州羽栗郡法中

廿四番
同断同行中

廿五番
同中島(郡免カ)法中

廿六番
加賀国同行

廿七番
能州講中

廿八番
江戸講中

廿九番
桑名同行

三十番
越後高田

(112オ)

(114オ)

口達書

諸国

惣会所

一、御影堂御作事方、春中以 御奉書

御手配之次第、遂^達一被 仰出候処、

関東 御参向^ニ付、還御被為成候迄^ニ

仮り御上棟仕候^而、御上覧^ニ奉入度計リ之

勇^ニ、御小屋詰御同行中、誠^ニ不借身命^而

之働より、案之外、速^ニ御出来被為有、

此節梅雨之御凌^ニも、御煩ヒ無之御事と

(113ウ)

三拾一番 西美濃講中

三拾二番 越中国会所

三拾三番 南伊勢

ノ

此外^ニ式拾四ヶ所有之候、

右者、御類焼方六ヶ年目寛政五丑

とし、御小屋改順番如斯、追々

諸国よりの御小屋夥敷御事

記^ニ不違、仍^而書面略せるもの也、

(113オ)

(114ウ)

(115オ)

被為成寄段、難有仕合ニ御座候先以上之
 重^并後堂迄、土居葺残らず被為相果候
 得者、従是乾坤之隅より、南北御広縁
 追日御建掛ケ、八月中ニハ向拝迄御立
 揃ひ被遊候御事ニ候、就夫御屋根之儀、檜木
 板ヲ以、長三尺・厚サ五分、真削鉄釘^ニ
 結構を為し、御葺立被為有之候処、雨ニ
 濡日々曝、殊更非常之御防旁ニ付、

善知^(連如)識様甚御心痛被為遊候得者、片時も

早御瓦葺渡し候^而、乍恐 尊慮を奉休

度、大坂・堺大仏之瓦師^江申付、只今專

焼立候得者、八月中ニハ上之重之分、残らず

出来之都合ニ候、然者七月中旬方追々

葺師を取掛ケ候積リニ御座候、依之今般

諸国御小屋中^江申談候者、兼^而御引受之

御瓦師、寄進御記帳高之内、当八月迄ニ

五分通りを御上納被下候様ニ仕度候、尤

此段御催促ニおよひ候ハ、御瓦一式諸国

御門末中^江引請度段、御小屋一同連印

書付ヲ以願上候処、御許容被成下候

ニ付、瓦焼場^并土性合等委敷致吟味、

(115ウ)

(116ウ)

右三ヶ所へ申付候、猶又御瓦改方代銀上納
 請払等之儀、諸小屋中方願ニ付、京・大坂
 御講中^江被 仰付御肝煎被申上候

御事ニ御座候、左候得ハ、八月迄ニ御瓦御出来

次第、代銀も追々可被相渡候、右等之処

差支有之候^而ハ、自然ニ御瓦出来も遅

滞ニ相成候道理ニ候得ハ、能々御恐察可被

為有候、從來御取持ニ御如在無之御事ニ

候得ハ、御影堂御再建ニ付、懇志ヲ

御運ヒ被成候^而も、最早御瓦斗りと

被為相成候得ハ、別^而御出情被下候様、

希ふ御事ニ御座候、

一、上来之通り御影堂大凡御成就被為

成候ニ付、引続御本堂御再建御企之

儀、四月晦日、諸小屋連印之書附ヲ以テ

奉願上候処、当月廿一日御許容被為有

之、弥今年中ニ御鉦始御治定之御事ニ

候得ハ、先以難有可被思召候、猶又追々諸国

一統ニ御触可有之候^{下脱}ハ為御安堵、為御知

旁々如斯ニ御座候、以上、

(116オ)

東六条御白砂

諸国

辰五月廿八日

惣会所

諸国

御小屋中

(118オ~119ウ)

〔墨付ナシ〕

(120オ)

(120ウ)

(121オ)

一、御本山御用材、当国宮口出之木、
虹梁・牛木、都合八本矢作川通リ

宮口々大浜迄川下ケニ付、最寄御法中

処々江御出張会所を相立、御執持誠ニ

大造成御事、右御用材村順川下ケ、

両側通近郷村々御手伝人数あら

まし左ニ記、

寛政六年寅六月十三日、天気よし、

一、人足四百八拾四人 宮口最寄

同十四日、

一、人数五百三拾人 右同断

同十五日、晴天、

一、人数七百人 右同断

(121ウ)

(122オ)

一、同十六日、天気よし、女子とも御手伝ニ出ル、
人数八百四拾人 右同断

一、同十七日迄ニ、細川十分一御役所上まで着、
細川十分一御役所御免ニ而川下ケニ成、

一、同十八日白雨ニ而水三尺斗も増、同夜同行番仕ル、
人数八拾人 細川
船八艘也、

同十九日、桑原村ニ出張

一、川下休 会所ヲ立ル、

同廿日、

一、右同断

同廿一日細川々渡菊迄着、

一、人数七百八拾五人 同行 細川最寄
同 百七十四人 女同行分

同廿二日渡菊々配津迄着、

一、人数七百五拾四人 男子渡菊最寄
同 式百三人 女子

同廿三日配津々川端迄着、

一、人数男女九百八拾四人 両側村々凡
六拾五ヶ村

(122ウ)

六月廿四日川端迄着、
一、同 男八百七拾五人
女貳百四拾人 両側村々

同廿五日宗定迄着、
一、同 男九百三拾貳人
女貳百八拾四人 右同断、

同廿六日粟寺迄着、
一、同 男八百六拾九人
女三百四拾人 右同断、
村数五十七村

(123オ)

同廿七日・廿八日矢作出張会所立、
一、同川下両日休、但し廿九日夕晦日迄夜分
川下男斗人数不知、

同廿九日矢作橋下迄着、
一、人数男
女貳千三百九拾四人 両側村々
同晦日夕六日迄川下ケ休也、
村数六拾七ケ村

(123ウ)

七月七日六ツ名ノ西迄着、
一、人数男
女同七百八拾九人 川東村々
女三百四拾七人 川西村々
右両側村々

七月八日天白迄着、
一、人数男
女貳千百四人 両側村々

(124オ)

同九日赤浜村迄着、
一、同 男八百五拾人
女三百八拾九人 右同断

同十日中ノ郷迄着、
一、同 男
女千貳百拾三人 右同断
村数四拾五ケ村

同十一日佐々木迄着、
一、同 男七百八拾九人
同五百三拾八人 川東村々
女三百八拾貳人 川西村々
右両側分

同十二日高橋迄着、
一、同 男
女千九百拾三人 両側村々
同十三日十四日下ケ方休、

同十五日浅井迄下着、
一、同 男五百八拾五人
同七百三拾五人 川東村々
女四百人 川西村々
右両側分

(124ウ)

七月十六日藤井迄着、
一、人数男
女貳千百貳拾六人 両側分

同十七日米津堺迄下着、
一、同 男
女貳千百人 出張会所米津村立
右同断

(125オ)

- 同十八日
一、同 男女貳千百人 右同断
同十九日野錢迄着、
男九百三拾五人 川東村々
一、同 同七百五拾人 川西村々
女四百八拾人 右両側分
同廿日鷺塚迄下着、
男千四百三人 川西村々
一、同 同九百八拾六人 川東村々
女五百四拾五人 右両側分

(125ウ)

- 七月廿一日中畑西迄下着 出張会所東浦_ニ立
男千五百四人 川西村々
一、同 同千貳百貳十人 川東村々
女六百拾五人 右両側分
ノ三千三百二十九人

(126オ)

- 同月廿二日海口迄下着、 元方衆中々かゆ切喰等出ル、
一、同 貳千八百九拾五人 箕輪組三拾三ヶ村
外ニ女人も不記、 割合男子斗出ル、
川東同行も不記、

- 同夜番あり人
一、同 百人 東浦村
平七村
同断
一、同 貳百人 棚尾村

(126ウ)

- 同断
一、同 貳百三人 大浜_上若衆
右五百余人廿二日戌刻人足揃、
一、高張三拾五本
一、箱提灯拾五張
一、海辺_ニ四ヶ所油樽へ内へ割木ヲ入、
火ヲ焼リ

(127オ)

- 一、同夜四ツ半頃_ニ 東浦 中根又左衛門殿
二本木 藤浦善右衛門殿
棚尾 辻嘉兵衛殿
右之御衆中々働キ同行へ御見廻事、

(127ウ)

- 一、小豆粥 貳拾荷
一、酒 壹駄
一、薪 百連
同夜九ツ時より東風雨強くなり、手伝
人足命に替へて働事かぎりなし、
漸々夜八ツ時迄_ニ、東浦入江へ引込ミ、
ミなノ首丈水_ニ入さむく成リ、御法中
并_ニ同行より薪を焼キ、海辺にて
あたらせて帰り申候、法中・同行とも_ニ
大慶仕、翌廿三日_ニハ箕輪組三十六ヶ村
不残遊日仕、各々村々の寺々_江参詣
仕、廿四日米津村出張会所_ニて勘定

(128オ)

初ル、

寅七月廿四日

覚

寅六月十四日より、

志

一、金七拾五両壹分ト四百三拾五文

一、米拾三俵

一、茶拾五俵

一、綱八拾五筋

一、縄貳百五拾連

内

御用材川下ケ諸入用

金拾九両三分ト四百拾五文

引

差引残金六拾五両貳分ト錢貳拾文

右之通、法中・同行出会、勘定相改、

京六条御用会所^江上納仕候、以上、

法中惣代印

同行惣代印

寛政六年寅七月

知立

幕戸御会所

詰役衆中

『三河大谷派記録』（寛政年間）

(130オ)

赤坂御役所^(マ)之御書簡

一^(マ)筆致啓上候、就者此間御差出し

被成候、杉足代木矢作川通、細川

御番所無分一之儀、御番所詰之ものへ

申渡印鑑相渡置候間、御勝手次第

川下ケ可被成候、則御番所前通切手

壹枚差進申候、右可得貴意如斯^ニ

御座候、以上、

赤坂御役所

八月十一日

田口藤蔵

金勝寺様

(131オ~133ウ)

〔墨付ナシ〕

(134オ)

諸々御寄進分

集会所

御台処御門

尾州知多郡方御寄進、

四間ニ式拾四間也、

尾州七郡方御寄進、

四間ニ式拾間 大坂々、

鐘樓堂

越中国方御寄進、

御土蔵

御台所

(134ウ)

菊御門

京洛中方御寄進、

御築地

越中国方御寄進、

御大門御足代木

当国 山内組方寄進、

杉丸太 長三間方

八間迄、

ノ数三百拾六本、

世話方川島村

七郎兵衛

〔墨付ナシ〕

(135オ～136ウ)

寛政八年辰二月十六日

(137オ)

一、御門跡様江戸御参向

右者、当日岡崎御泊り、知立より

大浜茶屋迄之内^ニ而、御院家衆

彼是御不礼之儀有之候由^ニ付、

甚御気色悪敷候^ニ付、ハッ橋・

暮戸・矢作勝蓮寺殿、右三ヶ所

とも^ニ御立寄り無御座候、

一、当日矢作川方西ノ分掛銭

暮戸会所集り分

(137ウ)

惣掛銭ノ四百貫五百式拾八文

兩^ニ六貫三百文かへ

此金六拾三兩式分ト

錢五百廿八文

右之金子上納村々へ御印相渡濟、

右者、矢作出張会所

暮戸会所共^ニ勘定方

箕輪組

天王 庄九郎

矢作組

桜井 文吉

〔墨付ナシ〕

(138オ～139ウ)

信州遠山阿弥陀如来略縁起

一、遠山六ヶ村之儀

御台所領飯島^ニ御陳座有リ、

遠山六ヶ村本名

鶯巢村 和田村 満島村

木沢村 八重川内村 上卜村

右遠山ハ禪宗・日蓮宗斗リ、

(140オ)

(140ウ)

関東へ御願被遊、飛州白川山を
拝領被遊しかとも、大造営ゆへ御用
材中々行届不申故、足シ木として、
信州遠山六里^ニ十三里の深山なれ

(141オ)

とも、木々も数多く有りけるに、又此山^ニ
差掛り、遠江国・三河国両国御門葉、
我もく^ニと馳集り、昼夜もわかたず、
不惜身命の思ひより、終^ニ彼所^ニ

(141ウ)

山入して、追々会所を定、後^ニハ三河斗
之引受^ニ成り、職人働キ之者の小屋
棟数も蒿、御用材も思ひの儘^ニ伐出シ
けるこそ、関東之御威光故とは

(142オ)

乍申、難有事ともなり、然ル^ニ遠山の
内上村ト言ふ所の川辺に神社有、
又三間四面も有り、此辺^ニ見事成槻
数多有り、是あるよし毎度行候^而、
頃しも夏の事なれば、暑サを凌く
為^ニとて、彼拝殿に寝して居ル内^ニ、
三州摺村又兵衛と申者風と見付
けるハ、棟木にいと古ヒたる箱、縄^ニ
からげ付て有候事を、何やらんに

『三河大谷派記録』(寛政年間)

(142ウ)

おもひけれども、其儘打捨置しが、
度々見候^而より、何卒内の品見たき
ものやと、しきりに至念し候^而より、
里人に様子を問ける^ニ、答テ申
けるは、あの箱ハ逸の頃より有ル^ニ哉、
中の品も何にて候や、昔方伝へ候は、
あの箱を開ケは忽チたゝり候て、
村中疫病を煩ひ申候と言ヒ伝へ

(143オ)

候ゆえ、中々手差事も恐れ候得者、
何事も御無用^ニ候と語りければ、
又兵衛言ふ様、然者此社をハ何人か
司サ候やと尋けれハ、中村伝蔵と
申者と申ゆへ、是幸ヒと伝蔵方へ
何卒見せ呉候様^ニ申けれども、中々
承引せず、御罰の程恐ろしけれハ、
叶ヒ不申と平^ニ断申けるゆへ、其後
色々と言ふてだまし、若シ罰とかめ
有レハ、此又兵衛に当ルへき間、是悲^{非力}中ヲ
拜マセ呉候得と種々^ニ方便して、
終^ニ許シを請て、夫レより又兵衛、心
喜び此箱をおろし、蓋を明けて中ヲ

(143ウ)

(144オ)

見れハ、三軸之掛ヶ物なり、扱々いぶ
かしやと開見れハ、是ハいかに方便法
身の御本尊十二光仏なり、是ハ／＼と
打驚キ、残り二幅開キ見れハ、御連座
光明品なり、夫より出役之御法中方
始、追々集リ奉伺に、二幅ハ紛レも無キ
^(親禮)
御開山様之御筆也、一幅ハ存覚

(144ウ)

上人之御筆也、扱々かゝる山中に
如何成ル事ニて祖師聖人之御筆の
存ス事やらん、左ハ去りながら、此度
御影堂御材木御伐出し候事を
しろしめして、是迄御凌在しならん、
誠ニ仏智不思議の御方便ならずや、
諺ニ言ふ、地獄で仏ヶに逢ふたる心地
して、嬉し泪に皆々時ヲぞ移し

(145オ)

候事か、先伝蔵へ此よし申聞セ、中々
罰の当ル杯と申ものにてハなし、少しも
氣遣ヒ不可有、ヶ様／＼と申聞けれハ、
是も不思議におもひ、始テ拝礼して
安堵しけり、扱右之評判聞伝へて、
数多の人々日々集リして引きもきらず、

(145ウ)

誠に前代未聞の不思議なり、扱かゝる
尊キ御真影、表具ばら／＼に披レ候
事を恐レて、三幅共三河国へ御供
奉リ、表輔^(補)奉リ、右表輔^(補)之謝礼に、
存覚上人御筆十二光仏の明品ハ、
三川国同行へ譲リ与へけるにより、
則チ右之縁記を作り、伝蔵へ相渡シ、
此郷に残し置けり、扱右十二光仏
尊像ハ、暮戸御会所に縁記ともに
永代の宝物とせしなり、其荒増
前書にしるすなり、

(146オ)

外ニ
十二光仏縁記 壹冊有、
并ニ

遠山御用材元方会所
月番御法中御法和^(話)二座、
但し 禅宗
日蓮宗 ゆへ現世利益和讃之題号
此縁記と法和両座の写しハ、別ニ
会所ニ有リ、

(146ウ)

右十二光仏様之外、式幅二十余ヶ年過キテ後、式幅御入堂大破ニ付、十二光仏御座所ニ付、三河国〔開帳ニ罷来リ被成、当会所始メ川島村・下ノ二本木村、二・三日宛御開帳、其〕

外ニ御拓談御拝礼志金五両も出来仕、夫々右之遠山方来リ候式人同行喜ヒ帰リ、大破堂ヲ再建ニ懸リ見事ニ出来仕、御せん座被為有、喜ヒ之通り書状参リ候ニ付、此所ニ白紙少々

有之付、写し置き申候事、文云、一筆啓上仕候、其御地良久々不得御意、御地遠奉存候、拟々時下極長閑之節ニ罷成候処、弥々其御地方様無御

障リ御勇健ニ御幕被遊候哉、大悦至極ニ奉存候、繼随而下拙共無相替リ、凌申候間、乍慮外御休意被思召可被下候、且又当春ハ罷出緩

御馳走預リ、不浅忝仕合御座候、段々御苦勞掛申候得共、早速帰いたし、直ニ如来堂出来仕候間、閏正月廿八日御入仏仕、村々皆相悦入申候処、乍憚川

嶋七郎兵衛様・二本木重兵衛様・中根勘門様へも、右之御礼宜敷申上可被下候、誠ニ別紙差上可申候処御座候得共、其段御断可成候、且又中村伝藏

宜敷申上候間、左様思召被下候、先者随分〳〵御機嫌能、御幕可被遊候、又々後日貴顔之節、申入御礼旁可申上候、先々為御礼書状ニ而、御取意

申越候、如斯御座候、早々、恐惶謹言、
信州下伊那郡
遠山木沢村
巳三月朔日

三州幕戸御会所
御同行衆中様

五郎兵衛
伝藏

『三河大谷派記録』（寛政年間）

(147オ)

行司法中之部

見立所御名に寄る

成泉寺^{〔誠〕}

鎌はずらんと能クされる城がり

信照寺

弁舌は涼しひ夏陰の榎前

福淨寺

何れも請らむ大緩中の江原

本光寺

能分別もおもふ面白春の青野

順慶寺

参会の夏に嵐の出る泉田

淨顯寺

仲間では皆か建る家武

西福寺

貞実に心掛ケのよい西はさま

正法寺

御執持の事は皿を明て言赤松

長照寺

思案実のいる稲の首を傾ル田代

羽栗
順因寺

(148ウ)

(148オ)

(147ウ)

(149オ)

(149ウ)

(150オ)

中田 万国寺

三好 阿弥陀寺

今村 専超寺

細川 順行寺

福釜 西岸寺

岩堀 西光寺

大井ノ 源光寺

日名 唯念寺

若林 淨照寺

広瀬 広沢寺

国谷 善導寺

月原 明誓寺

中田 隆勝寺

一色 安休寺

東西に会所を建てますまひ
行司は丸く誘く法中

会所 称念寺

諸相談に思案のいる池鯉鮒

〔墨付ナシ〕

(150ウ)

寛政九年巳三月下旬

御口達書写

巳三月十日、御上棟御規式目出度

被為整、於 御殿御礼被為 仰付候

節、被下置候御直命、如左、

(151オ)

遠路上京寄持、今日者上棟も相済

満足ニ存ル、皆々有難ふ思ふて有ふ、

猶法義相続の上より、本堂も速ニ

成就して、御遷座是有様たのむ、

以上、

(151ウ)

次ニ粟津日向守殿御口達

有難ヒ 御意を蒙らるゝ付、弥々

出情いたされ、一日もはやく

御遷座被為成候様、御頼の事で

御座る、 已上、

(152オ)

御時節柄とハ申なから、かゝる

御直意を奉蒙候事、誠ニ冥加ニ

相叶たる仕合、難有奉存候、夫ニ付、

(152ウ)

御頼ミ被為遊候御趣意、乍恐
先門様御尊慮を御恐察あらせ
(兼思)

られ候而、一日もはやく

御真影様御遷座被為成候様、

御取急キの御事ニ候得者、取あへす

御事之言上仕度候ニ付、翌十一日

京都七講・大坂同行中ヲ始メ、

諸国御門末会合之上、

御影堂御内廻リ并後堂・御廊

下等之御造作、塗物・金もの

御出来寄之次第、逐一相調へ

申候処、今年中ニハ残ル所もなく

御周備被為成候積リニ候、且又

御本堂御建前、当正月より

割仕事ニ仕リ候得ハ、霜月御正忌

前ニ土居葺も被為成候御事、

相違無御座候、依之希者来午ノ

春、両御堂御一緒之御遷座と

御治定被為成候様仕度、京・大坂

諸国一統之連印ヲ以、御請之願書

奉差上候、然者弥々無油断御取持

(153ウ)

(153オ)

『三河大谷派記録』(寛政年間)

(154オ)

被申上候而、御移徙被為有、

先門様御追加之御悲歎

御満悦被為遊候様、御心頭ニ被掛

可被下候、実に日頃等閑ニ有りつる

我々、御類焼の御化導より

驚セ下され、甲斐なき身ながら、

仏恩・師恩の深重なる御事

腸にしみ候より、聊御再建ニ付

作業の働をなさしめ被下候と

思召候ハ、世間の掟を相守り、

御国政に相背かぬ様、御法義

相続の上より、御取持可被下候、

一、御瓦志、先達而、御記帳有之候分、

当五月限、御引請高不残皆納

可被下候、延引仕候而ハ、下重之御瓦

御手後レニ被為成候事、

一、御手伝同行中之儀、御石築・御

屋根方・御築地掛リ・土砂運ヒ、旁々

多人数入用ニ候間、国々御小屋江

増定詰御頼申上候事、

一、大工・木挽・杣、別而今年ハ御ヶ所

(155オ)

(154ウ)

多ク相成候得者、成丈御寄進被下度候、

一、焚出し賄方、去年已来追日及減少、

既ニ当御上棟迄ニ御断可申上之処、

来春之御遷座被為 仰出候ニ付、

諸職人従是相増候ハ而ハ、御遲滞

被為成候而已ならず

(達如)
御上ミヘ御苦

勞奉掛候事、歎ケ敷奉存候、今年限

之事ニ候得ハ、御互ニ御懇志を以テ相賄

候様御出情希候事、

東六条御白砂

惣会所

詰役

三月下旬

三州御小屋

御同行中

〔墨付ナシ〕

(156ウ~159ウ)

寛政九年巳九月廿日

一、西御門跡様江戸御参向、

右者暮戸会所ニ而東派方

(160オ)

掛銭ノ金四両貳分貳朱

錢八拾三貫四百五拾六文

寛政九年巳十月廿八日

御帰京

右同断、

掛銭ノ金壹両貳朱

錢四拾七貫貳百五文

両口

合金五兩三分ト

錢百三拾貫六百六拾壹文

右者小訳上納、

御印願

川辺村

上京 平岩七郎兵衛

〔墨付ナシ〕

(161ウ)

一列之部

見立所の名に寄る

高浜 田島淨貞

遠山の事は初テから引受のよい高浜

(162オ)

(162ウ)

二本木 藤浦善右衛門

何事も脇を見ずに一本鍬の二本木

和泉 都築彦馬

参会はいつも引受のよい酒の泉

棚尾 辻嘉兵衛

相談にかけては下ニおかれぬ棚尾

東浦 中根又左衛門

御法義は追々日の出の東浦

西尾 深谷半左衛門

参会の所は御独故身の振にくひ西尾

花園 寺岡伝兵衛

御法義も段々と美し開く花園

中根 山本勘右衛門

仏法世法をも能く守ル中根

取持方之部

見立植木に寄る

投町 中根甚之助

頼メハ荷物のよひ松の木

中村 中根甚助

ちりぎハすて言ふ立派な花ノ桜木

(163ウ)

『三河大谷派記録』(寛政年間)

(164オ)

椿村 小林源兵衛

家内まで法義に疵のない玉椿

東堺 近藤四郎左衛門

初メてからあけきりの柳木

泉田 神谷長四郎

御法義に実があらハ沢山に咲ふ山吹

新堀 深見佐兵衛

同 深見太郎右衛門

和泉 都築弥四郎

西境 加藤新次郎

行用 阿知波安兵衛

土呂 伊奈又左衛門

堤村 中野清三郎

大草 山本長三郎

竜泉寺 鶴田弥右衛門

大草 斎木長三郎

矢作 義野宗春

同 豊田茂兵衛

国府 沢田武助

中垣内 中根権右衛門

同 中根五右衛門

(164ウ)

(165オ)

浜尾 小笠原好右衛門

同 岡田角左衛門

矢作 林孫右衛門

西尾 永田清六

折々頼めとも顔もわるくせずに

御用脚も柏木

〔墨付ナシ〕

(166ウ)

(166オ)

寛政十二年申三月

御書簡写

大門御再建之儀、追々御成就

有之候付、来酉ノ年三月十五日

御供養会、御治定被 仰出候、

依之当十一月十八日御上棟御規式

御催之御事ニ候、就夫御再建

之儀、段々御成就被為有候御事、

一同難有可被存候、誠ニ

両御堂を始、御大造成御再建ニ

候処、御門末一同多年被尽丹精、

最早来春大門御供養会、

(169オ)

(168オ・ウ)

(167ウ)

(167オ)

御治定被為有候事、全ク各懇志

之願と 御満足被遊候、右御供養

会後、御能被 仰付候先例も

候得者、いまた御作事相残り候御場所も

有之、且ハ御時節柄、旁以今暫被及

御延引、尚無程悉御周備之上、

御触御催可有之候間、各被得

其意、今一段之処、乍左儀被申合

出情御取持之儀頼 思召候、此段

分^而申達様被

仰出候事、

申三月廿六日

〔墨付ナシ〕

寛政十二年申四月十四日

御門跡様御枕時計 三州方

寄進、

出来上り、手間代・

唐木ノ代、

銀九百四拾三匁六分

雲日輪細工

(169ウ)

金銀 台箱 唐木 志んちう
刃がね 鉄 板かね 水金
うるし 金箔 りん ほり物
色ものまで二、

此代金四拾七兩ト

壱匁九厘

右ハ尾州横根時計屋

平七へ払、

(170オ)

世話役之部

見立植木に寄る

中根 杉浦九左衛門

後のない氣生も通ス苗字一本杉

桑原 柴田庄兵衛

堅ニおいてハラへもない石けやき

一色 都築丈助

目通りは見事に見える梅

高落 杉山九右衛門

堅イよふでも細工にきりよひ楠の木

東端 杉浦文左衛門

何にきふても出来のよい檜

(170ウ)

『三河大谷派記録』(寛政年間)

(171オ)

西尾 岩崎吉良兵衛
和らかでつかひのよいきりの木

浅井 辻村五郎兵衛

ふくのない美しひひめこ

大草 川口兵右衛門

内端ではりのよい鎌倉いぶ木

犬飼 鈴木新三郎

風俗ハ六ヶ敷見へても花ハ美しい梅ノ木

大平 山本利助

ほつとして花は美しい柏の木

能見 塚本又七

堅くれと床縁にすれハ見事な槐

新郷 近藤幸右衛門

言ふなりになる直な青柳

同 近藤市右衛門

とふ見ても直ほれたちさ杉

摺村 沢田常右衛門

堅イで用に立熊野の赤檜

竹ノ谷 鈴木伴右衛門

他門て居て能御再建取翳モチノキ

(171ウ)

東城 都築庄右衛門
石川作兵衛

槻と同じ様に御用立塩地

梅ヶ坪 太田又蔵

小山 岡本又右衛門

前田伴右衛門

西境 早川平八

東堺 近藤善蔵

同 同苗新兵衛

根崎 杉浦宇右衛門

福釜 福釜新右衛門

箕輪 鳥居久右衛門

米津 杉浦重蔵

根崎 同 定八

巨海 中村喜兵衛

矢田 杉浦茂左衛門

鷺塚 佐苗武八

平七 松山用吉

西尾 鳥山利兵衛

同 綿屋嘉助

西尾 酒井藤助

(172ウ)

(172オ)

同 杉浦清七

同 木綿屋庄五郎

長沢 伊与田彦五郎

赤松 二村権右衛門

市田 市田源蔵

御油 天野与左衛門

高足 高足源十

吉田 吉田小吉

藤川 天野佐七

丸山 丸山元右衛門

高隆寺 小島庄兵衛

連尺 布袋屋伊助

井田 井田清吉

日名 日名勝右衛門

材木町 山本源兵衛

連尺 たばこ屋源七

材木町 弦屋権次郎

同 佐渡屋十助

桜井 桜田仙右衛門

古井 岩瀬庄右衛門

宇頭 井上重右衛門

(173オ)

(173ウ)

石原源蔵

宇頭 宇頭松右衛門

大友 岩附権六

柿崎 柿崎又蔵

本郷 本郷勘助

筒針 筒針専右衛門

坂戸 坂戸源八

竹村 鈴木新助

世話方此外余多御座候得とも、此所氏少無之付

此条分ハ先ノ場へ出し、名前ハもらし不申候得共、

爰ニ記し不申の処ハご用捨、

寛政十二年申十月

御手配被仰出候御書付写

大門御再建御作事、追_而御進_ミ被

為有候御事、全御門末中、出情_情御取持

之段、

御満足被遊候、御上棟御規式も

近々ニ相成、尚又来三月御供養

会之御事、被遊 御安慮候、就夫

先達_而被 仰出候通、右御時節

『三河大谷派記録』(寛政年間)

(175オ)

迄ニハ、悉御周備も有之候様被遊度

候得とも、彼是と無日数も候得ハ、改_而

左之通被 仰出候事、

一、大門御作事方之儀、来二月下旬迄ニ

皆御成就被為有候様、一統御取持

御頼之事、

一、集会所御作事も追々御出来之段、

出情_情御取持之顯レニ候、此上何卒

来二月下旬迄ニ、御屋根御出来ニ_而

足代等取払、椽板張内廻り御造

作迄、御出来候様、御取持可被申上候、

御供養之節、御依用被為有度事、

但 広椽・鏡天井、其余役所廻リ・

正面通・土間廊下等ハ御在来

通り、追_而御出来可有之御事、

一、御築地之儀本堂御門方北、此節

追々御出来ニ候、此上大門両脇折

廻シ之処ハ、 御供養迄ニ御出来

被為有度、其余大門方北菊御門迄、

并 本堂御門方南西へ折廻シ之分ハ

追_而御出来候事、

(175ウ)

(176オ)

(176ウ) 一、御玄関・御門前供待馬つなぎ等、

御場所柄^ニ候得者、来三月まで^ニ
御出来被為有度事、

一、諏訪町御屋敷^并御堂前御役

屋敷之分、追々出来之事^ニ候条、

御台所御門前角、拝領屋

敷も、無程出来候様被成度候、其外

諏訪町東角御役屋敷・御文役

所・町役所等も、先達^而被 仰出

候趣^ニ有之候得共、是又日数なく

候得者、右御時節迄^ニ地ならし

石居門長屋^ニ、堀程ハ御出来

候様、家建之儀ハ追々御出来之事、

一、御墓町御門前御地面御拝見等、

可成丈御取持御頼之事、

右之外

高麗門三ヶ所、問ノ町御門

^并御役屋敷町役所之分、

御供養会后、追々御出来

之事、

(178オ) 一、来春御供養会后ハ、御作事

如已前、御台所御門内へ引移シ

可申候、其後無抛御作事^ニ付^而ハ

出張番所構申候事、御畑地御作事

小屋之儀、御取払相成候事、

(178ウ) 右之儀、惣^而御作事^ニ付、御雇入

之職方、其外万事取扱方

以前之通^ニ、相改可申事^ニ候、

猶御取^り方等之仕法、追々

申談可被申出之事、

(179オ) 一、御再建^ニ付、諸上納物取扱かた、

又ハ御下ケ金、或ハ無抛趣願も

有之候^而、御定式之外^ニ

御印披露状披成下候儀も有之候、

全ク御再建中之御事、無御余儀

御取扱之事も有之候へ共、是等

之儀も来春 御供養会后、

(179ウ) 御改被 仰付候間、可被得其意

候事、

御台所一統^并御祐筆衆

^江も被 仰渡候事、

(180オ) 此帳部書残しの分、爰に記申候、

世話役之部

(181オ)

(180ウ)

中切 中切善蔵
高棚 高棚庄左衛門
土呂 土呂平吉
梅ヶ坪 杉浦権吉
同 梅ヶ坪仁兵衛
高力 川口七右衛門
中根 山本庄兵衛
同 同銀右衛門
中垣内 鈴木助七
上伊保 倉知作右衛門
同 同伝右衛門
寺津 鈴木久兵衛
天津 中根定右衛門
伊保 都筑伊八
阿知波 天野幸助
大坪 安藤八左衛門
則定 芝田善蔵
水野善左衛門
足助 足助仙六
中山 宇井綱吉

『三河大谷派記録』（寛政年間）

(181ウ)

(182オ)

(182ウ)

片ノ原 宮地九八郎
山田平蔵
藤屋新助
山室 山室源吉
同 同重右衛門
高取 高取文七
棚尾 東浦安兵衛
中根又吉

〔墨付ナシ〕

京都御小屋方之書状
猶々御同行衆中様へよろしく
御伝言可被下候、以上、
幸便ニ一筆致啓上候、先以
善智識様、益御機嫌能被 為
有御座、乍恐難有奉恐悦候、然者
甚御地、皆々御堅勝ニ被成御座候半と、
珍重之御儀奉存候、扱又御普請之儀
追々御出来被遊、御互ニ大慶ニ奉存候、
御影堂御厨子・須弥檀ぬり代

金高壹万式・三千両も御入用と相見へ

申候、余り金高多ク相見へ申候故、尾州・

能州・三州相談仕候^而、御本堂

御厨子・須弥檀塗り上事引受

申度御願申上候、先あらく

仰付も有之候様ニ相見へ申候、夫ゆへ

能州輪島へぬり方職人中^江、

以飛脚相談申遣し候間、左様ニ

思召可被下候、尚又被 仰付候ハ、

書中ヲ以、早々為御知可申上候、猶

重便ニ可申上候、早々、恐々謹言、

(183ウ)

八月六日 矢作 酒井平蔵

八丁 古井源七

(184オ)

幕戸御用会所

御同行中様

(185ウ)

〔墨付ナシ〕

(185オ)

山川詰役之部

見立御材木に寄る

(185ウ)

古鼠 古井小四郎

すねても根上りのない遠山の御材木

川鴛 稲垣新有衛門

唯もおそろしかる横鼻

同 太田佐兵衛

疵かありてはならぬ御拝の角柱

川嶋 磯村伊兵衛

出世して下陣へ出た春山明レの御柱

平坂 新美休八

人からのよひものハ松のなけし

同 新美与次兵衛

六ヶ敷節もよい唐戸の玉もく

寺津 鈴木京蔵

海の事は切者てきいに付ても船は能桁行

行用 阿知波茂吉

お勤めあれは山の御用に桑木

西尾 清水正平

再建に身命も投打て先も見ぬ目くら敷居

味浜 小林庄右衛門

退屈もせず山詰ハ永々の土居

知立 新美次郎右衛門

(186オ)

病て引込居る後にはねはり

藤沢 藤沢源内

山川共^ニ切者なと評判のはね木

矢田 坂田市十

此ころは山ハ断りのやすみ木

古鼠 古井弥次右衛門

読事と書事においてハ天井桁

下村 下村惣右衛門

他所出られてハ老切の指梁

篠田 篠田六右衛門

松井五左衛門

日雇もきふも上手土居の鉄鉋尻

高落組遠山米所詰

定詰役部

新村 斎藤次郎右衛門

細川 細川文六

摺村 摺村又平

久保田 久保田善吉

大草 大草定四郎

見廻り役は折々増してやる梁狭

『三河大谷派記録』（寛政年間）

(187ウ)

京都詰役之部

見立材木に寄る

牛久保 鈴木長松

尋ねても沢山にない一番の牛引

西端 鳥居茂兵衛

万事取鎮のすん芳貞

箕輪 鳥居吉兵衛

唯も取廻しかねる寄進の水盤

八丁 八町源七

居れハおる程難有見する枡形

矢作 矢作平蔵

木の扱も教てやる足堅

舳越 鈴木小七

大友 大友源左衛門

高足 高足吉太郎

井の内よりも能よい御堂のかいるまた

定詰

中立 中立磯吉

戸崎 戸崎兵吉

高須新左衛門

矢作岩次郎

同 新蔵

(188オ)

(188ウ)

鹿島請 同 幸助

中村全左衛門

見出して嬉しかる押沢の御柱

以上、

此余は帳先^二有、

(189オ)

〔墨付ナシ〕

(189ウ)

(190オ)

御影堂兒屋組寸法帳写

左^ニ記申置候御兒屋組寸法之帳、外方

借用仕候^而拝見仕候処、何様御大造成御儀、

暮戸御帳面内^ニハ相見へ不申候故、相記置申候、

浜尾 好右衛門心付

御影堂

長サ
太サ

正入用寸法之写

(190ウ)

御拝柱

一、槻

式丈二尺七寸三分
式尺四寸角

四本

広椽丸柱

一、同木

式丈五尺
式尺五寸

式拾四本

(191オ)

外陣丸柱

一、同木

三丈七尺六寸五分
式尺六寸四分

拾六本

唐戸側丸柱

一、同木

三丈六尺七寸五分
式尺五寸より三寸迄

式十四本

御障子側丸柱

一、同木

三丈六尺七寸五分
式尺三寸

拾本

御内陣余間中柱

一、同木

三丈七尺六寸五分
式尺三寸

四本

(191ウ)

床前側丸柱

一、同木

三丈五尺式寸
式尺三寸

九本

来迎柱

一、同木

式丈八尺七寸
式尺四寸

式本

上重八角柱

一、同木

三丈七尺八寸五分
式尺三寸

三拾本

(192オ)

後堂柱

一、同木

式丈七尺五寸五分
式尺四寸角

拾八本

床後側柱

一、同木

式丈六尺四寸
式尺式寸角

七本

同断片ツカ

一、同木 式丈六尺七寸
壹尺貳寸角

八本

(192ウ)

下家柱

一、同木 式丈六寸
壹尺角

廿四本

後側下家柱

一、同木 壹丈九尺八寸
壹尺角

貳本

下家

一、同木 壹丈六尺六寸
壹尺角

四本

(193オ)

丸柱長短大小

八拾九本

角柱同断

五拾五本

八角同断

七拾六本

惣柱数 〃貳百貳拾本

御虹梁之部

(193ウ)

広椽柵

一、椽 四丈七尺
セイ四尺貳寸
アツ壹尺六寸

貳丁

柵側広椽

一、同木 三丈壹尺
セイ三尺四寸
アツ壹尺六寸

四丁

『三河大谷派記録』(寛政年間)

(194オ)

同断四間ノ間

一、同木 式丈七尺
セイ三尺
アツ壹尺六寸

四丁

柵梁行

一、同木 式丈
貳尺三寸
壹尺三寸

四丁

広椽同断

一、同木 式丈
貳尺三寸
壹尺四寸

貳丁

(194ウ)

広椽四方隅頭貫

一、同木 式丈三寸五寸
貳尺三寸
壹尺壹寸

八丁

広椽ツナギ

一、同木 式丈三尺五寸
貳尺三寸
壹尺貳寸

廿七丁

同断隅ツナギ

一、同木 三丈五尺八寸五分
貳尺三寸
壹尺貳寸

貳丁

(195オ)

同断後方乾角ツナギ

一、同木 三丈八寸
貳尺三寸
壹尺

壹丁

所々十八ノ間

壹丈七尺貳寸

一、同木

貳尺三寸

壹尺四寸

廿七丁

広縁十八ノ間

壹丈七尺

一、同木

貳尺三寸

壹尺三寸

拾丁

十六ノ間

壹丈五尺貳寸

一、同木

貳尺三寸

壹尺四寸

八丁

(195才)

十五ノ間

一、椶

壹丈四尺貳寸

貳尺三寸

壹尺四寸

四丁

十四ノ間

壹丈三尺貳寸

一、同木

貳尺三寸

壹尺四寸

拾丁

兩妻小虹梁

壹丈八尺九寸

一、同木

貳尺壹寸

壹尺壹寸五分

貳丁

同大虹梁

三丈七尺八寸

一、同木

貳尺四寸五分

壹尺貳寸

貳丁

(196才)

御拝中ノ間

三丈壹尺

一、同木

貳尺八寸四分

壹尺八寸

壹丁

同断脇ノ間

貳丈壹尺

一、同木

貳尺八寸五分

壹尺八寸

貳丁

下家海老虹梁

九尺貳寸

一、同木

貳尺三寸五分

壹尺壹寸

六丁

虹梁大小長短

百三拾三丁

御拝楨ノ木鼻

九尺壹寸

一、椶

セイ三尺三寸五分

アツ貳尺四寸

貳丁

(196ウ)

広椽平大輪

四丈八尺

一、同木

貳尺壹寸

九寸

拾九丁

但 貳丈四尺三寸迄

上重大輪

三丈九尺

一、同木

壹尺四寸五分

壹尺

拾六丁

(197オ)

兩妻出大輪

壹丈九尺

一、同木

壹尺六寸

壹尺貳寸

八丁

次覆

壹丈九尺

一、同木

壹尺九寸

六寸

六丁

サシ桁

壹丈九尺五寸

一、同木

壹尺九寸

壹尺六寸

拾貳丁

サシ棟

壹丈九尺五寸

一、同木

壹尺六寸

三尺

貳丁

(197ウ)

丸桁

貳丈八尺

一、同木

セイ壹尺九寸

アツ壹尺貳寸

八丁

御拜九桁

三丈三尺

一、同木

壹尺九寸

壹尺三寸

三丁

丸桁

四丈八尺

一、同木

壹尺八寸

壹尺貳寸

拾八丁

上重丸桁

三丈壹尺

一、同木

壹尺七寸

壹尺壹寸

八丁

唐戸測丸桁

四丈五尺

一、同木

壹尺八寸

壹尺壹寸

廿貳丁

広椽内外ノ丸桁

四丈八尺

一、同木

壹尺三寸

壹尺壹寸

拾五丁

天井桁

四丈七尺

一、同木

壹尺壹寸

壹尺壹寸五分

七拾四丁

上ノ重・下ノ重茅簀

三丈四尺壹寸

一、同木

壹尺貳寸

壹尺

拾六丁

(198ウ)

茅簀

貳丈三尺五寸

一、同木

壹尺壹寸

壹尺

三拾六丁

下ノ重布裏申

式丈九尺五寸

一、同木

九尺五寸

拾六丁

卷尺五寸

スカル風卒ねち付布裏申

式丈卷尺五寸

一、同木

九尺五寸

式丁

卷尺五寸

御拝矩破風

三丈四尺式寸

一、同木

三尺七寸

式枚

五寸

(199オ)

同断上矩破風上登裏申

卷丈九尺式寸

一、同木

卷尺式寸

式枚

九寸

上重・下ノ重大三木

六丈六寸

一、同木

三尺四寸

八丁

卷尺五寸

但シソリ五寸斗リ付申候時ハ

四丈八尺式寸

兩妻破風

五丈四尺三寸五分

一、同木

三尺七寸

四枚

六寸

但シソリ式尺八寸付申候時ハ

式丈四尺式寸ニ三丈卷尺六寸

(199ウ)

七間ノ間半行

五丈六尺六寸

一、同木

四尺式寸

六本

三尺

四間半生行

四丈式尺六寸

一、同木

三尺六寸

拾式本

三尺

ソリ卷尺ナリ

(200オ)

四間半生行

三丈四尺卷寸

一、同木

三尺三寸

拾式本

式尺六寸

ソリ九寸

四間半ノ間半行

式丈卷尺六寸

一、同木

式尺四寸

四丁

式尺

ソリ六寸

(201オ)		(200ウ)	
定堅足堅	四丈七尺	定堅足堅	式丈七尺
一、同木	式尺四寸	一、同木	式尺四寸
	壹尺四寸		壹尺四寸
右同断	壹丈五寸	右同断	式丈
一、同木	八寸	一、同木	壹尺五寸
			壹尺
ツナキ引物	壹丈六尺五寸	足堅	三丈壹尺
一、同木	式尺	一、同木	式尺式寸
	八寸		壹尺三寸
			六丁
	式拾五本		

『三河大谷派記録』(寛政年間)

(201ウ)	
広椽角土居	式丈六尺五寸
一、松	式尺角
	式尺式寸
但し本にて壹尺斗リソリヨシ	
上ノ重隅土居鉄砲尻	式丈六尺五寸
一、同木	式尺式寸
	式尺壹寸
但し本にて壹尺斗リソリヨシ	
上ノ重下ノ重共ニ土居	三丈三尺
一、松	式尺式寸角
但し式丈三尺まで	
下ノ重八重梁リ	四丈五尺
一、同木	末口壹尺八寸丸
	ソリ壹尺
ハネ木	四丈壹尺五五丈五尺迄
一、同木	末口壹尺四寸斗リ
	ソリ壹尺式寸斗リ
上重枯木	三丈八尺五式丈八尺迄
一、同木	末口壹尺四寸
	ソリ壹尺式寸
	九拾本
	八拾本
	百廿本
	八拾五本

(202オ)

束踏

式丈七尺

一、同木

末口式尺

ソリナシ

百拾四本

初重梁リ

式丈式尺

一、同木

壹尺貳寸角

百廿式本

二重梁リ

式丈壹尺

一、同木

壹尺貳寸角

百拾四本

同断梁狭

壹丈九尺

一、同木

壹尺壹寸角

九拾本

(202ウ)

三重梁リ

式丈壹尺

一、同木

壹尺貳寸角

七拾六本

同断梁狭

式丈壹尺

一、同木

壹尺角

五拾四本

四重梁リ

壹丈三尺

一、同木

壹尺角

四拾式本

同断梁狭

壹丈八尺

一、同木

九寸角

式拾本

(203オ)

上重極木

式丈壹尺

一、同木

四寸五分

三寸五分

千四百八拾本

上重野木舞

壹丈五尺

一、同木

式寸五四分

但し檜か 壹寸

三千六百四拾八丁

木舞

壹丈五尺

一、同木

式寸四分

式寸

千六百九拾壹丁

ノ七千三百八拾

(203ウ)

児屋貫之部

初重小屋貫

式丈壹尺

一、松

九寸

式寸八分

七百四拾壹丁

二重同断

式丈壹尺

一、同木

八寸

三寸

七百四拾壹丁

三重同断

式丈卷尺

一、同木

七寸五分

式寸五分

四百九拾八丁

(204才)

四重同断

式丈卷尺

一、同木

七寸

式寸五分

五百廿八丁

ノ式千五百八

児屋束之部

初重束

一、松

式丈卷尺

壹尺壹寸角

式百廿九本

(204ウ)

二重束

一、同木

壹丈八尺

壹尺角

式百三拾壹本

三重束

一、同木

壹丈式尺

九寸角

式百三拾五本

同断

一、同木

壹丈

九寸角

七拾六本

四重束

一、同木

壹丈六尺

八寸角

式百三拾本

『三河大谷派記録』(寛政年間)

(205才)

五重束

壹丈四尺

一、同木

七寸角

百五本

ノ千百四拾九本

下重土居之部

広椽土居

一、松

三丈四尺^ノ式丈四尺迄

式尺式寸^ニ式尺

式拾三本

(205ウ)

梁行土居

一、松

式丈八尺

式尺式寸

式拾四本

唐戸側土居

一、同木

三丈卷尺

三尺^ニ式尺式寸

拾九本

障子側土居

一、同木

式丈式尺

式尺式寸角

廿壹本

上重土居

一、同木

式丈八尺

式尺三寸

廿六本

(206才)

斗引^ノ障子側へ懸ル

一、同木

式丈式尺

末口壹尺八寸

拾七本

柵内梁斗引

一、同木 式丈六尺
末口卷尺八寸

拾六本

下陣ノ上梁斗引

一、同木 式丈三尺
末口卷尺八寸

八拾四本

初重梁狭

一、同木 卷丈八尺
末口卷尺七寸

拾四本

初重梁

一、同木 式丈卷尺
末口卷尺七寸

拾四本

(206ウ)

初重七間末梁行

一、同木 式丈卷尺
末口卷尺七寸

四拾貳本

初重梁二重束へ差ス

一、同木 式丈
末口卷尺三寸

五本

三三五

(207オ)

野桁之部

下重北流南流

一、松 卷丈八尺
九寸ニ七寸

五拾六本

下重東側并御拜共ニ

一、同木 卷丈八尺
九寸五分ニ七寸

百三拾六本

下重隅脇野桁

一、同木 式丈卷尺
九寸五分ニ七寸

百四拾八本

東西隅流

一、同木 卷丈卷尺
九寸五分ニ七寸

百貳拾四本

(207ウ)

下重垂木掛

一、同木 式丈卷尺
卷尺五寸ニ六寸

貳拾六本

下重軒小屋束

一、同木 八尺
七寸角

四百五拾本

下重小屋貫

一、同木 卷丈
六寸ニ卷寸八分

三百六拾本

(208オ)

下重野垂木檜

一、同木 卷丈八尺
四寸五分
三寸五分

千四百九拾五本

上重拵梁

一、同木 四丈六尺
末口卷尺八寸

七拾六本

上重ハネ木

一、同木 三丈六尺
末口壺尺三寸

上重ハネ木枕

一、同木 貳丈壺尺
末口壺尺七寸

(208ウ)

上重隅行詰木

一、同木 四丈五尺
末口壺尺三寸

貳拾本

三拾八本

五拾六本

ノ七千百九拾五

上重野桁之部

上重野桁

一、同木 壺丈八尺
九寸五分ニ七寸

三百八拾本

上重新桁

一、同木 貳丈壺尺五寸
壺尺ニ七寸

四拾八本

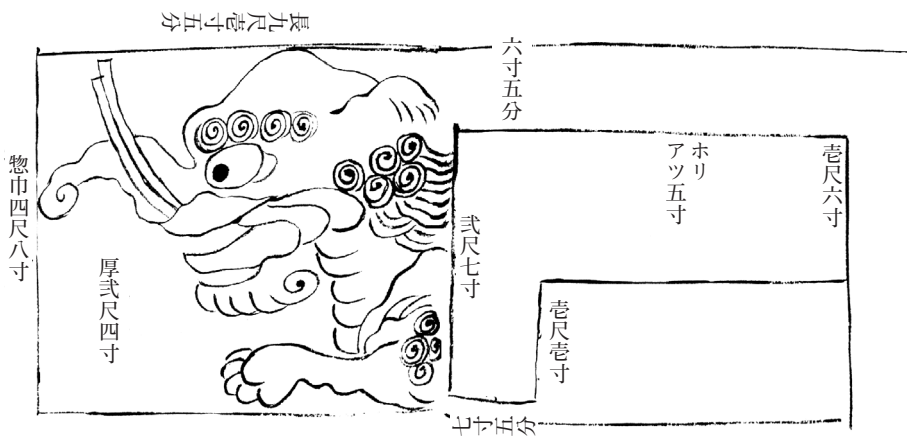
但しソリ元にて三尺斗リ

ノ四百貳拾八

惣ノ 壺万九千三百拾八本

右之通、御大造成御儀故書記置、

(209 ウ・210 オ)



(210ウ) 右之通、甚乍愚筆模之、図迄も

書写し置申候、彼方様ニも御笑詠

可被下候、已上、

外方借用仕、爰ニ記、

浜尾 好右衛門

行年六十歳

(211オ) [墨付ナシ]

厚信之部

見立道具に寄る

塩沢七三郎

諸国に名も聞へし鬼力之車

大塚儀右衛門

大材木引付るかくらせん

中立善蔵

難有咄しに御材木も能廻ルころ

東櫓尾与左衛門

御相続に同行の氣をならす地築棒

須山友右衛門

聴聞丈にゆかみも直す鉄挺

手呂忠治

塩からみもぬけたやわら

大井伊兵衛

隠シといてもすわりのよい御柱石

女人方之部

小林妙理

ものの弁シのよい御手船の三通丸

田島妙貞

綿奉加の木綿ハ外々の引立に成し船

大井阿弥陀寺 坊守

難有振ハ姿に見へる御白砂の土持

野口増度寺寛 おたみ

御奉加事に情の出る浜からの地車

中立 おてる

厚信なるにも聞は引立になる

中立 おそて

東櫓尾 おとも

足助 おしけ

新田 おほの

小山 おとよ

(214オ)

青野 おふさ
土呂 おいろ
熊村 おらく
高津波 おきの
同行の懇念は御再建の万力^キ
以上
此帳先に両会所詰役衆中
書記ス、

(214ウ)

〔墨付ナシ〕

(215オ)

享和元^西正月上旬
被 仰出候御触書之写
覚

(215ウ)

一、大御法会も被為近付候^ニ付、御門
末中為 御化導、来西年^方
二十ヶ年之間、
祖師聖人御名御染筆可被
成下候間、望之仁有之候ハ、在家^ニ
至ル迄、勝手^ニ可被願上旨被

『三河大谷派記録』（享和年間）

(216オ)

仰出候事、
但し御紙之内四ツ切より十六切り迄
御免之御事^ニ候、且御礼
金五両、月番へ金貳百疋
上納可有之事、
申十二月

(216ウ)

一、御本廟^ニおゐて申御経之儀者、
往古より臨時御願
御免被為有候御事^ニ候、然ル処、近年
御再建^ニ付、諸国之御門葉、打続
懇情無油断事^ニ候得とも、大造成
御企^ニ、御用脚も莫大之御事^ニ候間、
此末猶々無怠慢、報謝之誠を
被抽候端^ニも相成可申哉と、兼^而厚
信之同行中々、無抛被願上候^ニ付、
今般諸国之御門末一同^ニ申御経
任願、御免可被為有との御事、
右^ニ付、自今已後於
御本願^ニ、永く例月三日宛、別時^ニ

(217オ)

御読経可被為有之旨

御沙汰^ニ候、右之趣、各被致恐察

利物偏増之 御宗旨^ニ候得者、

年々月々益懇志を被相運候様、

有之度事^ニ候、就夫右申御経相願

候儀ハ、前々如御教化、他力^キ之

安心より催さる、仏恩報謝の

起行作業にして、銘々先祖・父母

等之年回忌日を縁といたし、

全 仏祖広大之御恩徳報謝

之経營^ニ候得者、追善・追福之回向

心^ロ有之間敷者、勿論之事^ニ候、

此旨相守可申候、乍去当流^ニ於テ

仏事法会等相勤候者、悉定散

自力^キ之様申成候ハ、是又偏^ニ相片寄リ

心得^ニ候、是等之存違無之様、万^一

是迄不心得之族有之候共、此度之

御沙汰ヲ御縁といたし候^而、

御正意之程、篤と致聴聞、各

速^ニ信心得、堅固之上より益々

報謝之営可為専一条、深重^ニ

被 仰出候事、
申 極月

(219ウ) 一、右御書立ヲ以被 仰出候通り、
例月三日宛、申御経於

御影堂^ニ被為有 御執行候^ニ付、
法名壺人前御礼金貳両宛

上納可有之候、尤 御印被成下候事、

一、法名・年号・月日^并願人名前、法名

記^江御書載之事^ニ候間、其旨

被相心得候^而、書付可被差出候事、

(220オ) 一、申御経、願人数多キハ、可為宿坊之

働候条、御礼金 上納之節、宿

坊之寺号相認メ、可差出候事、

一、御礼金調達難相成身分ハ、三年

賦・五年賦、或ハ毎月貳百宛致

上納候ハ、於御台所^ニ通帳相

渡し書載、被成下 御印可被

下候事、

(221オ) 御定

(225オ)

(222ウ～224ウ)

(222オ)

(221ウ)

正月	十六日	十七日	十八日
二月	七日	八日	九日
三月	四日	五日	六日
四月	廿八日	廿九日	晦日
五月	廿五日	廿六日	廿七日
六月	十九日	二十日	廿一日
七月	朔日	二日	三日
八月	廿二日	廿三日	廿四日
九月	十三日	十四日	十五日
十月	十六日	十七日	十八日
十一月	十日	十一日	十二日
十二月	四日	五日	六日
閏月	七日	八日	九日

右之通毎月定日之通被
仰出候也、

〔墨付ナシ〕

享和元年

御大門御供養会行列

『三河大谷派記録』(享和年間)

(227オ)

(226ウ)

(226オ)

(225ウ)

酉三月十六日昼九ツ時方
七ツ半迄、

〔墨付ナシ〕

七ぜう

三人

横四間二十五間程

・ ・ ・ ・ ・

同断

初

壺人△平僧衆数不知

七ぜう

△二行式拾人程

七ぜう

三人

凡七百人之余

・ ・ ・ ・ ・

せうそくなし

△飛エン衆不知数△紋白袈裟二行△飛エン衆三行

七ぜう

凡九百五拾人程

・ ・ ・ ・ ・

七ぜう

△

二行

七ぜう

△御堂衆二行△白衣紋白式人

凡廿人余

五拾九人

(227ウ)

・ ・ ・ ・ ・

△御一家衆二行△白衣紋白一人△御院家衆
余間三拾三人
内陣廿五人
式拾式人

(228オ)

モエギシタ、レ

三人

法師六人

△列奉行 △白衣紋白式人△

同断

三人

法師六人

(228ウ)

スヲウ

黒笙

スヲウ

式人

△御連師△
楽人衆

同断

式人

同 黒ヒチリキ

三人

同 同笙

三人

同 同横笛

五人

同 赤ヒチリキ

三人

同 浅黄同

壹人

同 赤横笛

三人

同 黒笙

四人

(229オ)

御シトネノ

僧壹人

紫スヲウ

壹人

△列奉行

同断

壹人

御香炉カ

僧壹人

白衣紋白壹人

(229ウ)

シタレ御供

壹人

沓持

壹人

モヘギシタ、レ

壹人

△下間 刀持壹人△

璽珞冠

児拾人

蓮花持

同断

壹人

立傘持

壹人

同断

壹人

(230オ)

御児

三人ニ三人付

僧式人

△

浅黄法被
白ノ七条

四人

モエギネリ
カンムリ

三人

同断

三人ニ三人付

僧式人

(230ウ) 御大門口迄

御輿二御乗

コブ茶シタ、レ

壺人

御法服地ハ火紋白

御門跡様

但し金入

御七条ハモエギ

鳳凰衣ト申

鳥ゑぼし

御輿八人

御法服・七条ハ

大内從御拝領、

右同断

壺人

(231オ)

僧壺人

御扇

同壺人

御持

同壺人

柄香爐

僧壺人

同壺人

御花瓶

同壺人

(231ウ)

立傘式本

御沓持

桃色ノスラウ

四人

御兄二行

其外

右同断

御供

四人

(232オ)

御供何人略ス

紋白袈裟冠

刀差僧

△御連師様方

押へ

御一家衆

同断

右同断

(232ウ)

カイキスヲウ

五人

モエギスヲウ

九人

御役人衆

上下着拾八人

同断

五人

(233オ)

御列三人

菊の御門より三間通り

両側備後ニかうらひへり、取

中ハさらし布五巾敷、

但し御影堂迄、

御大門口重も下重も上下共ニ、

阿弥陀経ニ而御廻り、

(233ウ)

二重のらんかんの内を御経にて、

御門跡様・御連師様・御院家様、以上

六拾三人にて、七遍御廻り被遊、八遍目は

二重之内にて、音楽にて

五十六億七千万の御和讃三首引、

御大門下ハ、切石ノ上ニ畳を敷、柱之内を

御一家衆御廻り、柱之外を御堂僧方御廻り、

上下ともニ七遍ツ、御廻り、四方の角ニ

拍子木打四人、

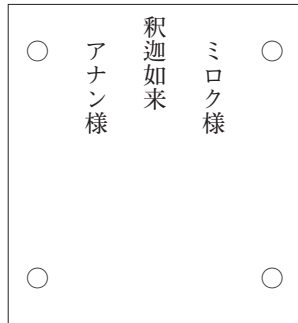
但し御堂僧方、

(234オ)

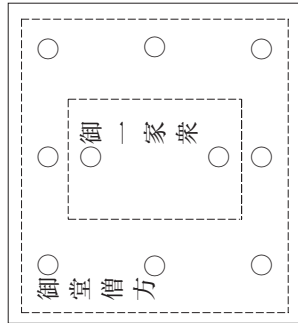
御歸リ之時は、御堂の椽より高廊下を
御坐敷まで御ねり被遊候、

(234ウ)

御門跡様・御院家衆様御廻り、



図下上門大御



拍子木打上下共ニ相添、

右之通ニ御座候、已上、

(235オ)

〔墨付ナシ〕

(235ウ)

両会所詰役之部

(236オ)

金勝寺

有レハ有もの珍しひ御再建の一番虹梁

西尾 榊原正九郎

諸のものも手を置奥深キ遠山の御柱

矢作 野村聞成

年寄りてはね廻り歩行海老虹梁

高力 川口権蔵

諸方の用も持掛る帳面の隅木

小山 岡本銀右衛門

角のないやうに内陣の御柱

高津波 深谷源四郎

何か細かに氣のつく御拝の細もの細工

堤 甲村市十

御再建も呼る名人声ハ高かうし天井

笹目 野村源蔵

同行の氣もつなき虹梁

西尾次郎兵衛

(237オ)

書事は達者な腕木

小山 岡本重左衛門

何を書かせても見事な化粧垂木

川島 平岩七郎兵衛

まだ若イか用に立調法な杉なる

熊村 深谷重蔵

知立 知立伊兵衛

大村乙助

和泉屋伝吉

京屋善助

幕戸 中根善蔵

川野 石川惣兵衛

知立 知立藤右衛門

同 中野屋又七

それ／＼御注文の有やり木

牛田 岡田新右衛門

今村 舩谷庄兵衛

同 田中源左衛門

笹目 野村新右衛門

熊村 深谷七左衛門

高津波 同 治兵衛

『三河大谷派記録』（享和年間）

高洲 加藤孫左衛門

会所より呼にやると直に間に合ふ

足代丸太

安城 岡田常喜

川野 太田新吉

古井 岩瀬孫右衛門

西矢作 三浦新兵衛

池端与右衛門

中会所へ出てハ昼夜も寝ずの番

中島 中島是照

江原 江原浄誓

本地 本地宗念

大浜 大浜泰善

有かたき心に真はなしの華

仏智の不思議ハ信の有の実

寛政四壬子歳 俗名

釈 実聞 山本兵三郎

八月十三日

皆かおしむ名月の西方

右之通、御再建中諸事御取持之
人数書記置申候也、

(239ウ)

〔墨付ナシ〕

(240オ)

享和元年西六月評定書

御真影様一件 口上

今日は大暑之砌、各御互ニ御参会

御太儀之御事、別之儀ニも御坐なく、

兼而国内一同門徒江被 下置候

御影様、針崎表ニ（佛堂寺）而御三ヶ寺御立合

之上、御紐解相済、於会所も御互ニ

申談候通、定日無御差支、御披露

相済、難有奉存候、各御聴聞之通、

御書立等深重之 思召、誠ニ

御心被為流、あくまで御教化に

預り、無此上人界之本望無申計も

難有奉存、日頃之誤り此時節に

えしん・さんげ不仕ハ、いつの時敷

御教化蒙ル時節、可有御座哉、何卒御互ニ

申合、御教化之御すみかねにしたがひ、

(241オ)

(241ウ)

片時もいそぎ御法義御相続、信不信の
御沙汰無御座候而ハ、大津系を拝し
奉る様ニ相成候而ハ、如何計敷ヶ敷、
御門主様初不及申、極楽浄土より
先主様御照見坐毎々ニ、
御影様江御立被為歸ての御化導、

然ル処御再建被 仰出候も、名聞

利欲無之御事ハ、御互ニ心付候得とも、

やゝもすれハ、御取持之厚博（力）、しぜんと

人我をつのり、いつの間か三宝僧の

おしへをやぶり、我心得顔ニ而、御取持

無之、御方ハおのずから我手下之様

相心得取計之事とも、またんニ候得とも、

外相に顕れ候迄ニて、信内ニ無之儀は、

勿論ニ候処、内外ともニ同しうて、大切成

御安心相続之道具を似テ、浮世を

わたる口ふさきに相成、十余ヶ年之

御事故、少しハ人我之可有と、互に

我慢に道理を付、りくつと欠引ニて

人をこまらせ候様ニ、御教化の鏡江

あらわれ候様、恐入重々あやまり果

(242ウ)

(242オ)

(243オ)

可成丈之御取持、見聞之差図、心頭^ニかけられ、世事之御相談、今暫之間有之候様、致度御事^ニ御座候、左候得ハ、上たるハうやまひ、下たるハあわれみ申候との御教化奉蒙儀、專一行末々迄も、

御影様御順在被為有候共、御差障リ^ニ相成とも、他人わるき^ニあらず、皆此方より相送り候御事と御引請無御座候^{而ハ、}此度被下置候、

(243ウ)

御影様難有恐受仕とは申かたく候、右之御心服、今日此御坐^ニ而信行之御別座、御互^ニ聴聞仕度候、弥々難有御引請御座候ハ、御教化通、御書立^ニまかせ、哲く御順在御延引被為有候共、末々迄も被為行届候^{ニハ、}別紙之通、御三ヶ寺之御差図受申候方御尤^ニ存候、右伺書左之通り、

御伺奉申上候口上之覚

(244オ)

一、今般御再建御成就^ニ付、国内惣門徒^江

『三河大谷派記録』(享和年間)

(244ウ)

歛^(奉如)喜光院様 御影被下置、難有仕合^ニ奉存候、御紐解^ニ付、御寺法其役筋^ニ御示談可申上本意^ニ御座候処、暮戸役所之儀ハ、御再建中十余ヶ年之間、御法中様御入込、是迄御示談御座候、会所之御事故、

御紐解定日御使僧様へ御願申上候、然処御三ヶ寺様方御使僧様へ、御内談被成下、末々御相続被為有候段被思召、於針崎^ニ御三ヶ寺様、御別席^ニ而

(245オ)

御紐解被成下、重々難有奉存候、且同行共、是迄心得違、何事も行届不申段誤り、果同行惣代ヲ以、各様方へ御侘言申上候通り相違無御座候、御聞届之上、差支可有御座候御儀^ニ候ハ、御三ヶ寺様・御使僧様、御示談之上、会所^ニ而披露之儀、御差留メ無御坐、旁以九日迄、夫々御法中御出席^ニ而奉蒙

(245ウ)

御教化、無此上も難有仕合^ニ奉存候、御影様御儀は、早々御箱へ奉納、同行共会所^ニ而御番仕候、此御国内

(246オ)

御順達之儀、一刻も早々 御化導
 御延引^ニ不被為在候様、御取斗奉
 願上候、組々同行打寄り申候^ニは、
 乍恐此度御三ヶ寺様御差図無御座
 内ハ、御順在ハ不及申、拝礼等も
 難相成、歎ヶ敷奉存候、何卒組々^江
 御三ヶ寺様方ヲ御請待申上、乍御苦勞
 御院主様之奉蒙御教化、喜ヒ申度候、
 御録所・御役寺様御儀^ニ御座候得者、
 御末寺方彼是御差支も御座有間敷様、
 奉存候、当会所^ニ而御法中是迄之
 御行司様方、御示談之程、御頼申上度候
 得とも、御再建^ニ付、御新例殊^ニ御交代
 多御座候得ハ、御役寺方^ニ而末々御評事
 御治定可被成下候形ヲ以、五ヶ寺様^{并ニ}
 吉田御坊へも御願出申候間、先
 御三ヶ寺様^ニ而御示談被成下、一刻も早ク
 御順在被為有候様奉願上候、延引
 仕候^而ハ、京都^江対し、猶又 御書立
 深重之 思召^ニも恐入候、前文之通り
 御三ヶ寺様より御末寺様方へ被仰渡無御座

(246ウ)

(247オ)

(247ウ)

(248オ)

(248ウ)

内ハ、御延引被為相成、猶又御三ヶ寺様方
 最寄り^ニ而、御末寺中其手永々^ニ而
 御勤被成下候事、相叶不申候ハ、当国
 御順在之廿八日講、御使僧様御付渡リ
 御願申上度、左様^ニも相成候ハ、即刻
 同行惣代上京仕、御願申上度、国内
 無御差支趣、夫以御尋被為有候節ハ、
 乍御苦勞御三ヶ寺様御上京可被成下候、
 且又御使僧様御付渡リ^ニ相成候時は、
 正月極月御延引^ニ相成申候、其節ハ
 廿八日講 御書様御紐解之御当
 番様方御勤被下候様、又ハ御下末々へ
 御当院より被仰付下候様仕度、何レとも
 可然様、無御差支 御化導奉蒙
 度奉存候、
 一、御影様御三ヶ寺様御預リ被下候共、
 任御差図可申上候、乍去暮戸会所
 之儀も、今般高麗門二ツ作事方
 被仰付候儀ハ、一同御承知被為在候通り、
 右御場所無御座候^而ハ、手配り相揃不
 申候、依之、

(249オ)

御影様御順在之間ニハ、暮戸会
 所へ御歸リ被為存候^而、拝礼仕度候、
 御再建ニ付、御用之儀相済候ハ、
 御三ヶ寺様之内へ、何れ共御預リ被下
 候様奉願上候、何分同行共之儀ハ、
 愚知之者共ニ候得ハ、御教化之御手免シテ
 被成下候^而ハ、御寺法ニ背キ心得違、御太切
 成一大事、人我之情をつのり、重々
 恐入候、此已後御示シ御敬訓^教を奉蒙、
 寺・国法ともニ内外相嗜申度候、
 組々同行惣代如此御座候、以上、

(249ウ)

幕戸
 会所
 組々
 同行
 西六月

御三ヶ寺御銘々一通ツ、

(250オ)

乍恐被仰聞候趣承り違候^而ハ、行届
 不申候間、御取次様方御口上書被成下
 候様奉願上候、已上、
 右之通ニ御座候、今日此件ニ相決シ、
 同行式人ツ、今日中ニ御三ヶ寺へ
 致手分ヶ差出申度候、同行先方へ参リ、

『三河大谷派記録』（享和年間）

(250ウ)

委敷申候ニハ不及口上、今般
 御影様被下置、先頃御紐解被成下
 難有奉存候、右ニ付御順在之儀
 御三ヶ寺様御差図奉蒙度、委細ハ
 組々同行内方口上書認メ申候、何卒
 可然様、御差図被下候様奉願上候と
 申計リ^ニ、宜敷其外色々御尋
 御座候とも歸り、同行共へ可申聞と申
 候^而、此方方口聞候事、御無用ニ奉存候、
 先暫く中入

(251オ)

一、高麗御門之義、御作事弥大浜^ニ
 而
 作事場、京都よりも御頼、何卒御正忌
 前船積御座候様、御内々御頼事候へ者、
 各々取^ノ御示談可被成候、尤御材木之儀
 夫々御引請も有之候得ハ、今日御治定
 次第、材木ハ大浜^江相廻り候、且大材之
 義ハ、手入兼候得共、取^ノ吟味致候ハ、
 御間ニ合可申哉^ニも奉存候、左候得ハ、弥
 過急^ニ右之手配り、最寄々々之御世
 話役其御心得役者、役人割追々
 しぜんと可有御座候間、御違背なく

(251ウ)

一きよふけん、いとま乞之仕打御勤

申度御事^ニ候、

京都御台所御操合セ金御大借ゆへ

殊之外御難洪、被為在候御様子、追々

諸国へ御頼ミ事共も有之、當時之

御操合セ御凌被成候得ハ、じねんと御皆済

之時節も来り候得とも、御大門御供養会

迄、諸国一同御小屋相詰御普請

御急がせ申上候斗り^ニ而、早速御成就ハ

被為在候得共、御互^ニ身こたえ候御取持ハ、

不仕奉恐入候、御本廟之御借財^ニ

あらず、銘々之不懇志^方、

御門主様御尊慮いたませられ^(達加)

候御儀可有御座候哉、分限^ニあらさる

義ハならねとも、御称名共小首を

御かたげ申度御事、先ハ川向之

けんくわと存候得ハ、何も世話^ニは成不申

候得共、心安樂^ニと御称名之唱させ

被下候、殿方の御影、能々御しあん

此儀も一寸乍序、御噂申上候、乍去誰

言ふと申主ハ無御座、是か是迄之

(253ウ)

御世話御取持之御意内を、筆^ニ荒増
申候也、

くれくも今日ハ御留り、しつぽりと

御相談、必御茶付相済御帰りの儀ハ、

御無用御申合、専^ニ奉存候、已上、

西六月

〔墨付ナシ〕

(254ア・256ウ)

(257オ)

享和三年亥五月廿三日

幕戸御会所へ参集之節

評書写

(257ウ)

一、今般、態々組々同行中御惣代御参

集被成及、御示談^ニ候件々、当会所

之儀、従来遠山御材木御伐出シ

御取持被申上候^ニ付、御用所出

役出張、以旁々其御掛り

御代官所迄御聞済之上、多年

出木之間、無差支御継立相済

候上ハ、引払可有之処、

従京都追々御作事等被仰越

(253オ)

(252ウ)

(258ウ)

候ニ付、各々一統御取持被申上候通、
近頃 御法事前、手洗躰家形^(詠)
無難ニ着、皆出来之御間ニ合、難有
奉存候儀者、御見聞之通、依之以
思召女人講中^江

御菓子被 仰付、并御納戸

方々御書簡至来、拜見之上、各

御菓子配分御頂戴可被成候、

猶又密談ニ手洗躰覆^(詠)并京都

御居家ニ五・六人宛、御普請皆

御出来迄詰呉候様との

御頼事ニ候得共、当会所相続

之儀無覚束、猶又

御国法^江対シ、一分先引払相片付

不申候ハ、でハ難相済、会所御執持

之儀も、多年故行届キ不申、依之

当五月限家財相片付、当村

御支配所へも御断申上度候、右之

趣今日御決シ有之様ニ致度、早々

京都^江奉申上度候、右之通申

上候時者、京都之御家屋、国元

『三河大谷派記録』(享和年間)

(260オ)

同行御相談之場所無御座候而已
ならず、

御真影様、是迄会所ニ御預り

有之候得とも、御住居無御座候、

惣御門徒^江 御ふぞく之御事ニ、

末々迄御相続專一之事ニ候、左候

得者、後日御示談之評書、左之通

当月廿九日夕、組々^江御預り之事、

但し一ト組ニ十五日宛、年々くじ取^而

御取御預り、外組^江御請持被成度

候ハ、其御預り之組合方御逢対ニ

被成候方可然候、右之御示談ニ相決シ

候得者、

御真影様ニ会所附廻リ会所ニ

相成申候、其組々^而、会所之儀ハ在家ニ

不限、寺方^而も最寄之氣込ニ

まかせ御取計、十五日之間、御順在

御化導之儀ハ、何れとも其組之

御示談相決シ候故、京都へ申上候ニハ、

組々^而会所相建申候得ハ、月番

之組別紙ニ申上置候得ハ、当ル月之

(260ウ)

(261オ)

(261ウ)

組へ 從京都御用状来り候得ハ、

其組方最寄見立、組々参会有

之候様致度、左候時ハ、惣組々惣代^ニ而

御世話方御名前改御記帳有之、

京都へ御差出し之上ハ、右之当テ名^ニ而

御用状参り候得者、京都之御様子

相訳り申候、猶又自然と京都^ニ三州之

御居家も四・五人宛差置候様^ニ、

相続可相成哉、賄之儀改り候上者、

格別之儀も無御座、惣組々以御割合

月賄、尤加賀・能登・越中・越後・

江州・三州、別段御頼之事、右之

国々御居家等大造成御引請、最早

取掛り之御事^ニ御座候、夫レ^ニ三州も

在京 御頼之御断難申上候、

御思安可被成候、

(263オ) 一、組々 御印書御願込も

九百本余、近々御差下シ有之

候得ハ、不残相渡し被下候様相成候得ハ、

御安心可被成候、

御示談思召御座候ハ、先始メ^ニ

一、御真影様御預り之月割被成

候故、組々御披露之方可然奉存候、

猶又組々思召ハ、当月廿九日まで^ニ

当会所迄、否之御挨拶御申入

可被下候、其節当会所引払、

別段^ニ御案内ハ不申候間、各々

御参集之上、御取片付可被下候、

夫レ迄ハ月番^ニ而相勤申候、是悲々

今度ハ留守居之銘々御断、呉々

被申入候得者、今日御評談相決シ

候様、御尤^ニ奉存候、已上、

(264オ)

亥五月廿三日

会所

御世話役衆中

(264ウ)

当日参会引請人別左^ニ記、

御真影様 亥五月廿五日方 月割

六月朔日方十五日迄 高力組

御引請 兵右エ門

平吉

(265オ)

同十五日晦日迄

高落組

(265ウ)

七月朔日ろ

同断
九右衛門

五郎兵衛

岡崎組

同断能見町

又七

伊助

十五日より

小川組

同断

須山
友右衛門

桑原
庄左衛門

曲一村
源四郎

則定
善蔵

八月朔日ろ

山内組

引受
七三郎

平蔵

新助

清八

同十五日ろ

梅ヶ坪組

同断

安右衛門

伊八郎

『三河大谷派記録』(享和年間)

(266オ)

九月朔日ろ

新郷組

同断

市右衛門

重蔵

十右衛門

同十五日ろ

矢作組

同断

川島
七郎兵衛

本郷
勘助

十月朔日ろ

知立組

同断

今村
庄兵衛

笹目
源蔵

同十五日ろ

箕輪組

同断

中根
九左衛門

浜尾
六郎兵衛

十一月朔日ろ

吉良組

引受

味浜
庄右エ門

鵜ヶ池八郎右エ門

同十五日方

東城組

同断 源兵衛

藤八

十二月朔日方

宝内組

同断

西廻 源右エ門

深沢 豊吉

同十五日方

豊川組

同断

長沢 彦五郎

篠田 六右衛門

子正月朔日方

乙川組

同断

大平 利助

池金 養助

改名武右衛門

右之件々、組々ニ而御披露之被成方、

当会所之儀、引弘候儀、猶又十五日ヅ、

御預リニ相成候上之儀、其組小参会

村々不洩様御呼出し、其寺々江

(267ウ)

(267オ)

其村々同行衆々、急度御届ケ可
被成候、後日ニ至御差支無之様
御心得、御披露可被成候、以上、

〔墨付ナシ〕

(268オ~277ウ)

(278オ)

御本廟御大借ニ付、無抛御上段
善智識様御耳ニ達し、甚御心痛
御苦慮被為遊、当三月

前住上人様廿五回御忌御法会御執

行被遊、右御法会后、廿三日ニ

御直命、諸御末寺并諸門徒迄ニ

厚御頼奉恐入候、仍而左ニ記置申候、

児時文化十一年戊三月廿三日辰中刻

於小寢殿ニ

御直命

御直命

今般、前住上人廿五回忌引上の法会も

昨日限り及満座致ス事しや、何れも

遠路参詣奇特之至リニ存スル、扱今日召寄セ

たる事ハ、先再建之儀ハ、天明類焼之砌、

(279オ)

(278ウ)

(279ウ)

前住上人深々悲歎有て、製作之文^ニも
心を尽くし、書^読浅し玉ひ、予^{達如}が幼齡の身
として、再建を受伝へ恐み思ふ処に、
両堂元のことくに成就し、剩へ諸宇に
至ルまで束^ニ周備せし事、全以テ仏法
不思議の力^ヲ、且ハ前住上人遺徳の顕レ、別^而
諸国門葉の不惜身命の懇志のいたす

(280オ)

ところと深々満足致ス、かたのことく大堂を
始メ、大造之造営、時日を経すして成就に
付ては、おのづから其用脚も借財に及ヒ
止事を得ズ、かく迄大借に成りてハ、徒^而来門
葉の懇志の助力キハ相隠レ、唯名聞の再建と
而已、他門^ニ於テハ存スべきや、然ル時ハ前住上人^{兼如}
遷化の期迄も日夜御苦慮有之、遺志^ニ
背キ、且は諸門下の粉骨碎身の懇志も、
空く成ル而已ならず、予が当職に至り、右等之
儀に及ヒ候事ハ、前住上人遺慮に對し、

(280ウ)

且は門葉の懇志に對し、予が当職の
本意も立かたき事、旦暮悲歎に及ブ事じゃ、
是完全く予か不徳のゆへと、弥々以テ歎ケ敷存
ズル、併し去ル未ノ春ハ遠忌の法会も滞なく

(281オ)

執行^ニ付ても、諸門末の懇志浅からざる
ゆへと、いよいよ満足いたす事じゃ、夫レに付ても、
借財末タ返済の期もみへす、懇志の顕レ
ざる事ハ、莫太の借財故とは言ふながら、
不本意の至りと日夜苦勞いたす事じゃ、
夫レに付ても、当時此頃の次第にてハ、本廟
相続も無覺束存スル間、此度格別に省略
に及ヒ、嚴密^ニ取締りを命して、家中の者
ともに、右之次第申聞せたる上、家人を減し
門戸を閉、万事質素の取締りに及ふ、

(281ウ)

是等之儀ハ別^而累代へ對し不本意の至り、
且ハ慈愛もかけて、外実甚ハタ悲痛に
及フ事なから、誠^ニ以止事を得さるゆへじや、
前来申聞たる通り、何レも年来疲レ
の程も深く察し入事ながら、此上ハ唯門
葉の助力^キを相頼より外ハさらさら無ヒ、
既に今度前住上人引上の法会も、借

(282オ)

財之儀ハ、右申ことく造営より起ル所にありて、
先代^江對し報恩とも相成べき事なれハ、
予が微志を汲得て、偏^ニ懇情を相頼事
じや、扱銘々の安心の一途、兼^而聴聞之通り、

(282ウ)

当流之正義ハ他力^キ本願之^キことわり心得
誤リ無キよふに、正意を能々聞開キ、信決定
の上より行住坐臥をえらばす、仏恩報謝の
称名常に退転せぬよふ、自ラも信し
人にも教へ聞せて、自他一味の志を同しふ
して、仏祖広大之恩徳を喜ヒ奉りて、
弥法義相續して、本廟相續無滯様

(283オ)

一同心を合せ、仏祖代々の報恩謝徳を
存シ、且ハ予が当今の苦慮を銘々の身に
引受、弥々出情^情を致し、不日^ニ懇志之程も
あらわれ、借財も済よりて安慮致ス様、
遍^遍ニ懇情の取持を相頼事じや、猶又
委細之儀ハ、家司之者共より演説^ニ及フ
間、何レもよろしく承知いたすよふ、

(283ウ)

御直命後、下間様暫く御演説有之、
一、其後御借財^ニ付、折節御門末へ
御直命被為
有候得共、不残御書
記不申略仕候、

御直命後、国々上京之同行、

(284オ)

其国々^江御引請被申候分、則
左之通^ニ御座候、
御直命^ニ仍^而諸国引請之分

(284ウ)

一、金五万両 大坂
一、金五千両 京法中
一、金貳万五千両 近江
一、金壹万貳千両 三川
一、金壹万両 越中

(285オ)

一、金五万両 若狭
一、金四万両 豊前
一、金四万両 越後
一、金壹万両 五畿内
一、金貳百両 和泉
一、金四百両 飛驒
一、金壹万五千両 能登

(285ウ)

一、金五千両 播州
一、金貳千両 勢州
一、金 尾州

(286オ)

一、金三千両 大和内
一、金壹万両 五ヶ所
奥出羽 州

一、金壹万五千兩

筑 筑
後 前



戌三月廿八日

右者大広間ニ御演説、

今度御直命ニ付、諸国御門末

御借財御引請被申候、

(286ウ)

右之国々引請之書付 御上覧之上

御直命御礼

(287オ)

速ニ出情懇情之程満足ニ存スル、

〔墨付ナシ〕

(287ウ~288ウ)

御大会ニ付

御堂御洗人足割合

文化七年末 正月十一日人足立

但し宮宿

綿屋泊リ、

(289オ)

『三河大谷派記録』(享和・文化年間)

未正月十七日始リ、

(289ウ)

一、貳人半

十二月十五日

知立組

金三両壹分ト

拾一匁貳分五厘

割

一、貳人半

十二月十五日

矢作組

金三両壹分ト

拾壹匁貳分五厘

割

(290オ)

一、貳人

十二月十五日

小川組

金貳両三分

割

一、壹人

十二月十五日

新郷組

金壹両壹分貳朱

割

(290ウ)

一、壹人

十二月十五日

梅ヶ坪組

金壹両壹分貳朱

割

一、壹人

十二月十五日

山内組

(291オ)

一、壹人

十二月十五日

金壹両壹分貳朱

岡崎組

金壹両壹分貳朱

割

一、壹人

十二月十五日

金壹両壹分貳朱

乙川組

割

(291ウ)

一、壹人

十二月十五日

金壹両壹分貳朱

豊川組

割

一、壹人

十二月十五日

金壹両壹分貳朱

高力_キ組

割

(292オ)

一、壹人半

十二月十五日

金貳両ト

高落組

割

三匁七分五厘

一、壹人

十二月十五日

金壹両壹分貳朱

東城組

割

(292ウ)

一、壹人

宝内組

(293オ)

一、壹人

十二月十五日

金壹両壹分貳朱

吉良組

一、金五両壹分ト

九匁五分

箕輪組

割

右ハ、御土蔵屋根御修復一色也、

(293ウ~295ウ)

〔墨付ナシ〕

(296オ)

文化十年 西七月十八日暮戸出立、
同九月十九日帰国仕候、

一、御本山御借財_ニ付、諸国へ内仏

散銭志之儀_ニ付、御先触出、

御用書持参御差向_ニ而

大草村 川口兵右衛門

東端村 杉浦文左衛門

一、右両人、信濃国御末寺百式十ヶ寺

不殘志御記帳相濟、其節前文_ニ

(296ウ)

(297オ)

有之候、五ヶ寺之旁々へも参上仕、先
年遠山御見舞之御礼挨拶等
仕候、右歸り之節、彼四人之衆中へも
立寄り、是又先年遠山御見廻挨拶
仕、与惣兵衛殿方ニ宿仕、馳走ニ預り
申候、右四人之衆中何レも曆々なり、
元来三州黒柳一統と申^而、今
信州小玉村ニ住居^ニ、只今^ニ而ハ
式拾五軒有之由、式百五拾年以前
織田信長之兵乱、三州御門徒
弘之時節かと被存候、誠ニ以因縁
御事ゆへに、如此書記置候、

(297ウ)

(298オ～307ウ)

〔墨付ナシ〕

(308オ)

文化十二年亥正月十日方当御会所ニ
御参向、御待請之ため普請ニ取掛り、
御殿建立仕候、

文化十二年亥三月御参向

『三河大谷派記録』(文化年間)

(308ウ)

一、御門^(達如)跡様東都御下向、
三月十日晴天八ツ時
当御会所 御殿^江
御入輿、

当御会所番

川口権蔵

平岩七郎兵衛

中根重右衛門

天野幸助

杉浦文左衛門

(309オ)

御菓子料

金式拾七両

組々

元方衆中

同行中

右者、岡崎御本陣^江持参、

御勘定方^江十日夜上納、

(307ウ)

外ニ、

御掛銭 西出張会所

善七

一、金拾八両式分

一、錢八拾貫四百五拾宛

西本郷

世話方
惣右衛門

新郷

幸七

牧内

助蔵

同

与左衛門

広畔

重蔵

東矢作出張会所

一、金八両壹分式朱
藤左衛門

一、金三分
但し銀壹枚也、

一、錢貳百四拾八貫六拾四文

西派

一、金五両二分卜
専修講中

貳百八文

御掛錢
暮戸
矢作
両会所

上納ノ金三拾三両貳朱、

錢三百貳拾八貫七百貳拾六文

東矢作出張所

桜井
長右衛門

同所
彦右衛門

寺領
忠右衛門

川島
權左衛門

同所
伝十

村高
彦兵衛

世話方方中代

乗蓮寺

満福寺

誓願寺

西心寺

樂円寺

右上納物内訳御印出、銘々江相渡濟、

江戸御供人別

銘細張

御道具役割

人足其外小前、

右之書物御会所長持ニ入置有之候、

〔墨付ナシ〕

(312ウ～327ウ)

去ル酉年御借財御上聞^ニ達し、

御門^(追加)跡様甚御苦慮^ニ被^レ 為有之、

酉年諸国御門末^江、

御直命ヲ以御頼被^レ 為有、既^密堅年

戌ノ三月御法会御執行之後、諸国御

門末^江 御直命^ニ而御頼、其節国々

上京之御門末方御引受高申上候処、

甚御満足被^レ 思召、直様御礼

被^レ 仰聞、難有恐入申御儀^ニ御座候、

尤五ヶ年之間^ニ御上納可仕旨、御請

奉申上候処、其後諸国一統延年^ニ

相成、是又甚以御苦慮被^レ 為有之候、

然ル処文政四年巳九月諸国一統上京仕、

大寄会^ニ御座候処、御借財御皆納之

御時節^ニ相成、御安慮被^レ 思召候、勿論

諸国一同丹情^(情)之抽出候故、先々

御安慮之時節^ニ相成、一統御互^ニ奉恐悦、

尤是迄折々御直命御頼御座候得共、

是又委細^ニハ記不申、御安慮之御時節ノ

(329オ)

(328ウ)

(328オ)

御直命而已、相記置申候、左様^ニ御承知
可被下候、已上、

(329ウ)

文政四年巳九月晦日於御集会所
御礼御直命

何れも、賑々敷能不社上京奇特に存ス、

誠に先達^而諸国門末へ直命ヲ以相頼趣

意、追々行届キ、しかしより已来、国々一同

不惜身命之懇志の出情^(情)によって、安慮の

時節に及ふ事、全く諸国門家の法義

相続の上の信施により、且ハ報徳の

群類候ところと不残満悦する、尚又本廟

永久相続のため、別^而厚志をも不欠に

相運フ様聞に達し、行末迄も安慮の

基と深く満足ス、併シながら遠国・近国の

数十ヶ所の事なれば、若し直命の次第

未タ不行届方もあらは、畢^(了)競平生

法義の疎か中へと、甚以不安慮に思ふ、

仍^而自今は猶当派の安心の正意を

能相心得て、信決定の上には、仏祖広大

(330ウ)

(330オ)

の恩徳を相歆、報謝の称名無油断相

励様にと、しかれハ此上にも銘々帰国の

上には、人々^江不洩よふ委しく相伝へ、

弥々無懈怠、法義を相續致せよ、

同日光養^(宝如)君様、於集会所御直命御礼、

同日御簾^(宝台院御簾)中様、於南御殿ニ、御代御房様

御礼御挨拶、^并不殘御菓子頂戴仕候、

右之通、諸国御門末上京皆上納仕候故、

御借財御皆済之御見通し被為付候^而、

御三方様甚御満悦、御直命之御礼

被 下置、上京之輩なく難有恐悦之仕候、

〔墨付ナシ〕

御本山御堂僧御名前覚

宝光坊

実了庵

顕真坊

実円坊

(336ウ)

浄邦坊

順正坊

玉泉坊

梵門坊

正観寺

連城坊

史 坊

欣浄坊

性智坊

正円寺

快樂庵

泉竜寺

大泉坊

南林坊

西宗寺

常德寺

円重寺

法幡坊

敬円坊

真勝坊

泉徳寺

(337オ)

(336オ)

(331ウ~335ウ)

(338オ)

(337ウ)

大念寺
願照寺
仏現寺
正念寺
法輪坊
憶念寺
本行坊
法順坊
円徳寺
等覺坊
願成寺
法光寺
専称寺
東ノ坊
仙宗寺
仏願寺
最明寺
願成寺
顯正坊
唯乗坊
閑唱寺

『三河大谷派記録』(文政年間)

(339オ)

(338ウ)

即現寺
成就坊
徳応寺
専心坊
勝福寺
長堅寺
善久寺
徳善寺
皆演坊
浄林坊
願照寺了恵
因重寺賢亮
浄眞寺
長覺寺
即乗坊
専福寺
教日坊恵証
法泉寺
大行坊
西福寺
咸林寺

長徳寺

専称寺義梁

蠶門坊円墮

正円寺円実

〔墨付ナシ〕

一、諸国御坊所

浅草

難波

名古屋

三條

^{〔所〕}荒井
願正寺

高山
^{〔通〕}照達寺

高田

桑名
本統寺

長浜
大通寺

茨木

^{和州}大谷

^{東山}大谷

金沢

岩船
本徳寺

城端
善徳寺

福井

本瑞寺

姫路
本徳寺

八尾
大信寺

井波

瑞泉寺

天満

大津

堺

吉田

竹ヶ鼻

小態^{〔備〕}

赤野井

守口

宇和島

和歌山

有馬

甲府

^{〔光沢〕}寺

牧方^{〔ち〕}

吉崎

津島

成信寺

赤穂

五村

馬原

専念寺

山科

赤羽根

合三十九ヶ所

(341ウ)

一、文政四年^{〔マ〕}十二月、先達^而東国十五組御門末中へ、

被下置候 歛喜^{〔院〕}光様御真影様、御表具

御痛被為在候^ニ付、先例を以て、御本山御納戸

御役人中^江願出候処、御前^江被相窺候得ハ、無勿体も

善知識様 御拝礼被為在之、如斯くすれ候事、

三河の国御法義の御繁昌の故なりと御感賞

被為在之候^而、則御殿御役人^江被為^{命候而}、

御真影様御破様御繕ひ、御表具御仕立候^而、

被下置候事、

一、已来 御真影様御画染筆、何れにても

(341オ)

(340オ)

(340ウ)

(342オ)

御破様有之候節者、御成替御再興被成下候筈ニ、
集会所御役人中・御納戸役人中より
被仰渡候、向後無趣可心得置候事、

一、金千疋 御礼金上納

外ニ、

一、銀三拾匁分

御納戸方
集会所方
原山へ沓包

又十二光仏様御表具料

一、銀九拾四匁程

外ニ小入用とも、

都合金四両三分入用、

〔墨付ナシ〕

文政六未歳御焼失ノ記序

前段ニ記録セシ通、天明八年ノ御類焼

十三年ヲ経テ、御再建昔ニ替ラス、周備

御満足アラセラレ、文化八年辛未三月

(親書)
御開山聖人様五百五十回ノ御遠忌モ

『三河大谷派記録』(文政年間)

(376オ)

オコソカニ善尽シ、美尽シ御莊嚴ノ

美々敷事ハ云モサラナリ、御白砂ノ数多

ノ幡春風ニヒルカエリ、恐多クモ西方ノ

極楽浄土ノアリサマモ、カクヤアルント

アヤマタレ、堂内ニテ伽陀・読経ノ調声ハ

今現在説法の仏声ト尊マレ、音楽

微妙ニシテ、七宝ノ植木ヨリアハル、

自然清和ノ岐楽カト、ソ、ロニ難有、涙ハ

袖ヲ潤スハカリニシテ、十昼夜ノ大法会モ、

目出度事御満散アラセラレ、弥増御法流

御サカンニシテ、四海ノ御門葉、飽マテ甘露ノ

法雨ニ潤シタテマツリシカ、爰ニ一ツノ患発レリ、

其謂レハ右御再建ノ節ノ御用脚御借財

トナラセラレ、追々嵩ミ候テ、文化十三年

酉ノ十月ハ二十五万金ニ及ヒ、モハヤ防クヘキ

手段モナク、恐ナカラ 御前ノ被達

御聞ニケルニ、御上様ニモ大ニ御悲歎

アラセラレ、是予カユヘナリト御衣ノ袖ヲ

シホラセタマヒ、

ソレヨリ七ヶ年ノ中ニ皆済ナリ候ヤフニト、

諸国門末へ御頼アラセラレ、当日ヨリ

(376ウ)

(377オ)

御台所御門ノ御閉アソハサレタリ、誠ニ

勿体ナクモ御門末ノ不冥加ノ重リユヘ、カク

御大借トナラセラレシコトヲ、御身御一人ニ

御引受下サレ、予カ不徳ユヘト御意ナシ下サル、

カ、ル御中ヨリモ、唯御門徒ニ信心ヲ決定シテ

クレヨカシ、極楽マヒリヲ仕ソンスルナ、早ク安心ヲ

トリテ、其ウヘ報謝ノ実意ヨリ取持ヲ頼ムト

数度御直命下サレ候得共、七ヶ年ニ御済方

モ附カセラレス、又候三ヶ年ノ御延年御願ヒ、

漸ク文政五年ノ年限リニ御皆済コレアリテ、

此年報恩講ニ右丹誠ヲ抽シ、門徒ヘ末々迄

ノ御化導ノ為ニトテ、新タニ御書ヲ御製作

アリテ、冥加ノ御礼ヲ以テ一同ニ御免下サレ候

御本山御書コレナリ、同六年末ノ正月ニ

十箇年目ニテ始メテ、御台門御開キアリテ

日出度春ヲ御迎アリテ、同年三月十一日ニ

御発駕アリテ、越後国ヘ御化導ノタメニ

御下向アリテ、御済度畢テ五月四日ニ花洛ヘ

還御マシノテ、暫ク御尊慮ヲ安ンシサセ玉ヒ、

マスノ御化導サカンナリシニ、イカナル事ニヤ

アリケン、同十一月十五日ノ夜酉ノ剋花ノ間ノ

(378ウ)

辺ヨリ出火シテ、忽両堂ニ焼移リ、ワスカニ

二時程ノ間ニ、殿宇不殘灰燼トナリマシマス、

善知識^達如上人早速両堂ヘ欠付サセラレ、

御両尊ヲ始奉リ、数多ノ御宝物ヲ唐櫃

ニ納サセ玉ヒ、其外御公達様方枳穀^殿ノ御殿ヘ

御退去コレアリ、ソレヨリ大谷ノ御坊ヘ御移有ケル、

御上様今年御寿齡御四十四歳、誠ニ

御幼齡ニ先達而ノ御再建ヲ引継セ玉ヒ、

御一代ノ内ニ又候カ、ル御大変ニ掛ラセ

玉フ御事、恐レ入奉ル御事ナリ、如斯ノ

御中ヨリモ、翌十六日ノ晨朝ノ勤行モ

御滞ナク御修行アリ、其席ニテ御直ニ

御勸化ナシ下サレ候、誠ニ焼上リタル炎ノ中

ニテモ、唯我々ヲ御不便ニ思召下サセラル、

ヤルセナキ御恩ノ程、身ヲ粉ニシ骨ヲ

碎クトモ、報セスハアルヘカラス、

御直ノ御教化、

(379オ)

(379ウ)

まことに娑婆は有為転変の習ひ、天明年中

前住上人御尊慮ありて、諸国門末大義の

うへより、再建ありたる処の魏々たる大堂壮麗

(380オ)

たる殿宇、一夜の中に一点の煙りとなりはてた、
是に付て、三界無安、猶如火宅と説せられて、
片時も油断のならぬありさまちや、さりながら
本尊・御真影・宝物、無滞御供いたす事、
歎の中の喜びなり、扱聖人の勧め玉へる趣ハ、
雑行雑善をすて、一心一向に弥陀如来に
帰命し奉れハ、間違ひなく報土の往生

疑ひなし、尚当坊かありたれハこそ、今朝の
晨朝も滞なく相勤る、是全仏祖の御恩と

一同に相喜へ、それにつき教如上人より代々
相承する本廟、予か当職^(達郎)に至てかゝる災に

あふ、来春は前住聖人^上の御年回にあたる

うへハ、上ミ仏祖代々へ対し、又下モハ門末の

悲歎に對し、近退につき道を失ひ、前後

当惑に及ふ、尚又早々再建ありて、

御真影御遷座あらせらるゝやうにいたしてくれる

やう御一統に相頼む、前住上人、去ぬる火災の

折に、たとひ大千世界に、みてらん火をもすき

ゆきての和讃をもて命に及ハれ、今朝是

幸ひに正像末の三時にハ弥陀の本願弘れり、

誠に末世相應の要法弘通するに付てハ、一日も

(381オ)

(381ウ)

早く大堂を再建せねハならぬ、仏恩報謝は
爰にある事ちやによつて、無事のミおもふ、別
当職の身は流を汲む一天四海の門末へ、再建に
及ふ事をたのむ、尚一老^江御文を申付置候
ほとに、篤と聴聞して安穩にうつらせられ候、
御真影へ拝礼をいたして歸るやう、

御文三帖目

ソレ南无阿弥陀仏ト申ハ、

其二

御直命 御家中へ

誠に昨夜は両尊を始、無障御遷座あらせられ

忝存する、此度の大変^ニ付、銘々大義東七条の

本廟、暫く中絶に及ふ段悲嘆いたす、今朝より

此小院におゐて、是迄とハ引替へ、御崇敬

御龕末之段、恐れ入る事ちや、役所・詰所・頓所

大躰片付、格別出情^情の者、不出情^情之者見聞に

及ふ、平生之心得も相顕れた事ちや、未曾有の

事なれハ、何れも大義誠に有為転変の

ありさまなれハ、此度の大変に驚きて、一流

(382オ)

(382ウ)

安心のあやまりなきやうに相心得、法義相続のうへより二世の御恩を喜び、此上にハ尚更質素を相守り、弥々精勤を励むる、何よりの肝要、

御直命畢

楮焼残り候分、御台御門・十三窓御土蔵・

御作事部屋・太鼓の番屋、すべて御台所より

北之方皆残る、其外御宝蔵・森の内御茶屋一軒・

南御殿御門・同御台之側土蔵二ヶ所・御本堂手水屋形・

同南火除土蔵・御墓町御門、右の分相残り申候、

類焼ハ下間氏両家共表門は残り、跡ハ不残焼ル、

其外御役屋敷・町屋共一軒にても類焼なし、

楮又火事之中より取出し候分、唐戸不残両堂共、同障子

内陳通障子不残・御道具不残、御厨子扉屋根・

行馬

矢来畳不残、大門御本尊様立三鉢共出し奉る、

同扉不残、其外取出し候品数ふるに暇あらず、

撞鐘ハ焼落候得共、焼後仮之^{マヤ}櫓を拵へ候て

釣リ上、極月廿二日御成候節つき申候所、音声さして

相替り不申候、

(384オ)

一、当会所へは十一月十七日夕方、大友村喜右衛門と申者名古屋御坊^ニ而風評を承り候と早々欠付^御申候、折節二十八日講御使僧閑唱寺様、当会所

御書御拝読にて、明朝名古屋へ向御出立の積にて

御用意混雑之處、右之趣^ニ御座候へ共、何れよりの

出火にて候や、又風の様子、焼ケの次第も不分明故、

信用しかたし、疑ひあやふし申候得共、いつれ

形の無之事ハ風聞も無之者や、先急キ名古屋へ

御越不然候^ニ、夫方急^ニ供揃へいたし御出立

被成候、然ルに誰いふ共なく近辺へ相知れ候^ニ付、

御法中方・同行中為御見舞、当会所へ

相集り居申候所、欠村之同行江州信楽^江

所用ありて参り、其節京都へ出、十四日晨朝之

勤行にあひ出立仕候所、道中^ニ而之風聞、京都

御消失相違無之候と告来ルに付、弥得其実を

先諸組へ之廻文相認メ、飛脚の用意いたし候、

折節名古屋御坊御遷仏之節^ニ付、高橋組・

知立組・箕輪組は多分参詣仕候^ニ付、名古屋^ニ而

承り、夫より直様上京仕候者もあり、馳帰り所々へ

告知らせ候者もあり、大に騒動仕候事^ニ候、然ル処

夜八ツ時とも覺敷頃、名古屋御坊輪番所より

(383オ)

(383ウ)

(385ウ)

御飛脚兩人、当会所^(上宮寺・本達寺・勝安寺)・三ヶ寺・吉田御坊へしらせの爲、文通御持参到来仕候^ニ付、此御文通を讀上て、只忙然とあきれ果、歎息するより外なかりけり、去ルにても斯であるへき事ならねハ、先御門跡様御機嫌御寄として、中岡村治郎兵衛殿、外に同行壱人相添、兩人即刻打立、上京為致候、国内同行聞付^〳、会所へ群集して周章する事大方ならず、我も^〳と上京して道中引もきらず、折節久留米の城主交代^ニ付、宮宿の渡船、差支申候程之義に御座候、

当会所詰切役

文政六年未十一月十八日 東畑村

杉浦文左衛門

六十九歳

(386オ)

斯^而御大變の御中にも、御化導の本源たる御本廟の報恩講御執行なくんハ叶ふへからすとて、大谷において如例年、七昼夜御修行有之、但晨朝より日中・^通迨夜・批判ともに引續て相勤り、申の半刻頃迄^ニ相済、其跡にて毎日御直命被為在之候、報恩講無御滞御執行相済、二十八日集会所^ニにおいて、

『三河大谷派記録』(文政年間)

(386ウ)

口達書を以被 仰渡候趣、
一、今般御大變に付、不取敢各上京有之候段、不淺御満足被 思召候、夫^ニ付、御再建之儀は御真影様^并御累代^江被為對、且御門末之悲歎に被為對候^而、速に可被 仰出義御本意にさふらへとも、右に尽きては深き思召しも被為在之候得は、篤と御深考之上、可被 仰出との御事二候間、先夫迄は大木・大石等は勿論、其外奇進物等、荒涼ニ取沙汰無之様可被致候、此段帰国之上ハ、御門末へも篤と被為相達、御法義相続之実意^方、銘々家業^ニ不相障候様、一方々々相心かけ御取持可被申上候事、

(387オ)

極月十二日大谷において飛檐中へ前段、

御直命

(387ウ)

いつも早々上京奇特、誠に此度の火災は時節到来とは云ながら、言語に絶したる次第、悲歎限りなき事ちや、上ミハ仏祖代々^江對し、下モハ門末の悲歎に對し、進退道を失ふはかりの風情、前は先年類焼已後成就の後、間もなく如斯の次第、くれ^〳歎きおもふ事ちや、しかしながら真影を初メ、宝物こと^〳当坊へ守護し奉り、

別条なき事ハ何れも安心せよ、それにつけ

いよ／＼一流の法義相違なく相心得よ、なお
不遠再建の義沙汰のうへにハ、いつれも

相替らす出情取持する様、帰国の上一同ニ申伝へよ、

御直命畢、

一、枳穀の御屋敷に仮の両堂御普請被 仰出、

早速相掛り申候、御本堂ハ御寺内の土手町

長因寺を引移し西向に建ル、御影堂ハ河内の国

守り口の御坊御普請中故、幸ひニ此材木を引登せ

南向ニ建ル、五間半に奥行六間程のお堂なり、

枳穀の御屋敷、南の御門より参詣いたし、東へまがる也、

極月十六日夜子ノ刻 御還座有之、折節其夜

霄より雨強く降申候て、甚以御難洪なり、乍去

安井御門跡御門前にて雨やミ申候、

善知識様御履にて御供、其余御連枝様始、

三等御衆中・飛檐中・平僧より不殘徒士立にて

御供奉なし奉る、御本尊御輿興御堂衆八人、

御真影同断、御還座相済候て、浄信寺にて

粥飯を下さる、平僧ハ仏現寺にて下さる、諸講中へ

御菓子を下さる、御行烈付の記別紙に二連あり、

当会所にあり、東殿御還座相済、其席にて、

(388ウ)

(388オ)

(390オ)

(389ウ)

(389オ)

御直命

誠に今晩は無滞御還座ありて難有存する、

皆々同様であらふ、誠に先キの月の此頃より悲歎

やすくす、胸にせまり七条の本廟もしはらく

中絶に及ふ処、幸ひに先此屋敷に移し奉りしか、

其処ハ誠に難有存する、さりながら見掛る通り

狭少にして、誠に麓末の所へうつし奉る事

甚悲歎に及ふ、偕今夕皆々寒夜、別して

雨中にて大義に存する、尚今晚真影等へ

拝礼を申付る筈なれとも狭小、殊ニ混雜中故、

明晨朝より御戸を申付て置間、ゆるりと

拝礼を致せ、返々誠に今晩ハ大義に存する、

翌十七日御直命

誠に昨夜は両尊を始奉り、無障御還座

あらせられ、拝礼を致して難有存するてあらふ、

誠に此度の大変ハ、呉々言語に絶したる次第、深く

悲歎致す事ちや、予か心痛より門末の悲歎

心痛を押はかるに、いかばかりと存すれハ、尚更苦慮を

致候事ちや、去ながら此屋敷無難につきてハ、

昨夜の御還座も出来に及ふ事ハ忝ふ存する、

しかしながら引かへて、狭小麓末のところに安置する

事ハ、恐れ入なげき存する事ちや、夫ニ付ては

まのあたり有為転変のありさまなれハ、いよ／＼

当流の正意の趣を深く信じ奉りて、信決定の

うへより報謝の称名相喜ひ、尚更いよ／＼

法義を大切にいたせよ、

(390ウ)

一、御灰かきも霜月二十四日より始り、極月廿二日迄に片付し候様、被仰出候処、如命に相片申候、

一、焼跡へ御成被為有候日、霜月晦日・極月七日・

極月十五日・極月廿二日、以上年内四ヶ度なり、

霜月晦日御成之節、御影堂焼跡へ三州

廿八日講之幟を立、法中・同行平伏仕居候、御役人

三州廿八日講に候と言上有之候処に、無勿躰なくも

何れも大義と、御上意御座候、皆々感涙仕候、

一、古焼ケ金費同改メ覚

(391オ)

金銀 十九貫目余

銅 九千二百八拾八貫五百目

鉄 壹万七千八百六拾六貫五百目

鉄之分払代凡六千兩余

一、明れハ文政七甲申正月、東殿御仮住居に

して御所様方御機嫌克、御迎陽被為在、

『三河大谷派記録』(文政年間)

年始之御観式も如例に行ハせられ候て、

六日に御門末へ対し、

(391ウ)

御直命

いつも数日大義に存す、誠に場所の灰かきに

つけても存外早々相済、此上の事ニ存す、誠に

年の暮に及び、寒気もいとハズ何れも出情の

事、去ながら右躰の出情を致ス二も、実に

真影へ御直の御奉公を申上ると申ものなれハ、

いよ／＼難有存し、尚更二世の御恩を喜ひ、

かゝる御時節につけても、いよ／＼王法・仁義の

掟を相守り、其上にハ当流の法義をよく

相心得て、油断なく法義相続いたすか、

何よりの肝要ちや、

畢

(392オ)

一、前之御再建被為在之候時の通り、先御築地内に

仮之両堂御建被為在候ニ付、御本堂ハ新規ニ

御造営にて、三月二十五日御柱立、四月十五日御棟上

被為 仰出候、御影堂之儀は、尾州名古屋

再建まへの古御堂、十七間有之候を御献上

被申上候、此堂を繕ひひろめ、御用ひ被為遊候、

御場所ハ集会所焼跡へ両堂共南向に

(392ウ)

相建申候、但 大堂再建の後ハ、右の

御影堂集会所に御用ひ可有之やニ奉存候、

右御影堂一色ハ、尾州一ヶ国より仕揚申候て、

他の合力ハ請不申候、此節尾州の勢ひ冷敷候、

一、光養君様御得度之儀、兼々ハ三月七日と

被 仰出、引続 歛喜光院様三十三回忌御法会、

三月十五日より御執行之御触出し御座候処、此度之

御大変ニ付、御延引相成申候所、当九月廿三日

御得度可在之旨、正月十日頃被 仰出、一同

安堵仕候、依之仮之御殿向御普請被 仰出、

御黒書院は大坂表にて切組相登せ候御規定、

御白書院は尾州名古屋にて切組、四月上旬迄ニ

船積仕候御規定ニ而、尾州名古屋御坊ハ、

殊外之御混雑之御事ニ御座候、右ニ付、荷作り縄

莫大御入用ニ付、当国へ御頼ニ付、三月上旬 縄

百固 平坂湊新美八右衛門殿と申問屋へ

相頼、名古屋御坊所へ積送申候、

未十二月会合

一、京都御手伝人足法被・胸当共ニ入用

申来候、御組合村々女人講中ニ而つもぬき・

よりこ、多少によらず御取集被下、木綿にして

少々ツ、御懇志被下、近日当会所迄御出シ

可被下候、外ニ御手伝之三河印之幟りも、四・五本

入用と申来候、此段無御失念、近日ニ御頼入、

急成儀ニ御座候故、木綿会所方かり入

染申候、村々女房衆へ御披露御頼上候、

一、近日御本山焼跡片付け人足、五拾人斗

のほせ可申由申来候、荷ヒ物丈夫成御同行、

壹組ニ而四・五人宛も御相談之上、被遣可被下候、

此儀も御聞捨なく、今日御取極可被下候、

一、京都御手伝野菜之品、此節大根御望候間、

細切りにして千切ニ御用意可被下候、三河方

毎日五百人も御手伝ニ御座候、大根切ほし

急々御頼入候、

一、味噌も此間当会所より、大樽ハッ遣し候得とも、

中々行届キ不申候、此節大豆少々宛、御心当

御用意可被下候、此段御頼入候、

右之通、御組々村々御内々ニ而、来ル十日

御同行中一流、当御会所へ御参集被下、

御評儀可被下候、待入候、已上、

十一月十日

(393オ)

(393ウ)

(394オ)

(394ウ)

(395オ)

(395ウ)

十二月十八日、三等衆ヲ始御法中惣会合在之、
趣意 毎月廿三日集会定日之事、

一、御取持一条、其組内無故障、御助成可被成
事、

一、御取持ニ付、三人・五人之了簡ヲ以、国内之
法中・同行を押斗り、大造之儀ヲ御引受

申候事、決^而致問敷候事

(396オ)

一、御小屋詰、三人ツ、ニ割合可申事、

一、御取持ニ付、官職之高下を不論、打混て
可申上候事、

一、御得度一件、御一流御勘考之事

一、御取持ニ付、一己之功を立、末々 御本山方
御会积等、決^而請申間敷事、

一、今般御取持ニ付、御触状相守、蜜^密御用
意可被下候、

(396ウ)

右之条々、集会之上、一定仕候、以上、

十二月十八日

法中

文政七年甲申正月吉日

正月九日会合趣意、

『三河大谷派記録』(文政年間)

何れも今日御相談申上度事

一、御本山焼失ニ付、冬年方御示談之通、

御灰かきも相片付申候得は、国元方御手伝之御人ハ
御断申来候、人入用之節は、京都方案内可有之

候間、先々御見合可被下候、尤此上京都方御手伝
申来り候とも、何れも町宿^ニ而御手伝可被下候、御小屋
入之儀は、定詰人足之外御断申上候、

(397ウ)

一、十一月廿四日御灰かき、初メより当国方も四・五百人も

御上京被下、中々御小屋^ニ而ハ行届不申、大困り入候、
右ニ付、極月十日^ニ人改之所、段々下向^ニ而凡百廿人

余に相成、一日^ニ白米八斗五升九斗^并味噌^并薪^并

諸入用、一日^ニ金壹両貳分宛も入用^ニ候、十一月十八日^ニ
乍御見舞、同行三・四人御登り、御小屋賄^ニ金貳拾両

遣し申候所、十一月晦日迄之賄行届不申、朔方十日迄^ニ
金拾両相登申候得共、中々行届不申^ニ付、大晦日迄^ニ

(398オ)

金三拾両相登セ申候様、京都方申来候、尤京都

詰同行も、慥成仁物四・五人御頼置申候ハ、如在者
無之候得とも、大混雑之事故、致方無之、又候

金三拾両かり入候^而、極月廿三日早便^ニ為登申候、
都合金六拾両、京都賄方^ニ相成候事御座候、

此金子当月限^ニかり入申候得ハ、組々方は迄

一九九

(398ウ)

御出金之外、御世話方御割合被下、当廿日迄^ニ
 当会所へ御出金奉御頼上候、尤会所^ニ米・
 大豆とも^ニ五拾俵程も只今有之候へ共、是ハ十一月方
 今月迄毎日 御本山御上納、其外御見舞・
 御用向之御同行中、朝から晩迄御茶漬御飯
 たへ不申、御勘考可被下候、

(399オ)

一、極月廿五日出し書状^ニ申来候、まだ御手伝^{并ニ}
 当申年中、定詰^ニ被遣候組々共^ニ、凡五拾人程も
 御出之由^ニ御座候、定詰人足^ニ壱人^ニ付、一日^ニ白米
 壱升として、一ヶ月^ニ三斗なり、当年閏月故、
 十三ヶ月三石九斗入申候、平場白米壱両^ニ七・八斗替
 として、飯米代斗り^ニ壱人前金五両ツ、也、此間
 申来候ハ、申年定詰八人、或八十人ツ、も被遣候
 御組合も御座候由、拾人も被遣候御組合ハ、当月方
 毎月飯料金五両ツ、当会所迄御出金可被下候、
 是^ニ而ハ一ヶ月^ニ四升ツ、も過^ニ相成候へ共、是ハならし
 相場^ニ御座候、冬年方定詰被遣候組々ハ、此割ヲ
 以無間違、当正月方御出金可被下候、

(399ウ)

一、当会所^ニ御留守居仕候四・五人之同行、乍恐
 了簡申上候ハ、未タ仰出候も無御座御事^ニ候得者、
 集りざわぐと御手伝ハ見合申候^而、国内御一統

(400オ)

御相談之上、当国十五組之内大組ハ定詰五人、
 中組四人、小組三人、此割ヲ以御相談被下候ハ、都合
 取締之処、国内^ニ而四・五拾人之定詰、只今迄之
 通^ニ而壱人前給金三両^ニ而一組之内三拾村・五十村
 之内^ニ而、年頃廿四・五歳方三拾歳迄之、氣立
 宜敷若イ者御見出し、御抱被遣候ハ、給金・飯米も
 其組^ニ而行届可申哉^ニ候、唯今^ニ而十人・拾五人ツ、
 定詰候ハ、入用斗り多分^ニ而、此上十ヶ年・十五ヶ年
 御出来迄ハ、御手伝無覺束と奉存候、尤末々迄之
 思召御座候て被遣候ハ、随分難有奉存候、

(400ウ)

一、前文之通、定詰五人・十人冬年方被遣候御組合ハ、
 当月方飯米代割之通、無相違御出金可被下候、
 一、当御会所当年方ハ、一統之御相談^ニ可相成候へ共、
 来未ノ正月方極月迄之京定詰・暮戸炊
 給金、未タ御不参之組々も御座候間、是又御勘考
 被下候^而、御ふ参之御方ハ、旧冬京都人用不足・
 かり入割合共^ニ、当月廿日迄^ニ御出金之御相談、
 今日無相違御取究可被下候、
 右ヶ条之通、無御聞捨、今日御相談、御究
 被下度奉願上候、已上、

申 正月九日

(401オ)

正月十二日御元方衆中会合

今日御集会之儀、御願奉申上、

御苦勞之程、難有奉存候、

一、京都御大變之儀も、先以御灰かきも御片付

被遊候由、追々京都方申来候間、此段奉申上候、

就夫^而ハ御取持申上度儀者、数々之御事ニ候へ者、

御門主様御尊慮を御痛可被遊哉と奉恐察候、

附^而者、一紙半錢之志積り、山と成御心持^ニ而、

何卒国内一致に御心を寄せ、御取持被成下候

様御願申上度、宜敷御相談可被下候、

一、京都^江も乍御参詣、御元方衆中御月番

入替に成とも、御詰メ被下候様御願申上度、右

詰所家之儀も心組有之候得者、此段宜

御示談之可被下候、

一、御再建^ニ付^而者、先年も御材木之御世話、当国

以前之同行中^江被相勤、御再建第一之御用^ニ

相立、御前^江対し難有奉存候、其もふけ之

当御会所^ニ御座候、

一、可相成義^ニ候ハ、此度も御公儀様、御寄附被遊候

御村山御拝領材、御再建第一之御材木、御世話方

当国同行中^江御勤被成下候ハ、難有奉存候、

『三河大谷派記録』(文政年間)

(402ウ)

乍恐 御上方も先年之姿を以、当国へ御世話

被 仰付候趣^ニ、内々相聞へ申候、左候得ハ、金錢

之儀^ニも無御心置、何卒国内一般^ニ御取持

被下候ハ、難有御儀と奉存候、以上、

御上様御高慮、奉休事、無御座候哉、御勘考

之上、宜敷御相談可被下候様、奉願上候、

一、新門^{宝印}様御得度^ニ付^而者 御勅使様御入

被遊候、御殿・御座敷・御門無之候事、

一、御法事御執行^ニ者、唯今東殿之御仮堂^ニ而者

御勤り被遊かたく候事、

正月十二日

正月 御法中様方御会合有之候事、

正月廿三日御評議之事、

一、御仮堂・御仮御殿、御手普請被遊候^ニ付、

国内組々法中・同行右御普請為覚、

無用金錢取集メ上納可仕事、

一、二月^江御法中御両人宛、御上京月番^ニ

御出勤可被成一定之事、

一、御法中京都御詰所元方中と打^{漢字}洪シ、

御相談被成度思召之事、

一、二月四日国内同行中集会之儀、御本山様

御殿向不殘、御台所迄、御公儀^江御延引^ニ付、
右峯数七ヶ所、御手普請^ニ相成申候^ニ付、
大工壺組^ニ而^而壺人宛、御寄進之引請相談
相極申候、則飯米作料共^ニ、その組方仕立可
申との御事^ニ相成り申候、

二月十六日示談

此日ハ、^(奉如)歛喜光院様御祥月御法事^ニ付、
例年之通、御使僧本乗坊様御入御執行故、
同行数多参詣有之候^江、京都詰所より
早状到来、披見^ニ及び候^江、御普請^ニ付、御材木
京都中御買上げ^ニ而^而も調不申、大坂迄も御吟味
被為在之候御事故、良材不足してハ御はかとり
無之^ニ付、惣会所^ニ而^而相談之上、当国より挽木
材木伐立、早々元船壺艘も為登申候様^ニ申来候、
右^ニ付、小川組・山内組の衆中も相見得申候^ニ付、早速
相談及申候所、所詮集メ材木^ニ而^而ハ、急之間に
合不申候^ニ付、能山を見立、買取申候^而、早々伐立
可申候由、示談いたし、右之衆中ハ、急キ山内^江
被帰申候、跡^ニ而^而、諸組へ文通を以告しらせ、来ル
十九日十五組集会仕、評義^ニ可及候と其趣、
組々^江掛合^ニ及申候、

(405オ)

二月十九日示談趣意書之写

一、今般御本山御飯御殿・御門、其外御棟数も
夥敷御普請^ニ御座候、尤御飯とハ乍奉申、見事
なる様の木御撰ミ之御材木故、京都中御買上
被遊候^而、調兼申候間、大坂表迄も御吟味有之候^ニ付、
京惣会所^ニ而^而御示談有之、当国方も檜木五寸・六寸
^并大角たけ壺丈方壺丈五・六尺迄之所、元船に
壺艘も積登申候様、京惣会所より申参り候^ニ付、
山内^ニ而^而買付、根伐り^ニ相掛り可申と取急キ申候所、
又候一昨十七日京詰所方早飛脚到来仕候^而、

(405ウ)

九月上旬迄^ニ皆御成就無之候^而者、御得度御差支
相成候事^ニ候得者、唯今根伐り仕候材木、京着仕
候迄ハ、海上之事^ニ候得者、余程日限可相掛や
難斗候、若延着仕候^而者間^ニ合不申候間、可相成たけ
京坂之内^ニ而^而御都合可被成候間、先買入山ハ見合
可申旨申来り候、尤御献木被成候思召之御方ハ、
思召次第^ニ御座候、殊^ニ白書院は尾州^ニ而^而切組
為相登、御黒書院は大坂^ニ而^而切組被為登候趣^ニ、
御示談相究候、夫ゆへ大工も右^ニ準じ見合す、
又々評議次第可申遣候間、夫迄ハ万時着留
候様申来り候、左様^ニ御承知可被下候、乍併日数

(406オ)

(406ウ)

わすか之中に、御太造成ル御普請御座候得ハ、何時
如何様之御用、被仰付候も難斗候間、油断ハ相成
不申、兼^而其御心組被成置可被下候、夫^ニ付^而も第一之
肝要ハ、丸印^ニ御座候得ハ、常々此所御含置可被下候
様^ニ奉希候、併何事も荒涼^ニ取沙汰仕間
敷候旨、再三被仰出候間、随分物しつかに御取持
專一之御事^ニ候、

(407オ)

一、此度惣会所御開起^ニ付、御取持御門末中、心得
之趣七ヶ条を以被仰出候、法海嗣講演説被下候由候、
御趣意ハ御取持^ニ片より、法義安心をワキ^ニ致シ、
或ハ御法義相続^ニ片より、御取持之作業をワキ^ニ
致候^而者、ともに御正意^ニハ相叶ひ不申候間、御法義
相続と御取持とハ、一躰と相心得可申旨、被仰出候、
此義ハ兼々御直命之度毎に被仰出候間、此
御尊慮^ニ相背かぬ様^ニ仕度奉存候、御法義相続と
御取持とハ、車の両輪之ことく可相心得との御事、
専要之御事奉存候、以上、

右之通り数多認め、来集ノ人々^江相渡申候、

浄恵
浄泰
筆者

武右衛門

『三河大谷派記録』(文政年間)

(407ウ)

一、当定詰所隣家^ニかひ之儀も、先年之
通り越後国より預^ニ付、相渡申候、甚困り
入候、右^ニ付御法中様何卒御宿替被成下
候様^ニ、御集会之節御嘶シ可被下候、且今^ニ
五人様御出御逗留ゆへ、皆々心遣ひ^ニ御ざ候間、
何卒申分無御座内^ニ、能々御相談被下、売家
もあり、又かり家も有之、思召次第御相談、

(408オ)

御取持可申上候、此節御楽^ニ御心安キ御方様
斗^ニ而、遠慮も不仕相暮シ居候得共、諸事^ニ
心遣イ候間、此儀者無御捨置、御集会^ニ御相談
被成下、御極置可被下候、御飯米・味噌之義ハ、
御都合次第御相談可申上候、以上、

申二月十七日 京三州詰所同行中

二月廿三日御法中様方御集會^ニ付、口上
書ヲ以願上候、書付左^ニ相認め置候、

乍恐奉御願上口上之事

今般御本山御焼失^ニ付、国内御三等様

始メ、御法中様御一統、毎月廿三日御本山

御取持^ニ付、当御会所^江御集会被成下、国内

組々同行一流、難有奉恐悦、右^ニ付、当

会所之小寄講、毎月三日と八日^ニ御座候処、

(409オ)

何卒此八日之小寄、廿三日^ニ仕、当国十五組之

同行当日^ニ、御集会之御法中様之内^ニ、^而

御法座御出勤御願申上度候、左候得者、

御法義御相続、同行一同難有奉存候、

何卒、来ル三月廿三日方当極月廿三日迄、

十一ヶ月御相談之上、御極メ被成下、御招請之

御寺号御記置被成下候様奉願上候、以上、

申二月廿三日 当御会

惣代同行中

惣御法中様

右之願御聞濟被成下、難有奉存候、

組々御同行様御願上候口上之事

一、今般京都 御本山御焼失^ニ付、諸国共京都^江

定詰・御手伝申上候処、御年限長キ御事^ニ候へ者、

御白砂惣会所よりも、当国女人中へ蚊帳

壹張御頼之事^ニ候、当国詰所^ニ、^而も

御三等様始、御法中様・同行一流、蚊屋^屋・蒲団

出来候様御願申上度候、去ル十一月廿日頃より極月迄、

かく蒲団致候所、損料拾八貫文相払申候、

若急^ニ御再建も始り候得者、十ヶ年余も

相掛り候内、夜具無之候^而者、御互^ニ御手伝に

(410オ)

御上京被下候^而も、甚困入申候、此段御勘考

被下候^而、何卒新蒲団者不及申、古ふとん

^ニも宜敷御座候間、成ル丈、御出情^情御取持

被下候様奉願上候、此旨男女御同行様方、

御汲わけ被下度奉希候、以上、

申三月 御会所

組々御同行中様

女人講中様

国中同行集会

申三月廿八日評定趣意

(410ウ)

一、当会所詰役之義、十五組之内^ニ、^而一ヶ月交

代^ニ御勤メ被下候様、年々張札を以御頼申上候へ共、

是迄御出勤も無御座、等閑^ニ打過候事^ニ候処、今般

御本山御焼失^ニ付、旧冬より御上納金、猶又

京都・暮戸両会所諸入用金も相重り候事^ニ候、

尤金子出入者、毎月帳面相改取計ひ申候得共、

諸用向繁多^ニ御座候^ニ付、愚子老年申、其上不遠

御再建も被 仰出候ハ、年数も永々相掛り

申義^ニ御座候間、此段御勘考被成下、来ル四月方

鬩取^ニ被成候^而、組々方御出金被下、一ヶ月宛ハ賄

可被下候奉願上候、尤不案内之儀者、是迄御留主

(411オ)

(411ウ)

居仕候者共々、御案内申上候^而御差支^ニ不相成様
可仕候、左候得者、毎月晦日^ニ者金銀出入、御上納
候毎^ニ相分り申候、左も無之候^而者、永々の御再建
中行届キ申間敷と奉存候、先四月より相始組々
にて、一ヶ月宛御賄可被下候、此義今日第一番に
御評義被成下、御取究被下候様願上候、以上、
右之通申出候処、何れも尤之筋と相聞濟
有之、則月番左^ニ相定申候、
申ノ年月番

四月	上野組	閏八月	高橋組
	山内組		高落組
五月	高力組	九月	乙川組
	知立組		吉良組
			東城組
六月	箕輪組	十月	上野組
	小川組		山内組
七月	岡崎組	霜月	高力組
	宝内組		知立組
八月	矢作組	極月	箕輪組
	豊川組		小川組

(412オ)

酉ノ年月番

正月	岡崎組	六月	高力組
	宝内組		知立組
二月	矢作組	七月	箕輪組
	豊川組		小川組
三月	高橋組	八月	岡崎組
	高落組		宝内組
四月	乙川組	九月	矢作組
	吉良組		豊川組
	東城組		
五月	上野組	十月	高橋組
	山内組		高落組
十一月	乙川組	十二月	上野組
	吉良組		山内組
	東城組		

(412ウ)

右之通相定申候、以上、

四月廿三日御法中三拾式ヶ寺着帳、
京都御詰所借家之御示談御座候、
御勸化、八万之法蔵之御文御讃台^(マ)_ニ、
あしのが安楽寺様御教化一席也、
^而

申四月京都惣会所諸国同行中

七箇条之御請書写し

御請奉申上候口上覚

一、旧冬御大變ニ付、諸国御門末一同打驚、

追々罷登リ御取持申上候ニ付、当惣会所

被為遊御構、私共^江心得誤無之様、

御書立^并御条目を以、今般御焼失^ニ

付^而も、弥増^ニ御法儀相統肝要^ニ被為 思召

候との御趣意、御講者様方^江具^ニ御演説

被為 仰付候段、一同拝聴仕難有奉敬承候、

夫^ニ付私共、是迄相心得罷有候者、此度之

大變^ニ付御取持申上候ハ、只世間名聞之

心中^ニ誠^ニ一大事の後生を忘れ、

我慢勝他之心得^ニ相成罷有候処、我往生の

善知識様、深ク被為有 御尊慮、日々

深重の御教示被為 仰付候段、一同

徹心根御慈悲之至、難有奉敬承候、

依之自今已後、日頃之心中を翻し、

弥後生之一大事を心^ニかけ、信決定之

上より報謝之称名相励^ミ、尚又帰国の

上^ニハ、同行相互^ニ及示談、御法義相統之

(414オ)

上より、王法、仁儀^義之道理を相守り、家事・

農業^ニ不相障様、一期を限り相嗜み、報

恩之実意より御取持可申上候、右之通

心底相改、今般被為 仰出候 御書^并

御条目之御趣意、急度相守り、毛頭違反

仕間敷候、依て御請狀如件、

文政七年申四月日

諸国詰所同行連名

七ヶ条御請書、先へ書留前後仕候、則七ヶ条

御趣意相印置申候、

御書立七ヶ条之写

(414ウ)

今般御焼失^ニ付、御門末中遠近ヲ論

せず、早速上京有之、御機嫌ヲ被相伺、尚又

御守護旁各々越年在京有之、日々相会所^也へ

被相詰、御番筋談合有之由、御聴^ニたつし、

奇特之至り不浅、御満足^ニ思召候、就夫別紙

ヶ条之通り、御法義御引立ハ勿論、以来御取持

方万事^ニ付、御門末心得之趣、講者へ演説

被 仰付候間、一同打潤ひ御法義御相統之

実意々、御取持被申上候事、下問^{宮内卿}

申正月

下問治部卿^{（頭條）}

(415オ)

栗津因幡介
川那部帶刀(四)(宗連)

一、今般御焼失ニ付ても、弥増ニ法義御相続
肝要ニ思召候、依之僧俗一同ニ御取持、
在京中ハ別無油断、御法義筋相互ニ
談合可有之事、

一、御代々御本廟御相続之御本意ハ、一昨
年以御書、御門末一同江御教化被成
被下候得者、右之御趣意忘却有之間敷事、

(415ウ)

一、御本山御取持之儀者、万事ニ付御法義
相続之上之御取持ニ候得者、御法義相続と
御取持と一躰之儀ハ勿論ニ候得共、尚又
心得違ひ無之様可相睹事、

一、御焼失ニ付ても御化導暫も御滞り

無之御事ニ候段、全ク治世の国恩ニ候得者、
尚又王法・国法を可重事、

一、御末寺之面々ハ、兼々被仰出候通り、不律・

不如法之振舞無之様、相慥ミ可申義ハ

勿論、御取持ニ付而、官職之高卑を不論、
学解之勝省ニ不拘、惣会所ニおゐて心底
之程、無腹蔵及示談、且又帰国之上は、

『三河大谷派記録』(文政年間)

(416オ)

前段之御趣意、御門末一同江行届き様、
無油断可相伝事、

一、御門末之面々御取持ニ付、我慢勝他
之心ヲ以テ身分之高下を論し、一己之僻
案を相募り申間敷事、尚又念仏の
行者ニ不似合之振舞於有之ハ、見聞次第
無遠慮、示合急度相改可申事、

一、於当席無益之雑談、高声の戯論、是を
禁ス、尚聊之事たり共、不取留事荒涼ニ
申間敷事、

(416ウ)

右之条々堅ク違犯有之門鋪者也、

申正月

右者、文政七年申正月十五日、京都御場所
之内、惣会所江被仰出候也、

是又当に写置候処、失念仕候故、差置可申と
奉存候へ共、先此忝く印置申候左之通り、

御普請只今御建被遊候軒敷之覚

一、御本堂 拾壹間四面、今御瓦ふき、壁塗、

一、御影堂 式拾間四面、名古屋古御九間、
(堂脱力)

御ヒロケ、今垂木打取掛り、

一、大寝殿 十三間ニ拾四間、今垂木打土イふき、

(417オ)

二〇七

一、御白書院 九間ニ拾壹間、名古屋ニ御切組、追々

着船、今足代小屋組出来、

一、御黒書院 九間ニ拾壹間、大坂ニ御切組、御足代小屋

高ふき、石場石、大坂ニ御切組、追々御庭着、

一、南御殿 拾八間ニ拾五間、名古屋ニ御切組、足代小屋

根出来、追々着船、

一、同曲尺ノ手御殿 拾間ニ拾八間、右同断、

一、御台所 拾六間ニ拾三間斗、今垂木打、土井ふき、

一、女中御部屋 只今右梁、名古屋ニ御切組、追々大坂へ着船、

一、御玄関 今石築相済、足代出来、今小屋組、

一、御集所^(公脱力) 今垂木打土居ふき、十六軒斗ニ見へ申候、

一、外廻り 御築地、南方より高塀御取掛り、

一、所化寮 長式拾間横三間、梁二ヶ所、下間様

御屋敷ニ御建被成候、

一、御土蔵 御台東^(所脱力)ニ御建、御小屋出来、

惣会所八間ニ拾式間、

寄講会所五間ニ七間、

やけ金よりわけ長屋式拾間之船

右之内幅四尺ニ長式拾間之船

やりわけ船式艘ニ而より訳申候、

一月ニかね百五拾目出ル日も有、百貫目出る日も有、

(418ウ)

五拾貫目出る日も有、炭ハ日々五拾俵ツ、出来、吹沢鍛冶相立、日々ふきわけ申候、右炭かけ金之山ゆりわけ、十一月迄も相掛り可申との御事、右之外、御作事役所・御白砂中役所、一々の御作事小屋・御すき切之小屋、其外新御屏風、

百双 三十双ハ金屏、今御張立被成候事ニ御座候、七十双ハ并屏、

七月五日夜西ノ刻、仮の両堂^江

御遷座相済、引続飯ノ

大寢殿ニライテ御礼有之、下間氏

口上、

諸国門末御遷座無滞被為相済、

一同難有奉存まする、

御直命

今晚遷座も無滞相済置、忝存する、

先々安慮致す、誠ニ両堂すみやかに

成就候事、全以門末之一同の出情^(情)

のゆへと満足する事ちや、附^而ハ弥々

無油断御法義相続致シ、尚又心得違

なく、此上神妙ニ出来いたすやう、

(419オ)

(418オ)

(417ウ)

畢

右御礼相済、諸所^江歸り候節ハ、
七ツ時ニ相成申候、

〔墨付ナシ〕

(419ウ・420オ)

上納所国分

(420ウ)

一、金七百五拾兩壹歩

山城

四匁四分六厘

一、金五拾四兩貳分一朱

大和

七分貳厘

一、金百五拾八兩貳分

河内

三匁三分壹厘

一、金百六拾三兩二分三朱

和泉

貳匁壹分五厘

一、金千六百六兩三分貳朱

摂津

四匁六分九厘

一、金壹兩貳分壹朱

伊賀

三匁五分五厘

一、金四百八拾貳分三朱^{〔兩貳力〕}

伊勢

壹匁壹分六厘

(421ウ)

一、金千六百貳拾貳兩壹分二朱 尾張
壹匁貳分三厘

一、金千八百壹拾兩貳分壹朱 三河

貳匁三分一厘

一、金九兩壹分三朱

遠江

四匁九分

一、金三分一朱

駿河

一、金貳分貳朱

甲斐

壹匁一分五厘

一、金貳千三百六拾四兩壹分二朱 武蔵

三匁四厘

一、金九百九拾壹分貳朱^{〔兩貳力〕}

近江

四匁壹分三厘

一、金千八百貳拾三兩貳分 美濃

四匁壹分三厘

一、金百三拾八兩三分三朱 飛騨

六匁三分九厘

一、金貳拾兩三分貳朱 信濃

五匁四分五厘

一、金貳兩三分卜 下野

九分七厘

一、金百四拾四兩壹分 陸奥

四匁一厘

一、金四拾九兩壹分一朱 出羽

三匁五厘

一、金貳分貳朱 但馬

九分

一、金貳兩貳步三朱 因幡

四匁八分貳厘

一、金拾貳兩 伯耆

一、金拾兩貳朱ト 出雲

三匁四分一厘

一、金壹歩 石見

一、金貳百七拾七兩三分 播摩^舊

四匁八分

一、金貳朱 備前

一、金壹朱 美作

九分

一、金四兩壹分ト 備後

五匁一厘

一、金拾壹兩貳分貳朱 安芸

三匁貳厘

一、金四兩三分ト 紀伊

四匁四分

一、金壹兩貳分三朱 阿波

三匁貳分六厘

一、金七拾貳兩貳分貳朱 讃岐

四匁四分

一、金三分三朱 筑前

一、金百四拾九兩貳朱 筑後

壹匁九分三厘

一、金貳拾六兩貳朱 豊前

三匁七分壹厘

一、金三拾貳兩 豊後

貳匁六分

一、金四拾九兩壹分一朱 肥前

五匁四分四厘

一、金七拾九兩ト 肥後

壹匁七分一厘

〔墨付ナシ〕

御再建国分

一、金貳百四拾九兩壹分貳朱 山城

壹匁七分壹厘

一、金拾八兩 大和

壹匁八厘

一、金百貳拾三兩三分貳朱 河内

三匁四分七厘

一、金貳拾五兩壹分 和泉

貳匁九分一厘

一、金百五拾三兩壹分貳朱 摂津

七分三厘

一、金四百貳拾貳兩三朱 大坂

壹匁九分九厘

一、金壹分 伊賀

一、金貳百六兩三朱 伊勢

六分

一、金五百六拾五兩貳分貳朱 尾張

五分三厘

一、金六百兩壹分貳朱 三河

壹分貳厘

一、金貳兩貳分卜 遠江

三匁五分五厘

一、金貳分 駿河

一、金貳兩壹分貳朱 甲斐

一、金壹分 武蔵

一、金七百拾九兩三分貳朱 江戸

九分八厘

一、金貳兩也 下総

一、金貳分 常陸

一、金三百四拾四兩貳朱 近江

三匁六分五厘

一、金六百三拾貳兩壹朱 美濃

三匁壹分七厘

一、金貳百拾九兩貳分壹朱 飛驒

三匁七分四厘

一、金拾八兩壹分貳朱 信濃

壹匁四分一厘

一、金七拾五兩壹分三朱 陸奥

四分四厘

一、金六拾貳兩壹分 出羽

二匁四分九厘

一、金三分壹朱 若狹

貳匁六分

(427オ)

(427ウ)

(428オ)

(428ウ)

(429オ)

一、金百六兩三分卜 越前

三匁壹分四厘

一、金三百拾三兩壹分

賀賀^(四)

三匁四分三厘

一、金貳百貳兩三朱

能登

五分八厘

一、金貳百五兩三分貳朱

越中

三匁一分三厘

一、金三百六兩壹朱

越後

壹匁一分八厘

(429ウ)

一、金六兩貳分貳朱

佐渡

一、金九兩貳朱

丹波

一、金壹分壹朱

但馬

壹匁四分

一、金三兩貳朱

因幡

一、金貳兩卜

出雲

九分

(430オ)

一、金百六拾八兩三朱

播磨

三分七厘

一、金貳兩三分三朱

備前

一、金五兩壹分

安芸

四分五厘

一、金貳兩三朱

紀伊

貳匁貳分貳厘

一、金壹分壹朱

阿波

貳匁貳分二厘

(430ウ)

一、金三拾四兩貳分

讃岐

三分四厘

一、金三分壹朱

伊予

壹匁九分九厘

一、金七兩貳分

筑前

一、金百三拾九兩壹朱

筑後

三分三厘

一、金五拾五兩

豊前

一、金拾壹兩三分

豊後

壹匁四分

一、金三兩壹朱

肥前

壹匁八分

一、金八兩貳分貳朱

肥後

貳分八厘

一、金六千百三拾九兩貳分一朱、

五拾八匁九分七厘

(431ウ)

御用場国分

一、金九拾九両三歩

山城

一、金六両壹分式朱

大和

一、金拾六両三分壹朱

河内

一、金拾三両式分式朱

和泉

一、金百五拾三両

摂津

一、金九拾五両

伊勢

一、金貳百七拾九両三分壹朱

尾張

一、金三百七拾四両貳歩式朱

三河

一、金六両也

遠江

一、金壹両三分式朱

駿河

一、金貳歩

甲斐

一、金貳百八拾八両三分

武蔵

一、金壹分式朱

下総

一、金百六拾四両三分一朱

近江

一、金貳百六拾三分式朱

美濃

一、金三拾八両壹分式朱

飛騨

(433オ～438ウ)

〔墨付ナシ〕

(439オ)

一、文政年度本山ノ御再建ニ、諸国ノ

『三河大谷派記録』(文政・安政・文久年間)

(439ウ)

門葉打揃ヒ報謝ノ懇志ヲ運ビ、
両堂・大門ヲ始メ、大寢殿・白書院・
黒書院等悉ク落成相成ル、

一、安政二年六月四日、万年寺通りヨリ出火シ、

折柄ノ風ニ煽ラレテ、御影堂ニ重屋根ニ

燃ヘ移リ、両堂ヲ始メ一山ノ堂宇建物ハ

再ヒ焼失ノ悲運ニ遭ハセラル、実ニ

有為転変ノ語ニ洩レス、昼夜六時

法雨ノ潤ヒシ七宝ノ法林モ、忽チ無

間ノ火災ニ化シ、僅カニ御真影、其

他什法宝物ノ御避難アリシノミ、

一、宗祖聖人六百年御遠忌ノ年時モ、

瞬間ニ差迫ラセタル折柄ナレハ、両堂御

再建、続キテ大門・白書院・黒書院等、

御造営ニ御着手遊バサレ、安政五年、当

国吉田御坊、今ノ豊橋別院本堂ヲ、

西参鶴ヶ崎、山本篠松氏所有ノ地ヲ

借受ケ船積トナシ、大坂港ヲ経テ京都

ニ運搬シ、遂ニ一間四面ノ阿弥陀堂ヲ

建立シ、爰ニ全ク諸宇完備ス、其取

毀チタル吉田御坊跡ハ、味崎願正寺ノ

(440ウ)

(440オ)

(441オ)

庫裡ヲ求メテ、本堂ニ修補シ五尊ヲ
安ズ、当時ノ世話方ハ、土井太田林左エ門・
太田磯右エ門・日名佐野万右エ門・大門石
川義兵衛・高取神谷伝七・杉原為助・
野村安右エ門・後藤太助等ノ諸氏ニシテ、
日夜寢食ヲ忘レテ尽力一方ナラス、拔群ノ
功勞者ナリ、

(441ウ)

一、文久三年三月十八日ヨリ二十八日マテ、十昼夜
宗祖聖人六百年ノ御遠忌御修行、
御当代ノ善知識ハ嚴如上人ニシテ、前
門跡達如上人・新門跡現如上人毎座
御出仕、諸国ノ善男信女ハ、遠近ヲ問ハス
老少ヲ云ハス四来雲集、報謝ノ誠ヲ尽
シ歎喜ノ涙ヲ流シテ、難値ノ勝縁ニ遇ヒ奉ル、

(442オ)

一、元治元年伏見騒動起リ、焚火ノタメニ本
山ノ堂宇ハ、第三回ノ御焼失、御老体ノ達
如上人ハ山科へ、嚴如上人ハ大谷へ、現如上人ハ
岡崎ノ別院等、夫々移御遊ハサル、去ハアレト、
御崇敬ハ片時モ忽ガレニスヘカラサレハ、焦土尚
サメザルニ、五間四面ノ阿弥陀堂、九間四面ノ御
影堂ヲ繩シバリニテ、御仮堂御造営、僅

(444オ)

カニ五尊ハ雨露ヲ凌カセラルニ止メ給フ、
一、慶応元年十一月四日、達如上人御遷化、
御年八十六歳、枳穀邸ヨリ御出棺、七条ノ
畑地ニ於御葬儀御執行、上人ノ御一代
数多ノ御難ノ蒙ラセラル、只々恐レ入ルヘキ事ノ
極ミニコソ、
一、明治四年三月六日夜、赤松本楽寺安藤見
慶師ハ、小川蓮泉寺石川台嶺師ノ門ヲ叩キ、
大浜藩中ニ起ル廃仏毀釈・寺院ノ廃合事件ニ
付議事ヲ擬シ、教徒ノ一大事、国内ニ於ケル
大法難捨置クベキ時ニアラスト、七日三河国内ノ
各寺ニ急告シ、八日当暮戸会所ニ大
集会ヲ開キ、議歩愈々進ミ、酒一樽ト生豆
腐一百挺ヲ野村安右エ門ニ命シテ、意氣欲
ニ昇リ、忽チ三十余名ノ血誓連判ノ有志ヲ
得ルニ至ル、而ルニ力石如意寺老ハ、有志者ニ
對シ大音声ヲ以テ、青年若輩ノ血氣ニハヤリ、
輕拳ノ所為アルヘカラサル旨ヲ述ヘ、之ヲ制止
センモノト注意ヲ促カサレシモ、一端騰リシ氣焰ハ
失セス、先ツ五尊ニ灯火ヲ点シ香ヲ焚キ、台
嶺師ノ調声ニテ正信偈三首引ニテ、如来大悲

(443ウ)

(443オ)

(444ウ)

ノ恩徳等ノ一首ヲ結讃トシテ、キトモ殊勝ナル御暇勤行ヲ修シ、懇ニ拝礼シテ座ヲ去リ、其夜三時頃一同ハ発足ナシヌ、途中ノ処々ニ待チ受ケシ俗人ハ加ハリ幾百名トナリ、翌日午後二時頃、鷲塚蓮成寺ニ着シ、折柄出張

(445オ)

中ナル菊間藩ノ正参次^④三人ハ、片山宅ニ在リシヲ以テ、問答数刻、勇ヲ鼓シタル農民ノ連中、予テ用意ノ竹槍ヲ以テ、彼ノ一人ヲ刺殺ス、事ハ益々重大ニ及ヒ、遂ニ台嶺師始メ連累ノ僧俗捕ハレ刑ニ処セラレ、台嶺師ハ十二月二十五日斬首、力士城ヶ崎ハ絞首、星川其他何レモ十年・三年・二年ノ懲役ヲ申渡サル、一、明治五年十二月三日ヲ以テ、陽曆明治六年一月一日ト改正發布サル、

(445ウ)

一、明治六・七年頃三河国内ノ門徒ヨリ、本山ヘ十三窓土蔵ヲ寄附ス、九久平ニテ仮立ノ日ハ、投餅・呈酒、取持同行雲ノ如ク集リ来リテ、殊ノ外ナル雑踏ヲ極メ、宗教ノ面目ヲ博シ、国内ノ一致ヲ誇リヌ、梅ヶ坪伊右エ門・下市場安兵衛・鈴木永六・中島善六・鈴木友蔵・中島観光ナド時ノ世話方ナリ、而シテ鶴ヶ

(446オ)

『三河大谷派記録』(文久・元治・慶応・明治年間)

(446ウ)

崎ヨリ船便トナシ、京都ニ運送シ建築セリ、当地方ニテモ、岡本重兵衛・縦山市右衛門・岡本広吉・岡本文助・杉原為助・後藤太市・野村安右衛門・永田藤四郎・鈴木孫蔵等ノ諸氏ハ尽力ハ方ナラス、餅ヲ投ケ酒ヲ配シテ人氣大ニ振フ、

(447オ)

一、明治九年、本山ヘ手水鉢ヲ寄附ス、即チ小呂山ヨリ発掘シ、岡崎覚恩寺境内ニ於テ、石工之ヲ成就シ、車ニテ菅生川ニ送り、河船二艘ニテ、途中米津同行ノ希望ニ依リ、観覧ヲ許シ、亀崎ヨリ親船ニ積替ヘ京都本山ニ送ル、一、明治九年、地租百分ノ三事件ニ就テ、三重県下ノ農民大暴動ヲナス、

(447ウ)

一、明治九年十一月二十八日ヲ以テ、宗祖聖人ヘ見真大師ノ諡号ヲ賜ハル、
一、明治十年十一月ニ、西南ノ役アリ、
一、明治十年頃、名古屋守綱寺所蔵ノ一切経ヲ、代金四百円ニテ当场ヘ譲リ受ケ、経蔵ヲ建立シ之ニ納ム、第十二組池田ノ中島観光・永田藤四郎・野村安右衛門・杉原為助・後藤太市・越前朝倉堅道・加

小川宗恵・前島恵観・滝川賢城・土屋観順・
藤正道・徳願寺・鈴置善平等共ニ、

周旋ノ劳多カリシ人々ナリ、

一、同年頃、當場ニ示談所ヲ建築セリ、

世話方野村安右エ門・永田藤四郎・鈴木永六・後藤太市・藤井藤吉・杉原為助・

神谷龍助等数名、

一、明治十二年、本山両堂御再建御発示、

一、明治十二年四月、起工式御挙行、

一、明治十二年三月、見真ニ大字ノ勅額^並、

蓮如上人へ慧燈大師ノ諡号ヲ賜ハル、

一、明治十二年八月、双幅御影當場へ御

下附、願主杉原為助・太田林右エ門ナリ、

一、明治十三年七月、集会ヲ開キ、當場ノ

内陣・余間改築ノ件ヲ議シ、即チ国内

御門徒一戸ニ対シ、玄米ニ合宛ノ懇志

ヲ得ル事ニ決シ、直チニ着手シ、宮殿・須弥

檀・厨子ヲ始メ堂内ヲ一新シテ、御下附ノ

木仏本尊・諡号御影、御入仏御奉安

申上ク、当時重ナル世話方ヲ列記セハ、後藤

太市・上原平三・野村安右エ門・鈴木永六・

(449ウ)

永田藤四郎・杉原為助・鈴木孫造・中

根幸七・神谷龍助・石川八兵衛・藤井藤

吉・中根治郎吉等ニシテ、外数名ノ尽

力セラレシ同行、一々記スルニ遑アラス、

一、明治十三年、本山御再建ノ用材トシテ猷

木、杣ノ木・松ノ木等、第十二組ヨリ矢作川ヲ

利用シテ流木シ、日々各村落ヨリ御取持チノ

同行大多数ニテ之ヲ手伝フ、此際、暮戸野

村吉右エ門・中園鈴木幸吉・山崎後藤善助

ノ三名ハ、水勢ニ引込マレテ遂ニ溺死セラル、実

ニ悲惨ノ状、目モ当テラレズ、

一、明治十四年、本山両堂ノ製瓦ヲ、幡豆郡古

新田ニ設ケ、三河御門ノ懇志^(建脱)ヲ以テ寄附

シ奉リ、本山ヨリハ使僧トシテ、藤九郎・讃岐

脇屋大順・広島桑門志道ノ人々派遣セ

ラル、毎月十六日、当示談所ニ集合シ、信不信

ノ沙汰ヲナシツ、上納金取纏メ、瓦土持等ノ

人夫ハ、国内同行、弁当持参ニテ御取持

ヲナシ、五カ年間ニシテ製瓦ノ工事終ル、

一、明治十七年、御影堂ノ製瓦落成ニ付、現

場古新田ニ於テ、鬼瓦ノ組立ヲナシ、御門^(敬也)

(450オ)

(450ウ)

(451オ)

跡台下御下向ノ上、一般門徒ニ対シ拝観ヲ許サル、

(451ウ) 一、翌十八年、両堂ノ製瓦焼上リ、十九年ノ春、阿弥陀堂ノ鬼瓦ヲ当场ニ於テ組

立テ、御門跡台下御下向被為遊、一般門徒觀覽ヲ許サレ、台下ハ三河門末ノ懇

念ノ厚キニ、殊ノ外御満足ノ御沙汰アリ、

其後組立タル瓦ヲ数個ノ箱ニ納メ、野村

安右エ門・二村甚十・杉原為助・永田藤四郎・

細井幸右エ門・太田善造・野村源蔵・中

根倉次郎・中根善吉・高橋源七・近藤

安蔵・細井松造・杉浦又吉・中村惣右エ門・

岩月清吉等諸氏ノ尽力ニテ、京都本山

マテ送ル、此製瓦予算五十万円ニシテ、門

徒一戸拾貳円五拾錢ノ割當ニテ、五ヶ年ニ

分納、年額貳円五拾錢宛ヲ納ム、送瓦ノ際、

外ニ金壹千五百円ヲ御再建費トシテ上納

ス、古新田ナル製瓦場跡ハ記念トシテ石

碑ヲ建設シ、瓦形等ハ当场ニ保存ス、製

瓦落成ノ記念トシテハ、扇子四万本ヲ別製

シ、製瓦ノ実況ヲ写シテ、一本宛国内御門徒

『三河大谷派記録』(明治年間)

(453オ)

ノ全部ヘ配付セリ、

一、明治二十一年八月、御影堂ノ瓦葺人夫・

瓦職等ハ、三河国内ニ於テ御引受ケ申上ゲ、

翌二十二年五月九日ヲ以テ、上棟ノ式典ヲ

御挙行遊ハサレタリ、

一、明治二十二年、豊橋・赤羽ノ両別院、及当説

教場ヲ合併シ、岡崎ニ別院創立之儀

起リ、同年十一月四日、三河別院ノ名称御許

可相成ル、依之当説教場ハ、往古ヨリ由緒

殊ニ深キ道場ニシテ、僧俗ヲ問ハス有縁ノ

者ハ遺憾一方ナラス、時々集会談合ノ上、

十一月六日、第八・九・十三ノ組世話方・調印総代

上京シテ申請スト雖モ、或ル一部ノ故障ト寺

務所ニ於ケル事情等ニテ、裁決如何トモ測リ

難カリシテ、各位ノ込メタル熱、誠ハ效ヲ顕ハシテ、

従前ノ儘ニ据置キ、将来聞法ノ場所トナスヘキ

旨ノ御指令下ル、

一、明治二十四年十月廿二日ヨリ廿五日マテ、^(兼如) 歓喜光

院殿一百年ノ御忌ヲ厳修シ、同二十八日、

尾・濃・三ニ於ケル大地震ニテ、当场ノ庫裡・

玄関・門等潰倒シ、其他本堂・御殿向キ・

二一七

(455オ)

座敷等大破ニ及ビタルヲ以テ、一人五拾錢
以上ニテ法名一人ヲ記入シ、経読ノ方法ヲ以テ
信施ヲ募リ、修繕ニ着手シ、庫裡ヲ本堂
ノ南へ移転シ、玄關門ヲ建テ、長屋ヲ庫
裡跡ニ引直シ、大營繕ヲ加フ、其頃日夜尽力
ノ世話方ハ、野村安右エ門・後藤太市・神谷
伝三郎・永田藤四郎・上原平三・細井幸右エ門・
石川庄七・岡本庄五郎・樹神浅右エ門・杉原
為助・岩月善兵衛・山本伝兵衛・稲垣与一・
神谷枳助・藤井藤吉・神谷元右エ門・長谷川
清十・岩月小八・太田又十・倉橋富右エ門ノ
諸氏ナリ、

(455ウ)

一、明治二十二年十一月五日、即チ三河別院ノ名称
御許可ノ翌日、嚴如上人ハ現如上人へ御
讓職遊ハサレ枳穀邸^(註)ニ御隠退、

(456オ)

一、明治二十五年、本山阿弥陀堂瓦葺ノ工事、
是亦当国ニテ御引受ケ申上ケ、同年十一月
二十九日、上棟式ヲ御挙行相成ル、
一、明治二十六年、本山ノ負債実ニ参百余
万円ノ巨額ニ及ビ、之ヲ整理ノ儀御発表
相成、諸国ノ門葉御趣意ヲ体認シ、報

(456ウ)

謝ノ誠ヲ抽シテタルヲ以テ、年末ニハ皆済ノ
幸運ニ到ラセラレ、多年教学ニ就テ自由ヲ
許サバリシ負債ノ根芽ヲ断チ、法音宣流
ノ好機縁熟シ、御隠退ノ大御門跡^(註)ニ於カセ
ラレテハ、老ノ皺ヲ延シタリトテ、御満足ノ上、御
越年遊ハサレタリト洩レ承ル、

(457オ)

一、明治二十七年一月十五日、嚴如上人ハ御年
七十有八ノ御高齢ヲ此土ノ一期トシテ、遂ニ御
遷化相成リ、同二十九日、御葬儀御執行
遊ハサル、

(457ウ)

一、明治二十七年・八年、日清ノ戦役、
一、明治三十年四月、本山両堂御落成ニ就テ、
御遷仏・御遷座御供養ノ法会ヲ行ハ
セラル、

(458オ)

一、明治二十八年秋九月、当场ニ梵鐘新
鑄ノ協議整ヒ、三尺ノ大鐘ヲ經費金壹
千壹百参拾六円五拾八錢五厘五毛ニテ、上
原平三・細井幸右衛門ノ兩人、東参牛久保町
中尾十郎氏方へ赴キ製鑄交渉シ、各門
徒ノ淨財喜捨ヲ永代経ニナシ、其応募額
壹千六百四拾六円貳拾七錢四厘ヲ算シ、翌

二十九年春、梵鐘供養会ヲ執行セリ、

一、明治三十一年、慧燈^(達如)大師四百年ノ御遠忌、
本山ニ於テ嚴重御執行遊ハサル、

一、明治三十二年、當場ヘ、慧燈大師ノ御影
御下附ニ付、永田藤四郎・野村安右エ門ノ兩人、
御迎ノタメニ出京、四月、四百年ノ御遠忌ヲ
執行シ、使僧トシテ川崎顯成師ヲ被差向、

(458ウ)

一、明治三十四年十二月四日、御歴代双幅御
影ノ御成替ヘ御下附、途中知立石川庄七・
今村神谷藤太郎・橋目永田藤四郎ノ三戸
ヘ、御影御立寄之上、當場ヘ入御相成ル、

(459ウ)

一、明治三十七・八年日露ノ大戦役、
一、明治三十八年五月四日、天牌御下附ニ付テ、
高木銀衛氏奉迎ノタメ上京、第八組里村
杉山佐治衛方ヘ御立寄之上、当所ヘ入御相成、
御奉安ノ式ヲ行フ、

一、明治三十九年三月二十四日、本山財務整
理ノ儀ニ付テ、御門跡御代理慧^(現如)日院殿
御立寄、僧俗一同御召集ノ上、御懇談ア
ラセラル、

一、明治四十二年三月三十日より四月二日マテ、

(460オ)

当説教場ニ於テハ宗祖大師六百五十年ノ
大御遠忌ヲ執行イタシ、四月一日・二日ノ
結願逮夜・日中御法要ニハ、特ニ御門跡

(460ウ)

台下御親修、布教使トシテハ宮部円成師
ヲ差向ケラレ、経費貳千参百余円ヲ要シ、
日夜尊前ニ跪キ報謝ノ懇念ヲ運フ、縋素
老少堂ニ溢レ、境ノ内外立錫ノ地ナク、殊ノ外ナル
群詣ヲ見タリ、世話方ノ重ナル者ハ、高木銀蔵・

岩月嘉十・杉原為助・永田藤四郎・上原
平三・桑子清吉・後藤善四郎・岩瀬林八・
神谷藤四郎、其他数名、

(461オ)

一、明治四十三年九月六日、夏御文ヲ當場
ヘ御下附相成、高木銀衛・神谷藤四郎上京
拜受セリ、而シテ同十日ヨリ十三日マテ、布教使
近藤恵隆御経解拝読ノ出張ヲ命セラル、
一、本山御遠忌御待受ノタメ、御門跡

(461ウ)

台下当国ニ御駐錫遊ハサレ、法義ノ興隆
ニ力ヲ尽サセラレテ、各組御巡化、當場ヘハ明
治四十四年二月、風寒キ折柄ノ御厭モナク
御立寄被為在、山門ノ第十組・第十二組ノ
御難渋、急坂ノ個所ハ数丁ノ御徒歩モ

遊ハサレシト承ル、

一、明治四十四年辛亥ハ、宗祖大師六百五十年

御遠忌御正当ナレハ、四月十八ヨリ二十八日マテ、

本山ニ於テ嚴儀御執行遊ハサレ、御門前ノ

烏丸通り拡張、不明門通りヲ取毀チ、方形

ニ電車線路ヲ敷設シテ、三々五々数十個所樹

木ヲ植ヘ、白書院・黒書院・勅使門・大師堂

門・阿弥陀堂門・寺務所等御改築遊ハサレ、

諸準備全ク調ハセラレ、亦鉄道トノ交渉ヲ得テ、

団体参詣者ノ便ヲ謀リ、当国ノミニテモ、豊橋・刈谷

間、日々一千人宛、十日間一万人ノ輸送アリ、着発

駅ハ七条ト梅小路ノ両駅ニ区分シテ、日夜幾数

万ノ善男女ヲ昇降セシメタリ、夜間柵内ノ参拝

アリ、伝導^(通)ノ布教ハ各所ニ開カレ、宿舍ノ慰

問・伝導等枚挙ニ遑アラス、遠近ノ道

俗諸事遺憾ナキニ至ル、差シモ盛大ナル十昼

夜間ノ御法要、無魔事御満座ニ及ブ、

一、同年十一月二十一日ヨリ二十八日マテ、七昼夜御正当ノ

報恩講、春期ノ大遠忌キニ続キ、麗敷御

執行、境関千里ヲ遠シトセス、群詣亦市ヲナス、

一、翌四十五年四月二十三日ヨリ二十八日マテ、大谷御廟ニ

(463ウ)

於テ御遠忌御執行、^(現御・形御)両御門跡每座

御出仕アリテ、大谷ノ清キ流レヲ汲ミ法水ニ浴

スル道俗、幾千万ト云数ヲ知ラサリキ、

一、明治四十五年七月三十日午前零時三十分、

六千余万ノ同胞ヲ日夜愛撫シ給ヒシ我

明治天皇、遂々神去リマシノ、愁雲四方ヲ

覆ヒ、哀悼ノ情雨ハ国民悲泣ノ涙トナル、

^(大正天皇)今上陛下即時御踐祚アリテ、大正元年ト改元アラ

セラル、

一、大正二年六月、世話方集会ヲ開キ、當場

将来ノ維持ニ就キ、例年酬徳会ヲ執行

シ、国ノ為、法ノ為、及ヒ當場創立以來

功勞ノ篤志者ニ対シ、徳ヲ酬ヒンタメ、読

経ノ法筵ヲ結フ、依之十二月十七日ヨリ十九

日マテ三日間、第一回ヲ修シ、^(現御)前御門跡

台下結願法要ニ特ニ御親修、御紐解

アリテ、参詣一同ニ御親教遊ハサレタリ、

因ニ法名記ノ題字ハ、台下ノ御染筆

ナリ、

一、大正三年十二月十九日ヨリ廿一日マテ、第二回酬徳

会、御代理トシテ足利瑩含派遣、読経

(463オ)

(462ウ)

(462オ)

(465オ)

(464ウ)

(464オ)

致サル、

(465ウ)

一、大正四年七月六日・七日、天牌御成替並ニ
現如上人御寿像御下附ニテ、知立沢田屋御

立寄、平野屋御一泊、今村神谷札次郎・

柿崎後藤廉一・東大友杉上彦七御立

寄ノ上、入御相成、奉安御崇敬ノ式ヲ行フ、

一、大正四年十二月十七日ヨリ十九日マデ、第三回目

酬徳会執行、光徳院連枝代理御

派遣遊ハサレ、親シク法要ノ筈ヲ開カセラル、

一、大正四年十一月十日ヨリ京都ニ於テ、

御即位

(466オ)

今上陛下 大嘗ノ式典ヲ行ハセ給ヒ、十二月

ヨリ翌五年四月末日マテ、一般国民ノ参観

ヲ差許サレ、数万ノ入洛者アリ、

一、大正五年十一月三日、宮中ニテ

立太子ノ御儀ヲ行ハセラル、同

日、前法主^(現如)台下参 内御慶賀、

法主^(形如)台下ヨリモ賀表奉呈ア

ラセラル、同日本山ニ於テハ

奉祝講演会開催セラル、

一、同年十二月十五日ヨリ十七日マデ、

(467オ)

『三河大谷派記録』(明治・大正年間)

当场第四回日報徳会執行、

御代師欣浄院長島勝栄師

参勤、

(467ウ)

一、大正六年四月一日、光養磨殿御

得度式御執行遊バセラル、法号

ヲ闡如上人ト称セラル、

一、同年四月八日ヨリ十五日迄、三河別院

ニテ宗祖大師六百五拾回大御遠忌

執行、其内、十二日・十三日前法主^(現如)台下

御親修、十四日・十五日法主^(形如)台下御親

修アラセラル、

(468オ)

一、同年十二月十五日ヨリ三日間、当场

第五回日報徳会執行、三河

三ヶ寺参勤ス、

一、大正七年一月二十五日、新法主^(開如)台下、

久邇宮智子殿トノ御婚約御発

表アリタリ、

一、同年四月八日ヨリ十五日迄、御本山

(468ウ)

ニ於テ厳如上人二十五回忌御法要、

御三門^(現如・形如・開如)様御揃ヒニテ御修行セラル、

一、同年四月十九日ヨリ二十二日迄、當場

ニ於テ无^(達如)上覺院殿五十回忌法要

執行、御代理トシテ宣暢院殿御参

向セラル、

一、同年十二月十三日、常勤柿崎ノ後藤

又市死亡ニヨリ、若林ノ安田林吉代勤

トナル、

一、同年十二月二十日ヨリ二十式日迄、當場

第六回目報徳会執行、

一、大正八年五月七日、皇太子殿下ニハ、

賢所御前ニ於テ、盛儀御成年式

御挙行アラセラル、

一、同年十二月十九日・二十日、當場御内仏前

ノ宗祖大師六百五十回御遠忌修行、

一、同年十二月二十日ヨリ二十二日迄、當場

第七回目報徳会執行、

一、大正九年四月二十日ヨリ二十二日マデ、

御本山ニ於テ、聖徳太子壹千参百

年忌奉讃会厳修アラセラル、

一、同年十月一日、第一回ノ国勢調査ア

リタリ、

(470ウ)

一、同年十月二十九日、本山ノ内事改築

申出ラル、

一、同年十二月二十日ヨリ二十三日迄、當場第八

回目報徳会、并ニ故石川台嶺師五十

回忌及ビ、殉教難者追弔会執行、

御代理宣暢院殿御参向アリ、

一、大正十年五月一日、派内教勢調査

ヲ全般一斉ニ執行セラル、

一、同年十一月二十五日、皇太子殿下摂政

之任ニ着キ給フ、

一、同年十二月二十日ヨリ二十二日迄、當場

第九回目報徳会執行、因ミ今回

報徳会ニ御代理御参向ナカリシハ、本年

十月二十九日ニ於ケル、当地方ノ大電害ノ

為メ、米ノ収穫壺反壺俵乃至式俵半

ニ減ジタル被慘ノ結果、御参向御取止

ニヨリシナリ、

一、大正十一年十月十七日、前法主^(現如)台ト御

裏様恒子ノ御方ノ金婚式ヲ挙ゲ

サセラル、右ニ付キ、両陛下ヨリ御祝品

ヲ賜ハラセ給フ、

(471オ)

(472オ)

(469ウ)

(470オ)

(472ウ)

一、同年十二月二十日より二十三日迄四日間、
聖徳太子壹千参百年御遠忌及ビ、当
場第十回報徳会厳修、其節前

二日ハ御代師兼式事トシテ、若松勝
円師参勤アリ、結願日中ハ、
法主台下御親修遊バサル、
当時主タル世話方左ノ如シ、

舩越 上原平三 柿崎 後藤善四郎

暮戸 細井久孝 暮戸 中根小三郎

和会 天野初次郎 柿崎 平岩重吉

知立 高須竹次郎 柿崎 柴田周蔵

北本郷 岩瀬林八 築地 小林京次郎

堤 石川安五郎 中園 岩月藤次郎

東大友 伊与田浅次郎

一、大正十二年二月七日御前参時、前法主台下

ニハ御発病アラセラレ、翌八日午後四時四十

式分ニハ、早ヤ悲哉、御遷化遊バサル、

御年七十二歳ニテマシマス、九日ノ夜御霊

柩ニ納メサセラレ、十日午後五時半発急

行列車ニテ東京駅発、十一日午前六

時四分京都駅、御霊柩御着、同

『三河大谷派記録』(大正年間)

(474オ)

二十二日午後壹時、烏丸通り七条下ル
旧工作場ニ於テ、御葬儀御執行
相成リタリ、当场ヨリハ総代トシテ
中根小三郎・細井久孝ノ二名ガ
御葬儀ニ参列ス、

(474ウ)

一、同年四月九日より十五日迄、本山ニハ
立教開宗七百年ノ御遠忌ヲ御執
行アラセラル、当场世話方一同参詣
ヲ為シタリ、

(475オ)

一、同年九月一日、関東地方大震災
アリ、其被害ノ程度甚シク、是ガ為メ
ニ帝都ハ大半焼土ニ歸シ、横浜市ノ
如キモ殆ンド全滅ニ近キ被害ニテ、
生命・財産ノ亡ビタル事挙ゲテ
数フ可ラズ、左レバ御本山ヨリハ被害
地ノ見舞ヲ特派セラレ、尚ホ義捐金
総額壹万円ト、多大ノ物品ヲ被
害民ニ贈ラレタリ、

(475ウ)

一、同年十二月二十日より二十二日迄、当场
第十一回報徳会執行、御代師
トシテ、足利聲含師参勤ス、

(476オ)

一、大正十參年一月二十五日、皇太子殿下ト久邇宮良子女王殿下ノ御成婚ノ御盛典ヲ挙ゲサセ給フ、
一、同年三月十三日ヨリ十五日迄、當場ニ於テ、莊嚴光院殿御一周忌法要ヲ執行ス、御代師清澤勝兼師參勤ス、

(476ウ)

一、同年三月十九日午後一時半、靈(大谷)壽院殿御遷化遊(敬遊)バサル、
一、同年四月三日ヨリ八日マデ、御本山ニ於テ現如上人御一周忌、御盛大ニ執行アラセラル、

(477オ)

一、同年五月參日、新法主(開山)台下ニハ、久邇宮智子女王殿下ト、御成婚ノ式典ヲ挙ゲサセラル、當場世話方中根小三郎・天野初次郎二名、右御盛婚式ニ上京ス、
一、同年十月十八日、御歴代双幅御影御成替御下附相成リタルニ付、御迎ヒトシテ、暮戸細井久孝・柿崎後藤善四郎ノ兩名上京シ、供

(477ウ)

奉ノ途中、今月十九日、知立平野屋ニテ御泊リ、同二十日、今村伊吹惣五郎・橋目岩附菊次郎・東大友岩月勇太郎ノ三個処ヘ御立寄アリテ、當場ヘ入ラセ給フ、同二十一日、御紐解ヲ為シテ崇敬ス、

(478オ)

一、同年十二月二十日ヨリ二十二日マデ、當場ニ於テ宗祖立教開宗七百年紀念法要、及第十二回報徳会執行、御代師トシテ藤原勝良師參勤セラル、

(478ウ)

一、大正十四年八月、當場信徒総代改選ニ付キ御本山ニ上申ス、其前後任者左ノ如シ、
後任者 前任者

(479オ)

和会 天野初次郎 舩越 上原平三
富永 岡田房次郎 柿崎 後藤善四郎
暮戸 細井久孝 暮戸 中根小三郎
一、大正十四年式月六日ヨリ八日迄、莊嚴光院様第三回忌、本山ニ於テ御執行遊バサル、

一、同年三月九日、御詞光紹殿御誕生、

一、同年五月十日、(昭和天皇)今上陛下

銀婚式行ハセラル、

一、同年九月十八日、法主(彰如)台下ニハ、

新法主(調如)台下ニ御譲職ノ御旨

御発令、同月二十一日、主務省

へ御申請、翌二十二日認可ニヨリ、

闡如上人第二十四世ノ法灯

ヲ嗣ガセ給ヘリ、其伝灯式

ハ、翌十月十日挙行アラセラル、

一、同年十月一日、第二回ノ国勢

調査執行セラル、

一、同年十二月二十日ヨリ二十二日

迄、当場ニ於テ、莊嚴(現如)光院

様参回忌、并ニ第十参回報徳

会執行、御代師トシテ足利

瑩含師参勤セラル、

一、大正十五年四月十日ヨリ十五日

迄、御本山ニテハ、真無量(敬如)院

殿参拾参回忌法要厳儀、

(481オ)

行ハセラル、翌十六日、伝灯御披露式アリ、其ノ翌十七日・

十八日、有範卿七百回忌

御法会執行アラセラル、

一、同年七月十八日、見真大師

等身ノ御影御下附願ニツ

キ、後藤善四郎・天野初次郎・

細井久孝ノ三名、本山事務

所上局ト面談シ、右願書

提出シタルニ至リ、同年九月

五日附ヲ以テ、左記指令書

交付セラル、

写

(482オ)

愛知県碧海郡矢作町暮戸

暮戸説教所

其教場往昔ヨリ多年、地方教界之為、尽力不尠、尚近クハ両堂再建ニ際シ、取持ノ砌、大ニ顕ハレ、多年ニ互リ其功績顕著ナルモノ有之候

互リ其功績顕著ナルモノ有之候

ニ付テハ、今回特ニ、

宗祖大師白地ニ番形等身御影

御下附被遊候事、

但シ右御影ノ儀ハ、平素ハ本山ニ保

管シ、毎年其教場報恩講修

行ノ際ノミ、御下向ノ事、

大正十五年九月三日

本山寺務所 印

(483オ)

一、同年十月二日、宗祖大師等身御影、冥加金七拾円ヲ本山出納

部ニ納ム、

一、同年十月十五日、等身御影御下附ニ付キ、後藤善四郎・天野初次郎・

細井久孝ノ三名上京、御迎ヲ

致シ供奉シ奉リテ、翌十六日

知立町鈴畑勇方ニ御泊リ、翌

十七日若林都築島吉方ニ御

立寄、葛青木金昇方ニテ

(483ウ)

(484オ)

御泊リ、翌十八日今村伊吹宗

五郎方・宇頭神谷篠吉方・橋

目永田七五郎方御立寄、東

本郷正法寺御泊リ、翌十九日

ハ、愈當場ニ御下向ニ付キ、当日

ハ午前十時迄ニ、法中・信徒一同御出

迎ヒヲ申シ上ゲ、供奉シテ當場

ヘ入御アラセラル、同日午前十一時ヨリ

盛大ナル御紐解法会ヲ執行

ス、是即チ當場多年ノ宿志、是時

ニ成就シタリシカバ、世話方・信徒ノ喜

ビノ溢レナル可シ、因ミニ等身御影

ノ御下附ニ付キ多大ナル尽力者

ハ、柿崎後藤善四郎・和会

天野初次郎・暮戸細井久孝

ノ三名ニシテ、其当時ノ世話方ハ富

永岡田房次郎・舩越上原平

三・東大友伊与田浅次郎・柿

崎柴田周蔵・筒針竹田市太郎・

東本郷藤井増五郎・北本郷岩瀬

林八・橋目岩附彥次郎・若林竹本

(485オ)

(484ウ)

(485ウ)

常吉・中園岩月藤次郎・常勤者

安田林吉ノ十一名ナリ、

一、同年十二月十九日より二十一日マデ、

第十四回報徳会執行、御代師

近松瑩淳師参勤セラル、

(486オ) 一、大正十五年十一月十四日より、
聖上(大正天皇)陛下

ニハ御不例ニ渡ラセラル、公報ニヨリ全

国民ハ、等シク御平愉ヲ希シニ、嗚

呼悲キ哉、痛キ哉、翌十二月二

十五日午前一時二十五分、遂ニ

御崩御ナシ給フ、

昭和元年

十二月二十五日、皇太子殿下

御踐祚アラセラレ、昭和ト改元シ給フ、

一、昭和元年一月二十日、先帝

陛下ノ御追号ハ、

大正天皇 ト御発表アラセラル、

一、同年二月七日、大正天皇 御大

喪儀ヲ御執行、我カ法主(副如)台

下ニハ御裏様御同伴ニテ、御大喪儀

ニ御参列遊バサル、

『三河大谷派記録』(大正年間)

(487ウ~492オ) [墨付なし]

(492ウ) 一、主管者代務者

昭和廿二年

安受寺住職石川祐馨

昭和廿五年

正法寺住職長谷部義郷

昭和廿九年

安受寺住職石川祐馨

昭和卅二年

正法寺住職長谷部義郷

昭和卅五年

安受寺住職石川祐馨

(493ウ) 一、昭和十六年十二月八日、大東亜戦

争開始、戦役中、当教会は朝

鮮青年の練成所として、解放

する、

主管代務者勝連寺住職

一、昭和十九年十二月七日午後二時遠

州地震のため、本堂始め庫裡

等傾斜する、

一、昭和廿一年一月十三日午前二時、三

河大地震のため、本堂の傾斜

甚しく、新御殿・庫裡・水屋

等何れも倒壊したが、戦争の

最中で本土の空襲繁く、

手の附け様もなかった、

一、同年八月十五日、ポツダム宣言

を受けて、連合軍に無条

件降伏した事は洵に残念

であった、

(495オ) 一、同年未より廿一年一月にかけて、

当教会の復興を主題に、協議

会が暮戸神社の社務所で、

有志に依って開会された、

出席者は次の通り、

後藤定一 藤井留松

武田又四郎 岩月与一

中根 鏝 矢田栄次

細井万吉 細井孝之

右協議の結果は、万難を排し

て復興する事に決定、依って

(496オ)

門信徒の各位より寄進を仰

ぐべく、関係者は東奔西走し

たものである、

一、昭和廿一年五月、各方面よりの淨

財も漸く集ったので、工事

に着手した、即ち本堂・座敷

の修理を始め、庫裡・事務所・

玄関等の改築が次々と完成

されて行った、

工事費金貳万參千貳百

貳拾貳赤也、

鳶職 稲垣繁太郎

大工 岩月弥太郎

(497オ) 一、昭和廿二年三月廿五日

梵鐘は、戦争中、鉄材不足

のため、仏具等と共に供出

済みで、何となく淋しきを

感じて居たので、協議の上

再調する事に決定、

淨財額

(497ウ) 金拾七万壹千四百五拾九円也、

(498オ)

供出した梵鐘は、牛久保町
中尾鑄造所の製作であ
ったので、今回も同所に依頼、
価額は金参万九拾弍円也、
更に半鐘も藤島鑄造所に
申入れて新調した、

値段は金弍千九百円也、
一、昭和廿二年十月七日

梵鐘供養執行、大谷榮潤

(498ウ)

(信正院) 殿を御招待申上げ、
門信徒稚児等の参列で
いとも賑かであった、
委員は次の通り

後藤定市 藤井留松

岩月与市 前田由太郎

中根 鏝 矢田栄次郎

細井万吉 細井孝之

(499オ)

一、昭和廿三年一月二日、
金庫購入する、

価額金壹万参千円也、

一、昭和廿五年三月廿五日、

『三河大谷派記録』(昭和年間)

(499ウ)

蓮如上人の四五〇回忌を本日
より廿八日まで四日間、信正院殿
を御招待申上げて厳修する、
志納額金弍拾七万八千五百拾七円也、
志納白米六拾九俵壹斗也、
委員は次の通り、

(500オ)

後藤定市 藤井留松
武田又四郎 岩月与市
前田由太郎 細井万吉
中根軍二

(500ウ)

一、昭和廿六年三月七日、
宗教法人法の改正に依り、
当教会に於ても制規の設立
並に教会規則制定の件、承
認を(真宗大谷派管長大谷^(彌也)
光暢師の) 得べく、野村源作
氏外一名が京都御本山え
出張した、

(501オ)

一、昭和廿七年八月
納屋新築 拾八坪四合 一棟
工事費金四万八千五百円也、

鳶職 稲垣繁太郎

大工 稲垣廉治

一、昭和廿八年九月、

本堂・経倉修繕

委員は次の通り、

井上関次郎 野村源作

稲垣吉太郎 伊与田鐔吉

杉浦英一

(502オ) 一、昭和卅二年一月、三河大地震で

倒壊したまま放置されてい

た水屋、協議の上再建する

事に決定、

一、同年十二月廿七日、右水屋落

慶法要を営む、

(502ウ) 工事費金貳拾五万四千七百七拾七円也

大工 岩月敏夫

一、昭和卅五年九月廿六日、伊勢

湾台風に依り、新築後、僅

か三年ばかりの水屋が倒壊、

其の他本堂屋根・庫裡等も

相当被害を受けた、

(503オ)

(503ウ-504ウ)

〔墨付なし〕

出品

昭和卅六年四月御本山に於ける

宗祖聖人七百回御遠忌法

要に当り、其の記念展覧

会に当教会より、次の三点を

出品する、

(505ウ) 一、本堂瓦図 一部

一、明治廿八年本山上棟式用

扇子一丸若松 一本

一、天明年度以来現在迄

大谷派記録 一冊

以上、

(506オ)

〔墨付なし〕

宗祖聖人七百回御遠忌法要

関係記録

(506ウ) 昭和卅七年十月五日地元世話方集会

一、議題

1、祖師聖人七百回御遠忌法要を
厳修するの可否に就て、

2、予算案編成委員選任に就て、

3、法要委員会の設置に就て、

一、決議

1、に就ては全員一致で厳修すること
に可決、尚ほ期日は昭和卅八年四月
廿七日より廿九日まで三日間とする、
2、に就ては次の九名を武田又四郎氏
より指名する、

井上関次郎 伊与田鐔吉

鈴木金次郎 平岩柳松

三橋義治 中根軍二

伊与田勝三郎 神谷国島

林 辰五郎

3、に就ては早急に規程を立案
して審議する、

(508オ)
十月廿八日総集會 (他町村世話
方も含めて)

一、武田又四郎氏を議長に推し、次

の次第で議事を進行した、

1、始めの言葉 2、経過報告

『三河大谷派記録』(昭和年間)

3、管理者挨拶 4、規程に就て
5、委員委嘱状の交付の予算
案に就いて 7、其の他

8、終りの言葉

一、決議

4、に就ては満場一致で原案通り
可決、

6、に就ても満場一致で可決、

昭和卅八年四月一日委員会総会

一、議題

1、経過報告と今後の計画方針
等に就て、

2、役割に就て、

一、決議

1、経過報告に就ては之を了承、
今後の方針計画、及び役割等

に就ても満場一致で可決、

四月二十日地元委員会

一、議題

1、明廿一日より全員出席内外の整
備に就て、

2、稚児行列の道順に就て、

3、各控席の割当に就て、

一、決議

1、に就ては全員出席の上、教会内外

の整備に任ずる事、

2、に就ては管理者並に係主任の

意向を尊重する事、

3、に就ては管理者の指定に従
う事、

(510ウ) 御遠忌執行

四月廿七日(土) 曇天 追夜

先出仕

次、総礼

次、伽陀(登高座) 稽天人

次、敬白文

次、伽陀

(511オ) 次、大経(音木有之)

次、伽陀(下高座) 直入弥陀

次、総礼

次、正信偈 草四句目下

次、念仏讃 淘五 五遍返し

弥陀成仏ノコトカタハ

次第六首

(511ウ) 次、総礼

次、退出 御文大阪建立

説教 安藤源正師

四月廿八日(日) 曇天 晨朝

先、出仕

次、総礼

次、正信偈 真読

次、念仏讃 淘五 五遍返し

(512オ) 道光明朗超絶セリ 次第六首

次、廻向 我説彼尊

次、総礼

次、退出

(512ウ) 四月廿八日 日中

先、出仕楽(出仕)

次、総礼

次、伽陀 環珞経中 附物

次、登高座樂（登高座）

次、觀經（音木有之）

次、伽陀 直入弥陀 附物

次、総礼

次、正信偈 草四句目下

次、念仏讃 陶五 附物

生死ノ苦海ホトリナシ 次第四首

次、廻向 願以此功德 附物

次、退出樂 退出

(513オ)

(513ウ)

四月廿八日 迨夜 庭儀有之

先、乱声 着座樂 出仕

次、総礼

次、伽陀 万行俱廻 附物

次、登高座樂（登高座）

次、賦華籠樂

次、漢音小經 行道散華

次、散華籠樂

次、下高座樂 下高座

次、伽陀 真入弥陀 附物

次、総礼

(514オ)

『三河大谷派記録』（昭和年間）

次、正信偈 草四句目下

次、念仏讃 淘八 附物 五遍返し

五十六億七千万 次第六首

次、廻向 世尊我一心 附物

次、総礼

次、退出樂 退出

御文 御俗姓

御連枝信正院殿御参向

説教 太田力師

稚児

参勤法中

一般参詣者約壺千人 警察推定

(515オ)

四月廿九日（月）祝日 曇天

晨朝

先、出仕

次、総礼

次、正信偈 真読

次、念仏讃 淘八 五遍返し

南无阿弥陀仏ノ廻向ノ

次第六首

(515ウ)

次、廻向 我說彼尊

次、総礼

次、退出

(516オ)
御文 鸞聖人

御伝鈔上下卷

四月廿九日 日中 庭儀有之

先、乱声 着座衆 出仕

次、総礼

次、伽陀

次、登高座衆 登高座

(516ウ)
次、賦華籠衆

次、伽陀 身心毛孔 附物

次、漢音小經 行道散華

次、散華籠衆

次、嘆徳文

次、下高座衆 下高座

次、伽陀 真入弥陀 附物

(517オ)
次、総礼

次、正信偈 草四句目下

次、念仏讃 淘八附物 申ツメ繰上／位上

三朝淨土ノ大師等 次第三首

次廻向 願以此功德 附物

次退出衆 退出

満座御礼 管理者／法要委員代表

(517ウ)
説教 齊藤源章師

余録

一、当教会が、多年の宿願であった

宗祖聖人七百回御遠忌法要も、

慈に無事滞りなく、然も賑々しく

終了させて頂いた事は、偏に仏

祖の御恩徳に依るものと感銘す

る次第で御座います、

(518オ)
一、御連枝信正院殿には、御繁忙

の中、親しく御参向の栄相賜

わり、当法要に一段の光りを与

えられました、有難い極みで

御座いました、

一、多数、法中・各位の参勤を忝

うし、莊嚴の裡に法要を遂行して

頂いて、感謝の外は御座いません、

(518ウ)
一、三河別院列座の方々には三日間

一終始誠心誠意、声明に奉仕し

て頂いて、其の御苦勞を多とするもので御座います、

(519オ) 一、門信徒の皆さんには今回の法要に当り格別の御懇志に預り、衷心より厚く謝意を表したいと存します、

一、此の三日間を通して天候に恵まれ、何かと好都合であった事も喜びの一つでありました、

合掌

(519ウ) 昭和四十二年

十二月三十日

世話方会総会を開催し、「世話方会規約」並に「世話方会慶弔規程」の草案に就き、審議の結果、満場一致で可決、昭和四十三年一月一日より実施することになった、

(520オ) 昭和四十三年

一月二十日

当協会主管者より、世話方会長神谷国島外二十二名に対し、各係役の委嘱

『三河大谷派記録』（昭和年間）

状を交付する、

一月二十四日

(520ウ) 御本山に於ては、明治百年の記念法要に際し、其の両堂御再建用屋根瓦の木型を献納されたことの御依頼に応じ、当

教会所蔵の瓦型九十一個（全部）を、貸物自動車（壱頓積）で本山向け運搬

した、因に運転手は後藤、

献納責任者として神谷良次郎・石川

安治の両名が之に当った、

(521オ) 一月二十九日

一、午前十一時御本山の宗務総長応接

室では、去る廿四日献納した瓦型（九十一個）

の献納式が挙行されたので、次の諸

氏が列席の光栄に浴した、

岡崎教務所長 西道了恵

暮戸教会主管者 長谷部義郷

暮戸教会世話方 神谷国島

“ 八田甚松

“ 上田心治

一、式場では宗務総長代理（参務）に

対し、当方より瓦型の目録と瓦図の

原本壺冊とを呈上したのに対し、左

記の如く感謝状及び贈状を拝領

し、一同感涙に咽んだ、

記

感謝状

夙に貴教会は、宗門護持に盡力せら

れ、今春の明治百年宗門功業者追恩法

要を記念して、従来保存せられた貴

重な本山両堂使用の屋根瓦型を

御献納下されたことは、洵に有難く

受納致します、

仍て慈に、法主台下御染毫参字

額壺葉を贈り、深く感謝の意を

表します、

昭和四十三年一月二十九日

宗務総長 訓覇信雄 印

岡崎教区

幕戸教会御中

贈

一、法主台下御染毫 壺葉

右贈呈致します、

昭和四十三年一月二十九日

宗務総長訓覇信雄 印

幕戸教会御中

八月五日

午後四時、神谷国島は三河別院に

出頭、予て贈与の光栄を待ち受

けていた法主台下の御染毫参字

額を、西道輪番より拝領する、

一、昭和四十五年

三月卅日 殉教者石川台嶺師

両日

〃 卅一日 百回忌法要厳修

第一日 卅日 曇天

午後一時半逮夜 読経開始

音楽伴奏（新堀組楽人八名）

先、声

出仕

次、着座楽

次、惣礼

次、文類偈 真四句目下

念仏讃 淘五 附物

弥陀成仏ノコトカタハ 次第六首

返念仏 五遍

(525オ) 次、回向 世尊我一心 附物

次、惣礼

次、退出衆 退出

御文 廻りに

一、出仕法中 十一名

正法寺・正福寺・勝蓮寺・安養寺・

福万寺・浄慶寺・忠魂堂・宝林寺・

信照寺・誓寺・法林寺等

(525ウ) 一、声明方、(俗人) 六名 岡村の住人

一、参詣人、約六百人

一、電報、御連枝信正院殿 (大谷達磨) (川崎市 三男方)

より、次の如く来電、

法悦にひたられる皆さんの御姿を心に

浮べ、病氣とは申せ、殉教百回忌法要

参詣の御約束を果し得ず、申訳なく

皆さんに宜しく御伝え願う、信正院

(526オ) 一、説教 山田浄信師(予定の稲垣

舟泰師には胃潰瘍手術のため西尾

『三河大谷派記録』(昭和年間)

市山尾病院入院中、依而代講)

一、志納金

賽 銭

此 計

白 米

(526ウ) 一、謝礼、布教師(山田師) 金四、〇〇〇円也、

法中一人当り 金二、〇〇〇円也、
金五〇〇円也、

一、警備、警察官一名、
消防団員五名

一、式司、正法寺・勝蓮寺

第二日、卅一日 快晴

午前十時晨朝 読経開始

先、出

次、総礼

次、正信偈 中読

念仏讃 淘五

道光明朗超絶せり 次第六首

返念仏 五遍

(527ウ) 次、回向 我說彼尊

次、総礼

次、退出 御文 廻りに

一、出仕法中 十七名

正法寺・安受寺・教泉寺・茶屋教会・
碧海教会・光善寺・蓮泉寺・安受寺・
宗円寺・円光寺・西方寺・万寿寺・
本楽寺・法行寺・願成寺・三河別院
輪番

一、声明方、列座四名

一、参詣人、約八百名

一、説教、太田力師 二席

(528オ)

一、午後一時半 日中 読経開始

音楽伴奏（舳越組楽人八名）

先、乱声

出仕

(528ウ)

次、着座楽 御出仕

次、総礼

次、伽陀 先請弥陀

次、登高座楽 御登高座

次、始経 无量寿経

次、下高座楽 御下高座

次、伽陀 直入弥陀 附物

次、総礼

(529ウ)

次、願生偈

念仏讃 淘五 附物

三朝浄土ノ大師等 次第三首

次、回向 願以此功德 附物

次、総礼

次、退出楽、退出 御退出 以上

一、配撤役、二名 茶屋教会
碧海教会

一、式司、二名 正法寺
安受寺

一、声明方、三河別院列座四名

一、御親教、信明院殿（大谷修）（信正院殿代理）

より御親教約十五分間、

一、複演、太田力師より三段階に区

分して、然も詳細に御複演があった、

一、記念写真撮影

信明院殿中心に、世話方並に法要

関係者等五十有余名、撮影する、

尚ほ、殉教者を偲ぶ展示場、一般参

詣人、及び御本尊等の四種の撮影

を終り、御連枝様始め関係各位に

配布した、

一、信明院殿の送迎と伺候、

(530ウ)

(530オ)

午前九・四四分 新幹線京都駅

御発、

〃一〇・三三分 名古屋駅御着、

甲お重保氏御出迎

〃一〇・四八分 名鉄新名古屋駅

御発、

〃一一・一八分 同東岡崎駅御着、

中根豊三氏御出迎

途中、三河別院輪番御同車、

〃一一・三〇分 当教会御着、

〃一一・三五分 伺候 主管者
世話方一同

〃一一・四〇分 伺候 輪番
太田力師

〃一二・〇〇分 昼食 陪食 輪番、主管者
太田力師、甲村重保

午後 四・三〇分 迎賓門の内外には御出迎の

時同様、主管者始め世話方・門信徒多数御見

送り申上げた、尚ほ、中根豊三氏は東岡崎駅

迄、甲村重保氏は名古屋駅まで、夫々御見送り

致した処、蓮下^(蓮枝)には御機嫌いとも麗しく、

御帰洛遊ばされたのである、

一、参詣人、三月卅一日(第二日)は快晴に恵ま

(531ウ)

(531オ)

れ、朝来参詣人本堂の内外に溢れ、午後

には、立錫の余地もなく、御縁側にも

敷物の上に、数十名が正座する始末で

あった、総数推定約 名

一、警備、警察官
一名消防団員一〇名

一、殉教者を偲ぶ展示場の設置、

本堂北側の一室には、殉教者の関係遺

品等、凡そ 点を陳列して、当時を偲

ぶ資料としたが、観覧車は頗る多く、余

想外の成果を上げたので、注目された、

一、謝意

両日共、何等之事故なく、第二日には信

明院殿御参向の光栄を得て、荘

厳裡に滞りなく終了させて頂い

たのは、如来御加護之預物と、門信

徒各位の御協力御支援に依る事ハ

勿論、之に加うるに、世話方一同の団結、御

努力の結果で、御同慶仕至極ニ存じ

ます、茲に謹んで各位之御苦勞

を多謝すると同時ニ、今後共、当教

会之為に、御惜身御指導上

(533オ)

(532ウ)

(532オ)

ける様、御願ひ申上げます、

昭和四十五年三月卅一日 午後 暮戸教会

(533ウ~538オ)

〔各町内別志納金並ニ人員仕訳〕

(538ウ)

〔墨付ナシ〕

* 以下三七〇丁、墨付ナシ

* 卷末に朱印

三河国暮戸 真宗大谷派 説教場印

あり

(表紙)

『大堂造栄
絵本古今栞』(A本)

『三河大谷派記録』

写真削除

(01才)

写真削除

二四一

(02 オ)



(01 ウ)

同朋大学佛教文化研究所紀要第二十六号

(03 オ)



(02 ウ)

二四二

(04 オ)

(03 ウ)

写真削除

(05 オ)

(04 ウ)

写真削除

(06 オ)



(05 ウ)

同朋大学佛教文化研究所紀要第二十六号

(07 オ)



(06 ウ)

二四四

(08 オ)

(07 ウ)

写真削除

(09 オ)

(08 ウ)

写真削除

(10オ)



(09ウ)

同朋大学佛教文化研究所紀要第二十六号

(11オ)



(10ウ)

二四六

(12オ)



(11ウ)

(13オ)



(12ウ)

(13ウ)



(14オ)

(14ウ)



(15オ)



(裏表紙)



（表紙）



（末尾）



01オ 〈大堂／造営〉 絵本古今校序

水は下流して広大。君は臣にくたりて聡明とハマことなる哉。往昔上宮太子西天の仏教を。我朝に。興隆し玉ひ。飛驒のたくみに勅して。かず／＼の伽藍を造立したまひしを。はじめとして桓武帝の御時ハ。平安城の左右に。東寺西寺の梵刹。魏々として軒をならべ。ます／＼法威さかんなりしに。就中後一條のみかとの御宇」^{01ウ}東北の靈地をゑらび。法成寺を建られしとかや。その折から関白道長公。かの御堂を建たまひしむかしがたり。或官家の秘庫に侍りしに端／＼を抜翠し。盛事を图画し都鄙の兒童にあたふるも転法輪の因となりはへらんと爾云

寛政七かへりの春飛鳥の日

02オ (上)「撰州四天王寺」(中右)「続千載集 前大僧正道玄／むかしより三国はるかにつたはれる法そ此世のまもりなりける」(中左)

「西寺」(下右)「東寺」(下中)「羅生門」

02ウ 斬初のてい

03オ「寛仁はるの頃木造初番匠の作法行はれければ貴賤老少厳重の規式を拜せんと諸民庭上に群をなせりと」

03ウ (下)「御地築のてい」

03・04オ (上)「同じ夏の頃地かためとて男女そでをつらね長安洛陽の市店よりおかしげなる風流をあつめ加茂のけいは祇園会の山ほこ放下師のひきよミなどさま／＼の芸術をつくしけれバ日毎のにぎハひ筆にも

つくしかたくはべりしとなり」

04ウ (上右)「御地つきの休息のあいだにたハむれをなすてい」(上左)「花くるま風流いとしほらしく興じる」(下)「たはむれに加茂のけい馬のていをなすつくり物のしゅこうとは中々風流たくひなし見るものともにいさみをなせり」

05オ (上)「たハむれにたえまねりくやうのていをなす其よそほひあたかもよくにたり」(中)「御地つきのひま／＼にハ風流のたハむれことかず／＼日毎におほしといへどもことしげれば略しはべりて其ひとつふたつをこゝにあらはす」(下)「ほていからこあそひのていびゞしきこといふもさら也」

05ウ (上右)「同じ秋にもうつりぬれば御石築のはへりけるとて法宣諸国にいたらざる所なく集会講筵のしるしとておもひ／＼にのぼりとやらんいへるものあまた持きたりて所々に参列せり」(上左)「御石築のてい」(下右)「はあゑいや／＼」(下左)「はあゑいや／＼」

06オ「こゑをそろへてゑいやらやそれゑいやらや」

06ウ「陸奥出羽の按察使勅をたてまつりてみちのく金花山の材木をきりいださせ申べきよし国司の仰にしたがひそま人深谷に入みちなき所にミちをつくり藤縄にてこゝかしこに棧はしを作り」

07オ「人／＼丸木ばしを深山へわけ入てい」

07ウ・08オ (上)「人家なき山中にかり屋をたて山口より数里の山路を經ること遠ければあらたにはたごやをしつらひ酒肆肉店のたぐひ思ひ／＼に

草居をもふくめるも全く外のことにあらす御材木いだすにちからを添るゆへなれば也」

07ウ (中上)「山中にあらたにやと屋できたり」(中中)「こゝにとまらふ」

(下)「御用木によりて山中ひ鍛冶やできる」

08オ (上中右)「大木じや」(上中左)「これがよかろ」(中左)「あら木をこなすてい」(下)「道なき所にみちをつくるてい」

08ウ (上)「まことに隣里郷党のにきはひいふ事なし」(下)「滝の上より材木をおとすてい」

09オ (上)「谷をへて御材木とりいだすてい」(下)「さて今般切いだすべき樺等たに底よりミねに引きあけあるひハ高岳より屈曲の長途をへて里間にいたる人民の勞いふばかりなし」

09ウ (中右)「車引などいふあるは東国西国うらゝよりなにはのうらにいたり淀川より加茂川の分流えふねうつして都にいる」(中左)「結縁の道俗つなを引あまた打むれ四宮がはら山しなのさとにむかふ」(中下)「はやくさきへ行むかふの石ばしをあしちかふ」(下)「ゑいやゝゝ」

09ウ・10オ「雑木のたぐひハ近江美濃の国司にあふせて湖水をへてあふさか山を過日の岡崎をこへ京洛にいる又所々の社廟に年久しき神木など神宣によつて切いだしあるひハ嶮路を引出しがたき深谷など洪水不時にもよふしよのまに山川を経て何がしのみなとにいたるさまゝ奇談国々より注進す」

10オ (下)「せくまいゝゝ」

10ウ (上)「南海遠帆の図」(下)「引あげましよか」

11オ (上)「今度御柱に用ひらるゝ樺松などいふたぐひハ阿武隈川をへて東海に引出し法力丸弘誓丸などいふかずゝのふねを作りて藤氏の太祖天児根命よりつたへたまふ藤の丸の船しるしをさし津々浦々のくんづかさ鎮護し船子ども心をあはせ東海より南海のうらゝゝをへてなにはのうらにいたる」(下右)「さてゝ見事なさいもくしや」(下中)「御材木着せん仕ましてござります」(下左上)「けがのないやうに」(下左下)「又材木がついた」

11ウ (上)「御普請木場のてい」(上中)「もはやひるじや」(上左)「たばこはならぬぞ」(中中)「いそがしいことじや」(下)「しづかにゝゝ」

12オ (下右)「仲々はようできました」(下中)「さやうゝゝ」

12ウ (上)「御柱立足代のてい」(下)「あぶないゝゝ」

13オ (上)「翌年春のころ御はしらたての御規式拜せんとて諸人群参せり」

13ウ (下)「げうさんなことじや」

13ウ (上)「御上棟のてい」(下右)「何かしの年御上棟これあり大工番匠参列して宝のつちをうち納む」

13ウ・14オ「程なく御堂供養の法会ありけれハ公卿着座あり」

14オ (上)「上棟の式おはれハ金銀の銭餅なとまきしを群参の男女児童こぞりてひろふ」(中左)「こゝへもらふぞ」(下)「けがをしやんな」

14ウ (上)「御わたましのてい」(中)「伶倫奏樂のていいにしへすだつ長者がぎをん精舎を立られ大聖世尊を請せられ諸天くだりて開繞したま

ひし梵筵^{ほんえん}もかくやらんとおぼゆ」

15オ 「誠に末世^{まごせ}の仏法^{ぶつぽう}を国王大臣^{こくわうだいじん}に附属^{ふぞく}すといへる経説^{きやうせつ}も今東北^{こんとうほく}の靈地^{れいち}に

あらはることさらに此^こころ諸寺院^{しよじいんさいこん}再建^{さいけん}の式^{しき}を拝^{はい}するにむかしを今に思ひ
ではなやかなることをゑがき児童^{じどう}のなぐさみとしはべる」

(下) 「法印源全法の道のりのみちむかしにかへる時にあひていまもか
はらぬおしへをそきく」

15ウ 寛政六年甲寅十二月十九日御免

寛政七年乙卯仲春下旬開版

吉葺堂蔵

江戸 須原屋茂兵衛

大坂 柏原屋清右衛門

書林

京 菊屋喜兵衛

同 菅屋勘兵衛

同 菊屋七郎兵衛

15ウ 御影堂まへ舞楽の図

16オ 御本山并御学寮御用御書物所京都御寺内下数珠屋町

丁字屋九郎右衛門

執筆者紹介

小山 正文

(同朋大学大学院非常勤講師 研究所顧問)

塩谷 菊美

(神奈川県立茅ヶ崎高校教諭)

武田 龍

(客員所員)

青木 馨

(同朋大学非常勤講師 客員所員)

安藤 弥

(同朋大学専任講師 所員)

高橋 良政

(日本大学法学部教授)

嘉木揚 凱朝

(中国社会科学院世界宗教研究所研究員 客員所員)

Gyana Ratna Sraman

(愛知学院大学非常勤講師 客員研究員)

同朋大学佛教文化研究所紀要 第二十六号

平成十九年三月二十五日 印刷

平成十九年三月三十日 発行

名古屋市中村区稲葉地町七―一
編者 同朋大学佛教文化研究所

所長 小島惠昭

電話 〇五二―四一―一三七三

発行所 同朋大学佛教文化研究所
印刷所 株式会社 一誠社